

2024年度
大阪府手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

乳幼児支援のあり方
～こめっこの進む道についての示唆～

報 告 書

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

はじめに ～企画にあたって～

乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、2017 年3月に施行された大阪府手話言語条例の施策として、同年6月に誕生しました。当初3年間は、日本財団から助成を受け、公益社団法人大阪聴力障害者協会と大阪府との連携・協力によって運営されました。その後、NPO こめっこ(特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構)が設立され、2020 年4月より、「こめっこ」「べびこめ」活動を引継ぎました。現在も「こめっこ」「べびこめ」は、大阪府の委託事業として実施しています。0歳～6歳の未就学児を対象とする「こめっこ」は毎月2回、第一第三の土曜日に、0 歳～3 歳を対象とする「べびこめ」は週 2 回、火曜日と金曜日に開催しています。最近では0歳台からの参加が増えて、2024 年度の「べびこめ」利用はのべ千家族を超えました。

一方、2020 年度からは日本財団の研究助成を得て、NPO こめっこの自主事業として「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」を続けてきました。言語脳科学、心理発達(人格形成)、言語獲得、学習能力(理解力・思考力)の 4 分野から、手話言語を獲得・習得する子どもたちにアプローチする研究で、その目的は、きこえない子どもたちの真の言語力を適正に評価することです。そのフィールドとして、就学後の聴覚障害児を対象に手話言語習得支援等を行う活動「もあこめ」を開催し、夏休みには手話合宿も行っています。

2018 年度から続けてきた「大阪府手話言語条例シンポジウム」は7回目を迎え、2024 年度は、「乳幼児支援のあり方～こめっこの進む道についての示唆～」をテーマに開催しました。第Ⅰ部(1月10日～2月8日)のオンデマンド配信では、こめっこ活動の体験型ビデオ紹介と題して、べびこめ活動を中心とする映像を配信し、「こめっこ参加ご家族の声 Part3」もお届けしました。多くの方々の心に響いた三組のご家族のお話は、本書にも収められています。

2月8日の午後に開催された第Ⅱ部シンポジウムは、昨年につづき遠隔と一部対面を導入したハイブリット方式で実施しました。まず、NPO こめっこ常務理事久保沢寛氏より、活動の参加状況や見えてきた成果と展望について報告がありました。つづく特別講演では、2022 年度に国から出された「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針」を作成するに当たって、有識者検討会の座長を務められた中川尚志先生(九州大学)をお迎えし、「新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ ～福岡の現況と、そこに至

る道筋～」と題してお話いただきました。指定討論では、医療分野から岡崎鈴代先生(大阪府立病院機構大阪母子医療センター)、教育分野から早川恵先生(福岡県立久留米聴覚特別支援学校)、支援中核拠点から中尾恵弥子先生(大阪府難聴児支援中核機能拠点 ひだまり・MOE)、こめっこ参加ご家族の小橋史佳・千穂子氏より、それぞれの視点での発表がありました。その後、研究チームの酒井邦嘉先生(東京大学)と武居渡先生(金沢大学)、こめっこ代表理事の物井明子氏も加わって、乳幼児支援のあり方について議論が展開しました。

とても多くの方々の納得と感銘を得ることのできたシンポジウムだったと感じています。どの分野の参加者からも、それぞれに共感と気づきの感想が届きました。子どもたちとご家族を信頼と安心のネットワークで包む支援を目指して、中川先生が大切にされている「挨拶できる関係づくり」を、分野や専門性の壁を越え、リスペクトをもって共に考え工夫できる関係構築を目標に、行政とも協力してがんばっていききたいと深く思いました。

日本財団、大阪府、公益社団法人大阪聴力障害者協会をはじめ、開催にあたってお力添えいただきました方々に感謝申し上げます。ご登壇くださった先生方には、情報保障のための資料提供、報告書作成の確認にも快くご協力いただきました。改めて、お礼申し上げます。

本書の内容は NPO こめっこのホームページにも掲載しておりますので、ご紹介いただければ幸いです。きこえない子どもたちとご家族の支援の一助となることを心より願います。

2025 年 3 月

大阪府手話言語条例評価部会長

「こめっこ」スーパーバイザー

河崎佳子(神戸大学)

手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト

乳幼児支援のあり方 ～こめっこの進む道についての示唆～

企画趣旨

NPOこめっこでは、乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」を実施すると共に、2020年度より「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」（日本財団助成事業）を進めています。まさに、実践と研究が表裏一体をなす活動として、毎年その経過や実績を報告し、さまざまな視点で議論するシンポジウムを企画してきました。今年度は、2022年度に国から出された「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針」を作成するに当たって、有識者で構成する検討会の座長を務められた中川尚志先生を講師にお迎えします。医療、教育、支援の中核機能拠点、保護者それぞれの立場からの指定討論に、研究チームやこめっこスタッフも加わって、乳幼児支援のあり方について議論したいと考えました。

尚、事前配信では、こめっこ活動「参加体験型の紹介動画」＆「参加ご家族の声Part3」をお届けします。過去の再配信動画も併せてご覧ください。

第Ⅰ部 事前配信

2025年1月10日（金）～2025年2月8日（土）12:00まで

事前に配信する動画視聴（オンデマンド配信）

- こめっこ活動の体験型ビデオ紹介
& こめっこ参加ご家族の声 Part3
- こめっこ研究について（2022年度報告の再配信）

第Ⅱ部 シンポジウム

2025年2月8日（土）13:00～16:30

ハイブリッド開催（Zoom&対面）

- 基調報告 詳細は内ページをご覧ください
- 特別講演

「新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ
～福岡の現況と、そこに至る道筋～」

中川 尚志 氏

九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 教授

- パネルディスカッション 詳細は内ページをご覧ください

◆ 指定討論

「医療系との連携のあり方から」

岡崎 鈴代 氏

大阪府立病院機構 大阪母子医療センター 耳鼻咽喉科 主任部長

「聴覚特別支援学校乳幼児相談担当の視点から」

早川 恵 氏

福岡県立久留米聴覚特別支援学校 乳幼児教育相談担当
他2組

参加無料

手話通訳・字幕あり

お申込みフォーム



申込締切

2025年
1月26日（日）

申込の詳細は最終ページをご覧ください

「こめっこ」はNPOこめっこの登録商標です



岡崎 鈴代 氏



早川 恵 氏

乳幼児支援のあり方～こめっこの進む道についての示唆～

第Ⅰ部 事前配信

-オンデマンド-

- ◆ 主催者挨拶 オリエンテーション 物井 明子(NPOこめっこ 代表理事)
- こめっこ活動の体験型ビデオ紹介 & こめっこ参加ご家族の声 Part3
- こめっこ研究について(2022年度報告の再配信)

第Ⅱ部 シンポジウム

-ハイブリッド開催-

2025年2月8日(土) 13:00～16:30 *途中休憩を挟みます

司会: 久保沢 寛(NPOこめっこ 常務理事)

● 基調報告 ～「こめっこ」はどこへ向かうのか?～

- ① 「こめっこ」の参加状況
- ② もあこめ(小学生こめっこ)合宿
- ③ 見えてきた研究の成果
- ④ 今後について

共同司会: 阪本 浩一氏・河崎 佳子氏

● 特別講演

「新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ

～福岡の現況と、そこに至る道筋～」

中川 尚志氏

九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学分野 教授

● パネルディスカッション

◆ 指定討論

- ① 「医療系との連携のあり方から」 岡崎 鈴代氏
大阪府立病院機構 大阪母子医療センター 耳鼻咽喉科 主任部長
- ② 「聴覚特別支援学校乳幼児相談担当の視点から」 早川 恵氏
福岡県立久留米聴覚特別支援学校 乳幼児教育相談担当
- ③ 「大阪府難聴児支援の中核機能拠点窓口から」 中尾 恵弥子氏
ひだまり・MOE 公認心理師・臨床心理士
- ④ 「保護者の視点から」 小橋史佳・千穂子氏
こめっこ参加ご家族

◆ ディスカッション

特別講演者・指定討論者に加え、研究プロジェクトメンバーの酒井邦嘉氏、武居渡氏、こめっこ活動メンバーの物井明子も加わり、ディスカッションを行います。



阪本 浩一氏

大阪公立大学大学院
聴覚言語情報機能病態学
特任教授
研究プロジェクト言語脳科学
分野チームメンバー



河崎 佳子氏

神戸大学大学院
人間発達環境学研究所教授
NPOこめっこスーパーバイザー
研究プロジェクト統括



中尾 恵弥子氏



小橋ご家族

言語脳科学・学習能力（思考力）分野

代表 酒井 邦嘉

手話を第一言語として概念を獲得する環境にある子どもを対象に、言語に基づく理解力や自然法則を把握する力、時間や空間の変化などを推論する力を調査することにより、手話で育つ子どもたちの確かな評価法や教育環境の改善に繋げています。

就学前児や小学生を対象に、要素間の法則性や関係性の発見、数量感覚等の思考力を測る問題を作成しました。言語を通してさらに複雑な概念を獲得する過程について、各個人の手話や日本語の獲得進度を指標として比較検討しています。さらに大人を対象として、手話の理解時や、思考問題の解答中の脳活動をMRI装置で検出できましたので、定量的な解析結果を報告します。



酒井 邦嘉 氏

東京大学大学院
総合文化研究科
教授



武居 渡 氏

金沢大学
人間社会研究域
学校教育系 教授



学習能力（理解力）分野 代表 武居 渡・河崎 佳子

知識や経験に頼らずに日本手話で内容を理解できるかを測る検査として、「日本手話モノログ動画」を作成しました。また、手話劇版「心の理論課題」動画も作成し、活動に参加している5歳～12歳のろう児に検査を実施しています。来年度は収集したデータを分析し、正答率や、回答内容の発達的变化について報告する予定です。



言語獲得分野 代表 武居 渡

こめっこに参加している子どもたちを対象に、手話と日本語の力を定量的に測定しています。手話については、文法（日本手話文法理解テスト）、語彙（日本手話語彙流暢性検査）、日本語については、文法（J.Coss）、語彙（PCT-R）を可能な限り、毎年各児に実施し、発達的な変化をまとめ、報告したいと考えています。また、語用・コミュニケーションについては、質問応答関係検査を毎年実施し、ことば（手話・日本語）によるコミュニケーションの発達についても毎年評価を行っており、その結果についても報告する予定です。



心理発達（人格形成）分野 代表 河崎 佳子 (研究統括責任者)

こめっこが支援する子どもたちの心理発達を、情緒、認知、コミュニケーションなど複数のラインから捉える縦断的研究を、観察、インタビュー、検査によって行ってきました。活動をとおして、0歳～1歳台から日本手話に触れてかかわり遊ぶ子ども達の目覚ましい発達を目の当たりにしています。そして、発達検査の評価は、手話言語が聴覚活用による日本語獲得を決して妨げないこと、むしろ心理的な健康と学習、豊かな家族関係を支援できること、さらには、言語獲得の重要なセーフティネットとなることを示しつつあります。来年度は、小学生を対象とする知能検査の結果も含めて報告する予定です。



目 次

はじめに

企画にあたって	河崎佳子	1
---------------	------	---

シンポジウム次第		3
----------------	--	---

目次		6
----------	--	---

主催者挨拶	物井明子	8
-------------	------	---

第Ⅰ部 事前配信

こめっこ参加ご家族の声 Part 3		12
--------------------------	--	----

第Ⅱ部 シンポジウム

【基調報告】 「こめっこ」はどこへ向かうのか?	久保沢 寛	26
------------------------------	-------	----

【特別講演】

新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ ～福岡の現況と、そこに至る道筋～	中川尚志	30
--	------	----

パネルディスカッション

司 会	阪本浩一・河崎佳子	
指定討論		

① 乳幼児支援のありかた 医療機関と療育施設の連携 ～耳鼻咽喉科医の視点から～	岡崎鈴代	41
② 聴覚特別支援学校乳幼児相談担当の視点から	早川 恵	46
③ 大阪府難聴児支援の中核機能拠点の窓口から	中尾恵弥子	50
④ 保護者の視点から	小橋史佳・小橋千穂子	54

コメント

・研究プロジェクトチームから	酒井邦嘉・武居 渡	59
・こめっこから～	物井明子	63
ディスカッション		64

【資料】

資料ー1 スライド		74
資料ー2 参加人数状況		100
資料ー3 アンケート報告		101

あとがき	河崎佳子	129
------------	------	-----

【主催者挨拶】

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構

代表理事 物井 明子

特定非営利活動法人手話言語獲得習得支援研究機構、NPO こめっこ代表理事の物井明子と申します。シンポジウムの主催者代表としてご挨拶申し上げます。

本日は2024年度大阪府手話言語条例シンポジウムへのご参加を誠にありがとうございます。今年度もみなさまと一緒に開催できることを大変嬉しく思います。

本シンポジウムは日本財団の助成、大阪府との連携、公益社団法人大阪聴力障害者協会の協力をいただき開催されております。

手話言語獲得支援事業「こめっこ」は、未就学児を対象として2017年度にスタートしました。そして、この大阪府手話言語条例シンポジウムは2018年度より開催し、毎年事業について発信してまいりました。また2020年度からは、「もあこめ」が始まりました。小学生を対象とする「もあこめ」活動を「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」の一環として実施しています。この研究プロジェクトは日本財団の助成事業で行っています。今年度もNPO こめっこスーパーバイザーの河崎佳子先生が中心となって、NPO こめっこ常務理事の久保沢寛と一緒にシンポジウムのコーディネートをしてくださいました。

それでは、今年度のシンポジウムについてご案内いたします。今年度のテーマは「乳幼児支援のあり方～こめっこの進む道についての示唆～」です。

第Ⅰ部は事前配信です。配信する動画は3つあります。

1つ目はこめっこ活動の体験型ビデオの紹介です。0～3歳児対象のべびこめ活動を中心に子どもや保護者の目線で活動に参加しているような構成で制作しました。

2つ目は2022年度からお送りしている「こめっこ参加ご家族の声」のPart3をお届けします。3家族のご家族の想いをお伝えします。

そして3つ目は2022年度報告「こめっこ研究について」の再配信です。ぜひじっくりご覧ください。

第Ⅱ部は、Zoomによるオンライン配信と対面のハイブリッドで開催いたします。

司会は大阪公立大学大学院特任教授の阪本浩一先生、神戸大学大学院教授の河崎佳子先生のお2人が共同で進めてくださいます。

まずは基調報告～「こめっこ」はどこへ向かうのか？～をNPO こめっこ常務理事の久保沢が報告いたします。

そして特別講演として九州大学大学院医学研究院教授の中川尚志^{たかし}先生をお招きして、「新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ～福岡の現況と、そこに至る道筋～」をお話しいただきます。

次にパネルディスカッションです。指定討論として4つの立場の方々からお話をいただきます。

1人目は、大阪府立病院機構 大阪母子医療センター耳鼻咽喉科主任部長の岡崎鈴代先生より「医療系との連携のあり方」、2人目は、福岡県立久留米聴覚特別支援学校乳幼児教育担当の早川恵先生より「聴覚特別支援学校乳幼児相談担当の視点から」、3人目は、大阪府難聴児支援中核機能拠点である「ひだまり・MOE」の公認心理師・臨床心理士の中尾恵弥子さんより「大阪府難聴児支援の中核機能拠点窓口から」、最後にこめっこ参加ご家族の小橋史佳、千穂子ご夫妻より「保護者の視点から」をお話しいただきます。

最後のディスカッションでは、特別講演者、指定討論者に加えて研究プロジェクトメンバーの酒井邦嘉先生、武居渡先生、こめっこ活動メンバーの物井明子、私も加わりディスカッションを行います。

ご参加いただいているみなさまは、様々な立場で、ろう難聴乳幼児と保護者への支援に関わっておられると思います。みなさまにとって有意義なシンポジウムとなりますよう、ご協力・ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

第 I 部

事前配信

こめっこ参加ご家族の声
～ Part 3 ～

こめっこ参加ご家族の声

～part 3～

こんにちは。ハリーです。こめっこのスタッフをしています。今からご覧いただく動画は「こめっこ参加ご家族の声 Part3」です。

こめっこにやってくる子どもたちのお母さん、お父さん、それぞれの思いを語っていただきました。どうぞゆっくりご覧ください。

2歳男児 母

息子は今2歳2ヵ月で、両耳共に人工内耳をしています。べびこめには6か月から通っています。通い始めた頃は、週に1、2回の活動だけで本当に手話を覚えられるのか不安でした。

でも、べびこめに参加するのと、家でもこめっこの動画配信を見ていた効果もあってか、1歳を過ぎて少しずつ手を動かし始め、1歳半を過ぎて急にいろんなことを伝えてくれるようになり、2歳になってコミュニケーションに困る事はなくなり、成長に驚いています。

2歳を過ぎた頃、息子が「牛乳が欲しい」といったのですがたまたま冷蔵庫がなく、「今牛乳ない、買ってなかった」と伝えると泣いてしまいました。そこで、「パパ、今仕事でお外にいるから、買ってきてもらおう！パパが帰ってきたら牛乳飲めるよ！」と説明すると、泣き止みました。諦めたのかな？と思いましたが、パパが帰ってきて、「そうだ！牛乳だ！」とパパのところに駆け寄っていったのを見て、ちゃんと私の手話が伝わって分かっていたんだなぁ、と嬉しくなりました。

人工内耳については、1歳4ヵ月に受けた手術では内耳の骨の具合で埋め込みができず、手術ができたのが1歳8か月、半年前でした。現在の息子は本当に目で生きてるなぁという感じで、手話がぐんぐん伸びてきています。

人工内耳を付けることを嫌がることも多いので、何のために手術したのだろう、自分に人工内耳は要らないと言われていたようで考えこぶこともありました。こめっこのスタッフに相談す



ると、まずは子どもが最も自然に、楽しんで集中できる言語を吸収させてあげることが大切だと言われました。

こめっこの子どもたちを見ていると、人工内耳の効果には個人差があって、その時期もそれぞれようです。人工内耳なしで遊んでいても、お母さんに絵本を読んでもらうときには自ら人工内耳を取りに行くようになる子もいるよ、という話を聞いて、息子に任せてついていこうと思いました。



つい数日前には、人工内耳を付ける？と見せると、自分で付けたり、今は要らないと伝えてきたりがありました。また、後ろから声を掛けて振り向いたりすることも出てきて、聴覚も使い始めたのかなと感じています。

私はこめっこに出会う前は、人工内耳をすれば大丈夫と思っていました。でも今は聴こえなくても毎日楽しく過ごす息子を見て、手話があれば大丈夫と思うようになりました。もし手話がないまま過ごしていたら、私も息子も家族で気持ちを伝えあうことはできなかったし、毎日笑って過ごすこともできなかったと思います。

息子には「きこえないのが自分、それが当たり前」と思い、のびのびと成長していったほしいです。

2歳男児 父・母

僕たちの息子は2歳6ヶ月、両耳スケールアウトの重度難聴で内耳奇形があり、右耳に人工内耳を装用しています。新生児スクリーニング検査で引っかかり、「たぶん大丈夫だと思う、よくあることだから」と産院の先生から伝えられたと聞き、そこまで心配はしてませんでした。ただ、紹介いただいた大学病院で改めて検査をした結果、『重度難聴』と確定し正直戸惑いました。生後4ヶ月ごろから補聴器をつけ、その後は人工内耳の話も出てきました。

大学病院からは聾学校は行かなくていい、手話もしなくていいからね。教え方が違うから他の療育施設もいかないうちと言われていました。その時の正直な気持ちは人工内耳をしたら大丈夫なんだ！聾学校は大変そうだから通わなくてよかった。と思っていました。週に1回、病院のSTさんの訓練に通いました。その間も息子の発達がかなりゆっくりなことが気がかりで心配でした。7ヶ月をすぎても首が座らず、体も柔らかく縦抱きなんてまったくできません。病院の先生達もなんでだろう、性格かな？と言う感じで、解決策もないまま不安と心配な日々を送っていて、初めての子育てをまったく楽しめていませんでした。

補聴器を装用して4ヶ月経っても音への反応はなく、画像検査の結果、両耳とも内耳奇形ということがわかりました。補聴器での効果はない、両耳とも手術は難しいかもしれない。人工内耳をしても聴覚活用だけでは厳しいと思うので、聾学校か他の療育施設を早めに見つけてくださいと言われました。

検査結果も受け止めきれないまま、別のところを紹介されるわけでもなく、自分で探してくださいと言われて、人工内耳をしたら大丈夫と言われていたから、他にどういう手段があるのかがわかりません。心と頭がついていかず、とても混乱したのを覚えています。

それからバタバタと聾学校の教育相談に通い出し、1才2ヶ月の時に初めてべびこめを訪れました。

最初は奥さんだけが通っていましたが、べびこめの日はとても楽しそうでした。手術が難しいとわかった日に、家で涙ながらに「ママって呼んでほしい」と言ったのを覚えています。胸がグッと熱くなりました。

僕も今できる最善の事を全力でやろうと思い、べびこめに参加するようになりました。こめっこに出会うまでは、手術ができなかったらどうしようと思っていたのが、手話があるから大丈夫！という気持ちに自然と変わっていました。

そして他の先生の意見も知りたいと思い、内耳奇形などの症例の多い病院にセカンドオピニオンを希望し、転院しました。そこで診察していただいた時に、右耳は手術で効果は感じられると思うがやってみないとわからない。左耳は内耳が未発達の為空洞化しており、手術で髄液が漏れる危険性がある。もし保育園を考えているならば子どもがまだ小さい時は長時間の集団生活はお勧めできない、風邪などで中耳炎になると奇形の影響で髄膜炎を起こすリスクが高くなり危険だと。両耳とも三半規管が未発達のためバランスがとりにくく、体幹が弱い。歩けるようになるのは2歳半くらいかなとの確かな情報を聞いて、今までモヤモヤしていた事が瞬時に解決しました。

きこえや成長を見ながら手話を併用したり、その時の1番いい方法を選んだらいいと言われて点と点が繋がった感じがしました。

今振り返ると、私たちも初めての子育てと難聴児についての知識がなかったのもあり、すべてを病院という場所だけに任せきりになっていました。乳幼児期から色々な相談場所があるということはママにとっても子どもにとっても大切だと思います。どこに住んでいても、同じ様な情報提供があり、広い選択肢を知る、選ぶ事ができ



るようになってほしいと強く思います。

そして、出産したばかりの不安な時期にこめっこに出会えていたら、これからもそういったママ達ができるだけ早くこめっこに出会えるように願っています。

今は夫婦共に協力し、息子、家族にとって最善を尽くそうと聾学校とべびこめに毎週通うのが楽しみになっています。



今までは、全く手話の世界に触れてこなかったので最初は難しく感じました。でも周りのママさん達は皆向上心が高く、1番は子どもとコミュニケーションを取りたいと思う気持ちが強いので、その環境下で学べるのは本当に感謝しています。

いつも悩みや情報を共有する中で色々な解決策がみえてきます。もう自分達だけで頑張り過ぎず考え過ぎなくてもいいんだと思えました。

べびこめに通い始めて5ヶ月ほどで初めて息子から『電気がついた』と手話をしてくれました！本当にあの瞬間は嬉しかったし手話を学び始めてよかったと心から思えました。

親子で通っているのも、赤ちゃんだった子ども達が手話を使い始めていく姿や、スタッフの方の手話を息子が理解している様子も近くで見れて、毎回成長を感じています。

2歳半になった息子とのコミュニケーション方法は手話を使いながら、右の人工内耳の音への反応も少しずつでており、聴覚活用もしながら声掛けをしています。心配していた運動発達の面も10ヶ月で首が完全に座り、1才3ヶ月でお座り、1才11ヶ月で1人歩きを初めてから息子のペースで成長し、2才5ヶ月で走り出しました。

今の目標は手話や指文字、音声も使いながらわかり合えるという経験を重ねながらコミュニケーションを一緒に楽しむ事です。

僕たちと同じように子どもが難聴と診断され、どうしていいかわからない人達もまだまだいると思います。こめっこのような取り組みが、色々な地域で広まってほしいです。

生まれてからずっと息子にかけている言葉があります。

「あなたはあなたのままでいいんだよ」

これからも息子にとって1番の理解者であり、親子で色々なことに挑戦して

いこうと思います。

4歳男児 母

4人きょうだいの末っ子の次男が難聴があり、特別支援学校の保育相談部と幼稚部に通いました。口話中心の訓練が多く、自由に遊ぶ時間がほとんどなく、子どもの好奇心を育てるよりも椅子に座っている方が大事というところ、で疑問に思い、いろいろな環境を探していたところ、こめっこに出会いました。

そこで、これだ！とすぐ感じたんです。その中で、特に子どものもつ力や成長についての理解が私たちの望むところ、共感するところが多かったのも、例えば、ろうスタッフの方々の言葉から『子どもは遊びの中で自分を表現するもの』『ご両親が愛情をかけてとにかく可愛がってほしい』とおっしゃってくださったことが今も胸に残っています。こめっこに通っていて、楽しいと思える空間を全力で作られている姿にとっても感銘を受けました。

4人きょうだいの末っ子ですが、上のお兄ちゃんお姉ちゃんの存在にとっても助けられています。遊びや共感力は子供たちが遊びの中で、子どもたち同士で共感する姿は、子どもたちに私たちは敵わないです。4人の子どもたちと毎日を過ごす慌ただしさに、1人に時間をかけることは難しく、ほぼ不可能なんです。なので、家族一緒ならきこえない子どもを育てる環境が作れると思いました。

どんなことでも、家族で一緒にいることを大切にしてきた私たちですが、こめっかも全員で参加することが大事だと子どもたちと話し合い、毎回参加回数を重ねてきました。家族の中で共通の話題ができ、こめっこ、もあこめ、保護者交流会や勉強会で、それぞれ6人全員が楽しくすごせていることが大きなことでした。

夫はポルトガル語通訳を派遣していただいて、情報保障を実現してくださっているおかげで、夫婦でリアルタイムで参加できていることがありがたく、助かっています。

家族の中の言葉や文化の違いを超えて、手話という共通言語を見つけられたと思っている。小学校に通うきこえる3人のきょうだいが、友だちと手話を話題にすることが日常的になり、家の中での会話の中でも、友だちから教えてほしいとか、図書の時間に手話に関する本が友だちの間で人気だということとか、そういう話を聞いて、弟のことを友だちの中でも当たり前のようには話が出来るんだなと感じ、それが子どもの力ってすごいなと思っています。



ます。

例えば、私たちも参観日のときに教室のはしにいた子どもたちと会話をするのに、手話を使えば遠くでも伝えられる便利でやってますが、それをみたクラスメートたちから私に声をかけてもらうことがあったり、保護者からも声をかけてもらうことも多くなりました。



きこえにくい弟のことを家から出ても、こめっこの時と同じように当たり前のように話してくれるということがありがたいですし、大人がどんな企画をするよりも、確実に効果的に輪を広げてくれると思っています。

ろうスタッフの方々の人生から学ぶことが多いです。レクチャーを通して、いろいろな方の人生についてきく機会がありますが、私自身の生き立ち、育った環境を振り返ると共に、今自分は親となりどんな家族を作っていこうかというのを考えさせられます。家族とは何かということが永遠のテーマですが、毎回感動して良い話をきかせていただいています。

夫も同じように感じているようで、言語の違う土地に暮らすもどかしさ、家族の会話に感じる疎外感や母国語に対する劣等感などいろいろな思いがあるそうで、レクチャーを聞いて夫自身共感するところが多いということです。

成長すれば、家族の枠から出て、外の世界で自分を認めてもらう場所を求めていくことを学んだんですが、我が子が様々な思いを抱いたときに、家族としてどうやって受け止めてあげられるだろうか、という質問をろうスタッフにしたら、『こめっこに来ればいいじゃん。僕たちと話しをすればいいじゃん、そのためにこめっこがあるんだから。』という言葉をかけていただいて、そうか、その時のためにこめっこに通っているんだって！と気づかされたと同時に、家族としては、成長するんだなという、ちょっと淋しい気持ちもありました。

難聴のある次男のエピソードですが、手話でコミュニケーションをとるようになると、同時に発語も増えていっているのを感じています。とても驚いているんですが、感情のこもったことばは、ダイレクトに伝わるし、本人自身も伝えられるという実感を感じているように思います。とても楽しそう



に声を使って話もしてくれています。
特に、いいよー、オッケー！よっしゃー（拳）！助けて～！ありがとうございます！おかえりー。ただいまー。わかったー。なども毎日の会話でよく聞こえます。



きょうだいとの関りの中で、兄と2人でお布団に入って中で、これママが部屋から出たら、これで遊ぼうねとか、内緒話をしているところや、やってしまったことをきょうだいにはバレているんですが何とか誤魔化してお兄ちゃんのせいだと言って、みんなが「なんでやねん」というツッコミも、そういう姿も見られ、またこめっこが終わった後も、『友だちと下に行って一緒に遊ぶんだ』とスタッフに話しているところや、スタッフが『一緒に行っている？』といったら『だめ、がまんしなさい』というところなど、小さなところで会話がどんどん増えていることを感じているので、よかったなと思っています。

子どもの成長と共に手話の表現力が豊かになっていることを感じています。次男は、周りの人から手話を学んで、伝えたいことが確かに伝わる経験を積み重ねていると思います。表情豊かでユーモアのある、明るい子どもに育ってくれて嬉しく思っています。家族の手話力は、すでに5歳の次男が引っ張ってくれていて、私たちが次男と一緒に学ぶところが多いです。

こめっこのおかげで、社会や医療からの障がい者という見方を我が子に向けることなく、一人の子

どもらしく成長する姿を見ることができているのは大きな幸せだと思っています。家族の視野を広げてもらい、きょうだいを含め子供たちの未来を楽しい思いでイメージできるようになったのは、こめっこでお世話になったスタッフの皆さんと参加されている沢山のご家族のおかげです！

これからは、夫からも少しお話をさせていただきたいと思っています。

4歳男児 父

次男が難聴と診断された当初は、情報がなかったため大変でした。私たちが経験したことのないことでしたし、どうしたら良いかわかりませんでした。情報がなかったので、聞こえない息子をどうやって育てて行けばよいか、本やインターネットで出来る限り情報を得ようとしていました。

そんな中、ある方との貴重な出会いのおかげで、こめっこ繋がることができました。そこから私たちの人生だけではなく、特に息子の人生は大きく変わって

いきました。

それまでは、息子にとって私たちが唯一の存在でした。当時の私たちは、聞こえにくい・聞こえない人たちとはどんなやり方でコミュニケーションをとったら良いのか、イメージすらありませんでした。二年ほど経過したので、これまでを振り返って次男がどのように成長してきたか考えられるようになりました。

これまで読んだ本には、聞こえない子どもの家族が聴者の場合、多くは手話を知らないために子どもとのコミュニケーションの仕方すら分からず、大きな困難が伴うと書かれていました。そのため、私たちは次男の成長が遅れ、生活のあらゆる物ごとを理解するのに苦労するだろうと考えていました。

しかし今振り返ってみると、私の意見ですが、上のきょうだいたちが次男と同じ年齢だった時と比べても、成長の過程に大きな違いはなかったと感じています。唯一違うのは、コミュニケーションです。

次男は声で会話をしないので手話言語が必要なのですが、時間とともに自然に声を使うようになり、生き生きと楽しむ姿が見られるようになりました。小学部に上がる前の現時点では、きょうだいたちとそれほど大きな成長の違いは感じていません。

来年度からは小学部に入学するので、新たな困難にぶつかると思いますが、今はどうなるか全くわかりません。でも少なくともこれまでは、きょうだいと同じように成長してこれたと感じています。

あえて違う例を挙げるなら、次男はひらがなやカタカナを早い時期から覚えてしまったことです。単語の意味はわからないかもしれませんが、すでにひらがなを読むことができます。

別の話になりますが、これは特に大切なことですが、私たちは様々な場面で家族が一緒にいることを心がけています。次男は末っ子で、聞こえにくい子どもとして生まれたことは彼のせいではありません。次男とのコミュニケーションの壁を作らない事、末っ子の彼をできる限り輪の中に入れるためにどうしたら良いか考えることは、両親と兄弟たちの役割だと考えています。

そのためにできる範囲でみんなが努力をしています。私より妻のほうが手話が上手ですが、家庭で次男とのコミュニケーションが不足しているということはありません。あらゆる方法で、私たちから次男へ、次男から私たちへ伝え合うことができます。家庭の中のもう一つの言語として、日本手話を取り入れ家族で使うと決めた



ことで、我が家は大きな一歩を踏み出すことができました。

私の第一言語はポルトガル語で、妻の第一言語は日本語です。我が家ではすでに、二つの言語が混ざり合っています。新たにもう一つの言語を取り入れることは、次男だけではなく子供たち全員と妻や私にとっても、良い影響をもたらす家庭を豊かにしてくれると思っています。

また、次男が四人兄弟の末っ子であることで、兄・姉たちがお互いに刺激し合いみんなで次男を引っ張ってくれています。そのおかげで、四人とも同じように成長してこれたのだと思います。

そして一つ確かなことは、こめっこに出会わなければ、次男や家族の成長はありえなかったということです。

我が家での経験を通じて言えることは、聞こえる人と聞こえない人が集まり、聞こえない・聞こえにくい子どもを育てる上で、必要な情報交換をしたり日々の大変さを共有したりしながら、我が子の教育のためにどんな選択をすればよいかを、みんなで一緒に考える場所があることはとても大切なことだと思っています。

(原文)

Bem, acho que no início foi difícil porque não havia informação.

Não sabíamos o que fazer, era uma coisa nova.

Como não havia informação tivemos que ir através de livros ou internet, procurar informação possível para saber como educar um filho que não ouve.

Graças a um encontro furtuário conseguimos encontrar uma pessoa que nos indicou a comeikko. Através disso realmente veio transformar não só a nossa vida mas principalmente a vida do nosso filho.

Porque até esse ponto ele só nos tinha a nós.

Não tinha qualquer tipo de imagem, de que tipo de comunicação é que podia ter com pessoas que não falam(que têm dificuldade de ouvir) ou são surdas.

Agora que já passou algum tempo e podemos olhar para trás para ver como tem sido o desenvolvimento do nosso filho.

Eu acho que por aquilo que nós tínhamos lido que iriam haver dificuldades porque os pais e família são onvintes, por isso, não sabem nem linguagem gestual, não sabem bem como comunicar com a criança.

Nós pensamos que iria ser difícil e que ele iria ter algum atraso no seu desenvolvimento, na compreensão das coisas da vida.

Mas agora que passou algum tempo acho que na minha opinião acho que não estou a ver grande diferença em relação aos irmãos na mesma altura, na mesma idade.

A única diferença é a comunicação.

Ele não faz por voz, tem de fazer por linguagem gestual, se bem que agora que com o tempo que tem passado ele já se sente mais à vontade e já tenta naturalmente usar mais a voz.

Mas realmente eu acho que não tem havido assim grande diferença no desenvolvimento da criança pelo menos até agora antes de entrar na escola primária.

Por isso para o ano ele vai entrar na escola primária e vai ter outras dificuldades por isso não sabemos como é que vai ser, mas pelo menos até agora acho que não está a haver diferença entre ele e os irmãos com a mesma idade.

Pelo contrário, um exemplo, o facto de ele muito mais depressa ter aprendido a ler Hiragana e Katakana que os irmãos.

Por isso ele nesta altura já sabe ler tudo, pode não saber o significado das palavras.

Outra coisa que acho que talvez uma coisa mais importante que é o facto de nós querermos fazer tudo em família.

Por isso ele é o mais novo, ele não tem culpa por ter nascido assim.

Por isso acho que a função nossa, dos pais e dos irmãos mais velhos é tentar encurtar distâncias de comunicação, com o irmão mais novo integrá-lo o mais possível.

Por isso dentro das nossas capacidades, minha esposa sabe muito mais linguagem gestual do que eu, mas não há falta de comunicação com o nosso filho em casa.

Seja de que maneira for, há comunicação de nós para ele e dele connosco.

Por isso acho que esse talvez tenha sido o maior passo que demos foi nós como família querermos adotar a linguagem gestual como mais uma língua para ser usada em casa.

Porque eu falo português e a minha esposa fala japonês.

Por isso tudo é uma mistura em casa.

Mais uma, acho que só vai enriquecer não só o nosso filho mas com todos nossos filhos e eu e minha esposa.

Outra coisa é o facto de ele ser o filho mais novo de quatro, e tem os irmãos mais velhos sempre a puxar por ele.

Por isso acho que até agora não estou a ver grande diferença no desenvolvimento do nosso filho.

Mas uma coisa é certa, se não houvesse comeikko não estaríamos a ter esta conversa porque de certeza que iriam haver outras diferenças.

Por isso acho que o mais importante disto tudo é haver um espaço onde as pessoas surdas e ouvintes possam estar em conjunto e poderem transmitir as informações e as dificuldades que têm todos os dias, para saber qual é a melhor decisão a tomar na educação de uma criança surda ou que não ouve (com dificuldade de ouvir.).

ハリーです。さいごまでご覧いただき、ありがとうございました。いかがでしたか。

2月8日シンポジウムは、対面とオンラインのハイブリットで開催します。特別講演、パネルディスカッションがあります。ぜひご参加ください。お待ちしております。



第Ⅱ部

特別講演

パネルディスカッション

指定討論

コメント

ディスカッション

司会(久保沢)／ただいまより大阪府手話言語条例シンポジウム「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト乳幼児支援のあり方～こめっこの進む道についての示唆～」を開催いたします。

事前配信では、こめっこ活動の体験型ビデオ紹介、こめっこ参加ご家族の声 Part3 をご覧いただき、ありがとうございました。

本日の全体司会を務めさせていただきます、NPO こめっこ常務理事の久保沢寛と申します。本研究プロジェクトの研究統括者、NPO こめっこのスーパーバイザーである神戸大学の河崎佳子先生と共に、今回のシンポジウムをコーディネートしてきました。河崎先生は、大阪府手話言語条例評価部会長でもあります。

なお、本シンポジウムは、大阪府と連携協力しながら、日本財団からの研究助成事業の一環として開催しています。また、公益社団法人大阪聴力障害者協会の協力を得ています。

本シンポジウムは、医療や教育関係を中心に現地参加の方々もおられます。会場の様子は Live 配信で行っており、オンライン参加の皆さまには Live 配信用 URL をお送りしていますので、よろしければご覧ください。

記録、報告書作成のため、本シンポジウムは NPO こめっことして録画をしておりますが、著作権保護のため、参加者による録画、録音、保存等のご遠慮ください。

まず最初に、本シンポジウムの主催である NPO こめっこ代表理事 物井明子より一言挨拶を申し上げます。

物井／ただいまご紹介にあずかりました、代表理事の物井 明子と申します。

本日は Zoom、対面で大変多くの方にお越しいただき、ありがとうございます。開催地の大阪は快晴です。

このシンポジウムは 2018 年度から始まり、今年度で 7 回めとなりました。先生方にはご多忙の中、本シンポジウムに御出席を遠路よりはるばるいただきまして、心からお礼申し上げます。

今年も全国から医療、療育、教育、行政、ろう難聴児支援関係、通訳者など幅広い関係者の方々からお申し込みがありました。改めてお礼申し上げます。

本シンポジウムが、乳幼児支援のあり方について大いに寄与することを願い、私からのご挨拶とさせていただきます。

司会／シンポジウムでは、参加者のみなさまからのご質問を受け付けます。オンライン参加のみなさまは、Zoom ウェビナーの Q&A 機能を使ってご質問ください。ただし時間の関係で、全てに回答することはできない可能性があることをご承知おきください。また、手話による質問の時間を確保できないこと、大変申し訳

ありませんが、ご理解いただきますようお願いいたします。

ご質問の受付は、指定討論の先生方のお話が終わる 15:30 頃までとさせていただきます。

それでは、まず、NPO こめっこからの基調報告「こめっこはどこへ向かうのか？」を、私からお伝えします。

【基調報告】

「こめっこ」はどこへ向かうのか？

NPO こめっこ 久保沢 寛

1. こめっこ参加状況(ろう・難聴児について)

まず、2020年度～2024年度12月末時点までのべびこめ、こめっこ、もあこめ活動への参加状況を報告します。それぞれの対象年齢と活動頻度をスライドに示しました。こめっこには、コーダ、ソーダと呼ばれるきこえる子どもたちも多く参加していますが、今回は、ろう・難聴児のみに絞って報告します。

参加の実人数を図1に示しました。0～3歳の「べびこめ」は青、3～6歳の「こめっこ」はオレンジ、小学生の「もあこめ」は緑です。2024年度は12月末までのデータですが、べびこめの増加が見込まれます。

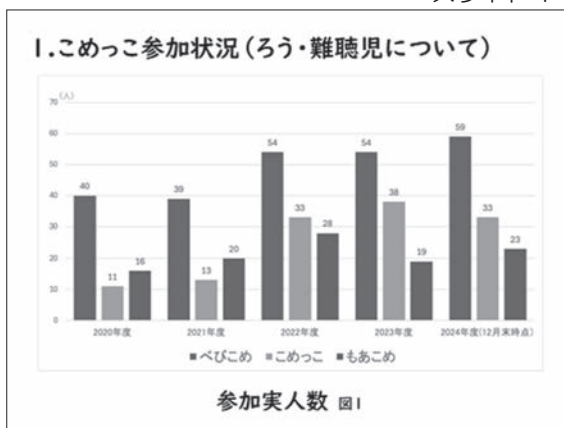
スライド3

次に、延べ参加人数についてです。べびこめは月10回、こめっこは月4回、もあこめは月6回の開催ですので、容易に比較はできませんが、図2のとおり、延べ参加人数はこめっこ・もあこめが一定数に達しているのに対して、べびこめは増えており、2024年度は延べ1000人に達する見込みです。毎回たくさんのご家族が来てくださって、スライド(写真)のような風景が続いています。

次のスライドですが、図1の参加実人数に含まれる子どもたちの内、見学や体験参加のみに終わったり、何らかの理由で参加が中断となったりした子どもたちを除いて、べびこめ、こめっこに定着して通い、縦断的研究に協力してくれている子どもたちは、現在のところ約50名です。スライドにあります

1.こめっこ参加状況(ろう・難聴児について)			
対象年齢	名称	活動日	活動頻度
0～3歳台	べびこめ	○平日べびこめ(毎週火・金曜日) ○土曜べびこめ(第1・3土曜日)	10回/月
3～6歳台 (幼稚園)	こめっこ	○土曜こめっこ(第1・3土曜日) ○放課後こめっこ (翌日に土曜こめっこがない金曜日)	4回/月
小学生	もあこめ	○土曜もあこめ(第1・3土曜日) ○放課後もあこめ (翌日に土曜もあこめがない金曜日) ○もあこめzoom(第2・4水曜日)	6回/月

スライド4



ように、べびこめからの継続が 30 名で A グループとし、こめっこからの継続が 20 名で B グループとしました。

これまでの観察と検査結果をふまえると、手話言語獲得については、当然と言えますが、A グループが有利です。「手話言語を獲得・習得する子どもの力」を明らかにすることを目的とする研究プロジェクトとしては、この A グループの子どもたちの心理発達や言語獲得のプロセスと、学習能力(理解・思考)を中心に検討することが主になります。

尚、手話言語の獲得と聴覚活用は支援の両輪であるというこめっこの考え方については以前よりお伝えしてきましたが、参考までに、A グループの 30 名のうち、人工内耳を装用している子どもは 14 人です。

2. これまでの研究と展望

2025 年度は、日本財団からの研究助成 6 年間の最終年度となるため、先にも述べたとおり、A グループの子どもたちの発達や言語獲得のプロセスと、学習能力としての理解力検査や思考力検査のデータの分析を進め、その結果を来年のシンポジウムで報告します。それによって、「早期支援において手話言語獲得を保障することの意義」について、われわれ研究プロジェクトチームからの提言を行いたいと考えています。

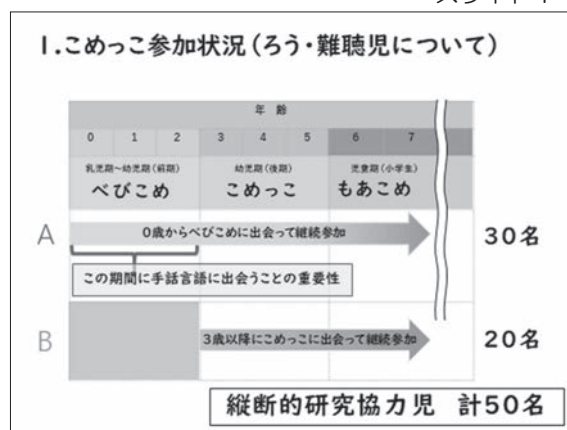
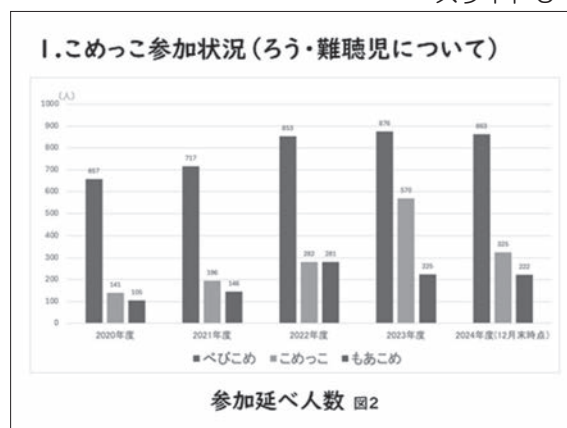
各分野の研究の進捗状況については、スライドの内容を、シンポジウムのチラシの 3 ページで紹介しています。ホームページでも掲載していますので、ご覧ください。

3. こめっことしての今後の課題と展望

次に、こめっことしての今後の課題と展望について 3 点述べます。

1 つめは、縦断研究の継続です。乳児期ないし幼児期前期に手話言語を獲得して育ち、就学する児童が、いわゆる「9 歳の壁」を超えて、抽象的思考を可能にしていく姿を追跡し、見守ることが重要だと考えています。

先ほど申し上げた A グループ児の多くは、日本手話の獲得と併行しながら、聴覚を活用して日本語を習得し、バイリンガルに育ちます。一方で、聴覚活用に依



らず、日本手話のみで育つ子もいます。そうした子どもが、手話言語力を活かして、3～5歳(幼児期後期)の間に日本語を習得していくためには、どのような支援が適切で有効か。その支援方法を明らかにしなければなりません。それが2つめの課題です。しかし、それはこめっこ活動の内容ではありません。そこで、「こめっこ」と理念を共有する事業所「ぐんぐん POE」を実践フィールドとして、研究を進めたいと考えています。

「ぐんぐん POE」は、NPO こめっこを母体とする別法人「一般社団法人 POE」が、一昨年度の夏に開設した児童発達支援・放課後等デイサービスです。

「ぐんぐん POE」は、手話コミュニケーションが保証された成長支援の場で、べびこめで日本手話を獲得して育つ子どもたちが通っています。こめっこと POE が連携することで、プレイフルに日本語を吸収し、学習できる方法を模索したいと考えています。

3点めです。2017 年から始まった活動をとおして、乳児期・幼児期前期の子どもたちと家族を対象とするこめっこの支援プログラムは、ほぼ完成しつつあります。支援内容は、乳幼児の手話言語獲得支援と保護者支援からなります。保護者支援の中身は、手話習得支援、交流、学習、心理士らによる相談です。われわれは、これらの支援を「こめっこメソッド」と呼ぶようになりました。保護者の手話学習の教材もほぼ整いました。今後は、このメソッドを全国に広げていく方法を構築したいと希望しています。

4. もあこめ手話合宿について

最後に、もあこめの手話合宿についてです。事前配信でもその様子を少し紹介しました。本日は時間の関係で詳しくお伝えできませんが、昨年9月の特殊教育学会で発表した内容をホームページに載せていますので、よろしければご参照ください。以上です。ありがとうございました。

久保沢／基調報告は以上です。

ここからの司会は、先ほどご紹介した河崎佳子先生と、大阪公立大学大学院の特任教授であり、耳鼻咽喉科医としてこめっこ研究プロジェクトにもご協力いただいている阪本浩一先生にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

河崎／ご参加の皆さま、改めましてありがとうございます。そして阪本先生、どうぞよろしくお願いいたします。

本シンポジウムを企画するにあたり、多大なご尽力くださった阪本先生に、司会をご一緒いただけることになり、大変心強く思っております。まずは、阪本先生からご挨拶と自己紹介をいただき、その後、本日の特別講演の講師である中川尚志先生のご紹介をお願いしたいと思います。

阪本／河崎先生ご紹介、ありがとうございます。大阪公立大学の阪本です。よろしくお願いいたします。

私は耳鼻咽喉科医でして、約20年前に兵庫県立こども病院に赴任した際から、子どもの難聴に関わるようになりました。大阪に戻ってからは7～8年ほどになります。

新生児聴覚スクリーニングの取り組みの中で河崎先生とご一緒する機会があり、私が以前からお世話になっていた秋田の中澤先生ともご縁があると伺い、そこから「こめっこ」に関わるようになりました。現在は酒井先生とともに研究プロジェクトに参加しており、また手話の評価部会でも微力ながらお手伝いをさせていただいております。

今回のシンポジウムは、九州大学の中川先生をお迎えでき、大変光栄に思っております。耳鼻科の立場としても、「こめっこ」などの音声言語と手話を含めた多職種連携の重要性を改めて実感しております。しかしながら、こうした取り組みは耳鼻科医の間ではまだ十分に知られておらず、それが誤解を招くこともあるのが現状です。中川先生のご講演は、そのような現状を打破する貴重な一歩となると確信しております。それでは、特別講演にご登壇いただく中川尚志先生をご紹介いたします。

【特別講演】

新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ ～福岡の現況と、そこに至る道筋～

九州大学大学院 中川 尚志

司会／本日は、中川尚志先生に「新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ ～福岡の現況と、そこに至る道筋～」と題して、ご講演いただきます。

中川先生は、福岡県において、ろう・難聴児とろう学校・地域の支援機関との連携を長年にわたり構築され、福岡における支援体制の基盤を築かれた立役者です。

ご略歴を紹介します。1986年に九州大学をご卒業後、2006年から福岡大学医学部で主任教授を務められました。2015年には九州大学耳鼻咽喉科教授に就任され、難聴領域においても国内外で広くご活躍されています。現在は日本聴覚医学会の理事長を務められておられます。2023年には全日本ろうあ連盟より厚生文化賞を受賞され、難聴のある方々への深い理解と支援に尽力されてきました。

それでは中川先生、どうぞよろしくお願いします。

中川／今日、このような場にお招きいただき、非常にありがたく思います。内容が多いので、早速始めさせていただきます。

今日は、「新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ」と題していますが、福岡県でどのように制度運営しているのか、福岡は相談が始まって4年経ちます。大阪でも相談を始めるとのことですので、どういう相談があるかを最後に含めたいと思います。

まず、私がなぜ小児難聴に関わるようになったのかをお話します。

福岡県は、名前は知っていてもどんな県かは分かりづらいと思います。面積は大阪より大きいですが、あまり大きくありません。人口は約510万で、北海道と同じぐらいです。最近北海道も人口減少しており、先日北海道を抜きました。福岡市を中心に約半分の人口が住んでいます。昔、八幡製鉄があった工業地帯の北九州、炭鉱があった筑豊、早川先生がおられる筑後と分かれています。

昔の国でいうと筑前、筑後、豊前、3つ全然違うところが一緒になった県で、ごった煮のようなところです。方言も、我々が聞くとわかりますが、北九州は瀬

戸内言葉、西は玄界沿海のみなさんご存じの博多華丸・大吉の話しているような言葉、久留米はもうちょっと丸い方言に変わります。県の中でも、違う文化を持ちます。人口密度が関東、関西、中京以外で1000人を超えるのが福岡県の特徴だと思います。

私が小児難聴に関わるようになった頃は、九大病院で、小児難聴専門医がおらず、小児難聴がなされていませんでした。福岡市のセンターのみがやっている状態で、私もまったく知識もありませんでした。難聴で聴力が50～60dBぐらいだと補聴器が必要という、原始的な理解でした。こどもの聴力検査をする機械もありませんでした。1997年当時、留学から私が帰った頃が、人工内耳が子どもにもなされ始めた頃です。その場合、阪大や東京までいかなければならず、私は福岡の出身で、親族も福岡にいますし、福岡で医者をしてこういった役割を得ているということで、福岡の子どもたちが、大阪、東京に行かなくてもいいよう、福岡でも人工内耳を始めようと考えました。

ただ、子どもの人工内耳は関連施設の協力が必要と言われており、それならまず難聴関連施設にあいさつしようと、さまざまなところに出かけました。

これが私の特徴の1つだと思います。現場で学んで行きました。教育現場に行くと、今度は学校の仕組みが医療現場とは違うことを知ります。学校はヒエラルキー社会で、校長先生が全てを許可します。でも現場は、当時は聴能、今では自立の先生たちの意見を聞かなければいけない。

当時、教育現場は医療機関を信じていませんでしたので、以下のようなことを心掛けました。保護者に対する説明を全て報告を行う。信頼関係を作るには、連絡を怠らないこと。当時はFAXですが、しっかりと連絡を行っていました。私は新参者なので、それぞれの現場の療育法を尊重しました。

もう1つ、学校の先生に養育者、ろう者、教育者の集まりに連れていってもらいました。医療として小児難聴を学ぶのではなく、教育、現場の話を聞いて、考えていきました。例えば福岡のろうあ連盟の支部で人工内耳の話をしてくれと頼まれました。25年前ですが、さんざんな状況でした。この後に話される早川先生のだんなさんも、その時におられました。3年くらい前、同じろうあ連盟関係で話をしたら、そのときはかなり好意的な反応が返ってきて、だんなさんと2人で「時代が変わったね」と話したのが印象的です。

早川先生の前の上司、坂口先生にいろんなところに連れていってもらいました。その時に横で見ていた坂口先生が、最近、「先生、あそこまでいろいろひどいことを言われてもよく黙って笑っていましたね」と話されていました。私は気にならない性格で、それらの意見は非常に勉強になりました。

福岡の療育は地域により異なります。それぞれの地域に聴覚特別支援学校が1校ずつあり、高等ろうはまた違う学校ですので、県内に5つの聴覚特別支援学

校があります。それと、福岡市、北九州市が政令指定都市なので、療育センターが県内に2つあります。手話や音声言語でみると、先生の異動で均質化されそうですが、学校によってカラーが違います。不思議だと、今も多少思っていますが、地域で考え方、システムが違うのが福岡の特徴としてあげられます。

このように(スライド7)システムを整えました。

そうすると、いろんな学校との付き合いが始まりました。場所は福岡ろう学校の図書室ですが、年に4回、定期的に懇話会をして、情報交換や勉強会をしています。1996年からなのでおよそ30年になります。

もう1つ、県全体の療育センター、ろう学校の先生、医療関係者が集まり、ご家族、当事者が来られ、支援する会も年2回やっています。このように教育界、医療界は非常に風通しがよい状態になっています。

そうすると、当たり前ですが人工内耳以外の相談が半数以上を占めていました。私の外来は、人工内耳は3割程度、あとは手話だけのろう児、高度・中等度の補聴器装用児とか、さまざまなお子さんが来ています。お子さんと言っても、私が四半世紀これに関わっているので、就職している人もいます。

子どもが育っていく様子を見ると、逆にこちらがたくさんのことを学んでいくことも、小児難聴の特徴だと思います。

人工内耳を選ばなくなると、一部の県では、病院には来なくていいなどと言われるようですが、私は就業まで、場合によっては、その後まで関わっています。我々はどの場面においても必要とされる、ライフステージによって濃淡はありますが、それが耳鼻科医として大切だと思っています。

難聴があるとことばの発達が遅れるとは知っていました。しかし、最初のスタートが周りに誰もいない状況だったので、言語発達の評価は当然できていませんでした。それをされている他の県の先生たちをうらやましいと思っていました。幸い、2006年から福岡大学で仕事に就き、教室の主宰者として言語発達に関われるようになりました。

その後ぐらいに、岡山の福島先生が、厚労省の戦略研究をなされ、その研究には武居先生も入られていました。子どもの言葉を分解してみる発想で、子どもの言語力を評価します。低いところを見つけ出して、介入をし、子どもの力を育てる。介入すると如実に成長します。こういった点で言語を見ていきますテニスボールを使って机・椅子の騒音を学級で減らしたり、支援システムを使って聞こえの支援などもしました。

聞こえを聴覚補償で補い、聞こえやすい環境を整えれば、難聴児は本人なりに育ってくれれば、最初は考えていました。しかし、それだけではないと知らされた、私にとって、記憶に残る方々がいます。

この方は、就学時健診で難聴を指摘され、私のところに来ました。かなり前の

ことで1998年です。今は就業されています。この方は通常の小中、県立の進学校に進み、難易度の高い大学の法学部まで、現役で入りました。つまり、言葉の方は何の問題もないということです。ところが大学3年秋に就活をしたら全く相手にされず、これで自信を失い留年し、5年で大学を卒業し、4年間の就職浪人をしました。今は就業されていますが、心の傷として残っているなど今でも思っています。先週、来られています。

この方は、うまく伝えられない、理解してもらえない。その結果、難聴である自分は劣っているのではないか、社会に受け入れられていないという気持ちに陥ったそうです。

この事例は福岡大学に行ってからですが、似たような子が2人来て、新スクで難聴の診断をされました。こちらは1歳6か月で人工内耳を入れています。もう1人は1歳9か月で人工内耳を入れています。他の症候はなく、療育、幼稚園も難聴児の受け入れが多いところで、私立の小学校に入り、中学・高校と内部進学し、非常に順調に見えました。2人とも中学までは成績が良かったです。A児は医科大まで進みましたが、B児は高校1年の時に不登校になり、高校を退学しています。私のところに通ってくる中には結構引きこもりのお子さんたちがいて、その人たちは中等度難聴の子どもが多いです。同じ生育歴でも差が出るのは、なんらかの足りないものが何かあるのではないかと考えました。

就活で挫折した例は、自分のことを伝えられなかった。高校を退学した子は、良さそうに見えたが、内面まで支援が行き届いていなかったのだと思います。

自信をつける、自尊心を育てることが、何よりも大切だと。聴覚を補って、言語を補っても、根本の課題はそこにあります。

手話のお子さんは、逆にこういうことがなく、そういった点で有利です。音声を選ぶとこういう問題が出てきます。それぞれに、メリット・デメリットがあると考えています。

第二次大戦が終わってから世界が裕福になり、障害者の人権の概念がはっきり言われるようになりました。1980年、WHOで国際障害分類モデルが出て、図のようにモデル化されました。病気があると機能障害、能力障害があるから、社会的不利を被る。これに関してはリハビリテーションで能力を伸ばして克服しよう。あとひとつは、補装具で克服する考え方です。医学的な介入で不利を減らすのがこのモデルで、個人モデル、今は医療モデルと言われています。このモデルの場合は、疾患がすべての原因であり、社会的な環境や障害者の心的苦痛への配慮がない。つまり、こちらを克服するのは本人と家族の責任だと考えます。

これを難聴に当てはめると、聴覚障害、言語発達遅滞、社会的不利になります。補聴器、人工内耳、言語療育。ただ、これだけでは足りないということが、先ほどの例で言えます。

2000 年に入って、国際生活機能分類 ICF が WHO で採択されました。国際障害分類モデルを肯定的に変え、社会や本人の心理的な状況を配慮し、障害を考える。隔壁を作っているのは社会の問題と考えるので、社会モデルと言われています。共生社会の概念の元になっています。

難聴だとスライド(スライド 25)のとおりです。

先ほどのように、補装具、人工内耳や補聴器、あとは、言語療育、音環境を整えることだけだと、環境因子への介入が不十分で、個人因子への介入はなく、社会活動の制限を生んでいると説明できます。

例えば学校においては、周囲とコミュニケーションが苦手だと、わからないことが多くなるので、どうしても自分が理解してもらえず、孤独感があります。仲間に入れず、疎外感も感じます。聞こえない自分は劣っていると欠失感を覚えることになります。

去年の春から、法的に配慮しないといけないと認められました、合理的配慮ですね。これは人権を鑑みて、必要、適切な変更、調整を行うことです。特定の場面で必要とされる制限や、過剰な負担は課さないという条件はあります。

こういう配慮から考えて、学校では聞き取りやすい話し方を周りにしてもらいたい。あとは音環境。視覚などの他の手段で情報を得る。わからないときはわからないことを確認する手段を確保する。教科学習で苦手な部分に関しては、それを配慮した授業をする。他の児童と同じようにできることが当たり前の環境。これらが学校における合理的配慮だと思います。

これを受けて、研究を行いました。「聴覚障害者の社会参加を促進する考えるための手法に関する研究」です。この本は、我々日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会のホームページで、無料でダウンロードできます。基本的な考え方は自閉症の子のバディシステムです。札幌医大の高野教授を中心で行いました。通常校に通っている場合、在籍級にどう介入するかを示しています。

この「バディ」という概念ですが、第三者を中に入れる、いろいろなことを一緒に考え、試す相手。1人でなくてもいいですが、その場を作る役割があります。本人が主体となり、次の目標に向かう。本人が困っていることを発信する必要もあるし、その能力を身につける。その結果、相手も一緒に学ぶことがあります。

このように(スライド 32)場を作っていきますが、場を作るのは、やはり大人でないとできません。

セルフアドボカシーは、当事者が必要なサポートを自分で声を上げて周囲と交渉をすることです。そのためには、聞こえないことがどういうことかを知ること。

聞こえるために必要なこと。これは通常校を想定しているので、補装具の基本的な知識。そして聞こえたら、できることを知る、このことは自尊心につながり

ます。社会制度、これは学校を出る段階でもいいのですが、人権のことや社会には支援システムがあることを学びます。自分たちはどんな法律に守られ、また使うことができるのか、学校にいる間に学びたいというものです。

これは若干宣伝です。同じ研究で作りました。ワークブック形式で書き込むことができます。自分で記入して、自分のこと、支援機器やコミュニケーションについて知り、セルフアドボカシースキルを身につけ、学べる内容になっています。

初版はカラーで、今は2色刷りになっていて、Amazonで1,600円で買えます。カラー版だと3,000円を超えて高価になるので、2色刷りにしました。こういう講演をすると、興味をもっていただき、そのたびに発行部数が増えます。2版が出て、3版はもう少しかかると思いますが、好評です。

早期発見・早期療育に向けて国も動いてくれました。

一番のものは難聴対策推進議連ができたことです。自民党の議連で、難聴対策をしなければいけないということで集まりました。議連がスタートして公になると、当事者団体やいろいろな組織が関与します。最初は人工内耳を普及させるための議連だったのですが、公のものになると、結局はICFの概念と障害者権利条約に基づいて、国の方針に沿って、さまざまな意見を集める場になりました。ジャパンヒアリングビジョンとして3つの目標を立てました。

1つは出生前、新生児期及び小児期における難聴対策。2つめは最近、近藤真彦がACのコマーシャルをやっていますが、加齢性難聴対策。もう1つ、難聴対策に関わる産業基盤を作る。3本の柱を掲げ、政府の骨太の方針に入れました。最初の出生前、新生児期及び小児期における難聴対策を実行するために、厚労省・文科省で検討され、調査研究がおこなわれたところ、都道府県の差が大きいことが浮き彫りになりました。

それで、地域差を減らすにはどうすればいいかとして議論されました。まずは取り組む耳鼻科医が少ない。我々の問題です。関連するはずの産科と療育に関わる小児科の共通認識がない。福岡は教育関係とは良かったですが、県によって風通しが違います。あとは、行政組織が難聴対策に対しての関心にかかなりの温度差があります。また当事者団体が入っていないこともあります。先ほど阪本先生のご紹介にもありますが、私はろうあ連盟と親しくさせていただいていますが、まったく知らないお医者さんもあります。当事者団体とのつながりも大切です。

今はインターネットでどこにいても情報が拾えます。地域差をなくそうと考え、厚労省、文部科学省が協力して新生児聴覚検査体制整備検討事業というのを始め、それに対する検討会を行いました。武居先生、酒井先生も入っておられましたが、新生児聴覚スクリーニングと早期療育の促進のため、保健、医療、福祉の連携、保護者への適切な情報提供などを最初に目標に掲げ、5回にわたって検討会が行われました。

そこで大項目でまとめて掲げたのは、広く情報を提供し、選択の自律性を担保し、継続した支援をすることです。基本的な考え方は早期発見の重要性、受け皿は、保健、医療、福祉及び教育の連携。当たり前ですが、本人、家族を中心とすること。周りが大騒ぎしてもしようがないので、本人、家族を中心とした支援。連携がなさそうに思われていた、障害者通所支援事業所なども協力していき、巻き込まないといけない。その子の人生を1つと考え、切れ目ない支援をする。今でも、最初は母子保健、障害福祉、文部科学省に行って、また障害福祉、お年寄りになれば老健というように、厚生省、文部科学省をまたぎますが、本人は1人ですので、切れ目のない支援が必要と敢えて書きました。下には、私の希望ですが、多様性や寛容性、共生社会の実現を入れました。

多様性、寛容性については、検討会の前に、人工内耳をするから手話はいらないとか、手話は手話で極めないといけないので、音声を使うな、など、極端な考え方を思い浮かべていました。それはそれで意味があることと思いますが、社会全体では受け入れがたい。昨年、テレビドラマの「不適切にもほどがある！」で寛容という言葉がもて囃され、日常用語になりました。多様性を認め合う寛容、こういう社会を作らなければいけないと書いてもらいました。厚生労働省の方は多様性だけでいいのではないかと言われましたが、様々な寛容じゃない地域が頭に浮かんでいました。多様性は認めるが寛容性は認めないグループは結構あるので、必ず、この2つを守るようにと掲げました。そして共生社会づくりが目標です。

言語コミュニケーションの手段、手話言語と書きたいとの意見もありましたが、公的文書は法律に定められていないことばを使うことが難しいので、このような書きぶりになっています。どのような選択をしても、本人を中心とした療育、教育を受けられる環境を作る。

最終的には、私のところに来ている子どもたちもそうですが、人工内耳をしていても手話を使う。こめっこは、手話が先行するイメージに見えますが、人工内耳の子どもが半分います。

人工内耳で育っている子も、大学に入ったり就業すると、今度は手話を習い始めたりする。小さい頃の制限は教育的には必要なかもしれませんが、自分の経験からあまり必要ないとは思っています。つまり、環境を整えることが一番大切で、最後は本人が選びます。バイリンガルが理想ですが、横で見ていると難しそうです。一部の子たちはそうになっています。

基本方針で打ち出したのは、検査体制をきちんとすること。地域差があるので、その地域の状況を把握すること。当事者を必ず入れること。多様性・寛容性に配慮する。切れ目ない支援を目指すこと。これらを掲げ、この文書を出しました。

地元の福岡県では、早期発見の事業を受けて検討会議を作りました。私は学識

経験者として入っています。

福岡県は福岡市、北九州市が政令指定都市で、残りが福岡県という大きな行政区分で、一体化することができません。それがこれまでの挫折に繋がっていますが、それを克服するために医師会を入れました。医師会は行政区分と関係ないので、県の医師会を中心に、小児科、産科、あとは各専門医会、子どもと関係する助産師、学校、自治体の人にも入ってもらいました。当事者として告知を受けた親である支援学校の PTA とろうあ連盟の福岡支部から委員を選んでもらっています。マニュアルを作り、今も改定しながら進んでいます。

同時に、県の医師会に県の事業を下請けして受けるところがあります。そこに福岡県乳幼児聴覚支援センターを作りました。大層な名前が付いていますが、職員は2人で週3回の嘱託です。パンフレットを作ったり、事務的なことをしたりしています。

センターの役割です。新生児聴覚スクリーニングから早期療育に流れていくときに市町村に繋ぐのが1つの役割です。もう1つは、1人の子どもがちゃんと療育につながっているかを見ます。

それに加えて、電話相談を入れました。

スクリーニングで難聴の疑いがあるから精密検査をすると言っても、せっかく赤ちゃんを授かったのにと、ご両親は頭が真っ白になるのが普通だと思います。

言われたときの、心理的な動きのスライド(スライド 49)です。障害受容の過程は混乱から回復まで、段階的過程となっていて、まずショックを受け、それは違うと否定をして、悲しみや怒りが湧いてきて、適応し、再起するという流れです。

早期の段階で「ちゃんと受容しなさい」と言われても無理です。逆に専門家の言葉が親の苦悩を深めます。まず、しなければいけないのは、事実を知って、認識を持つことです。認めたくないけど、こういうことをする時期だよねとわかり、実行に移ればいいという考えです。この時期、親はいろいろ揺れ動いています。揺れ動く気持ちに配慮できて、共感を示す。専門家が感じる正しいことを伝えるだけでは、解決しません。これは医者の人間性ではなくスキルだと思っています。こういうことを理解した上で医療に臨むことが大切です。あの先生が良い先生だからというのは、スキルを持っている先生と認識してください。

自治体が入ると、行政保健師に連絡が入ります。連絡が入らなくても、母子手帳に新スクの結果がわかるように書き込まれています。

支援センターでも相談を受け付けています。大阪も今度、相談を始めるそうです。福岡が4年経ったので、どんな相談が来ているかをまとめました。

4年間での件数は152件。延べでは1,026件。1人10回まではいきませんが、

結構なやり取りをしています。1年の件数を示しています。数があまり伸びないので、まだ宣伝が足りていないと思います。

相談は保護者や親族からくるかなと思って始めましたが、それは4割にとどまりました。行政、医療関係が6割でした。新しいことを始めたら、関係者が戸惑っていることがわかります。

相談内容を分類すると、早期発見、早期療育からどう流れるか、システムについての質問。未検査児に関するもの。リファーマで陽性者と言われた親、精密検査で難聴と言われた。その他になります。

新生児聴覚スクリーニングに関係することが8割でした。

時期による相談内容別の変化です。左から徐々に時間が進むので折れ線グラフにしています。保護者・親族はリファーマを受けたあたりから増えて、精密検査受診後の相談が多いです。その後の大きくなった子の相談もありました。医療機関はシステムについての質問が多いです。行政からは、ほぼのべつまくなしに相談がやってきます。検査をしていない子をどこに紹介すればいいのか。要精査の相談。難聴と診断されたあとの相談になります。

当初予想した通り、養育者からは、リファーマの判定後から精密検査受診後に多く相談が寄せられました。

具体例を紹介します。リファーマになり、耳がきこえない可能性がある、子どもにどう接していいかわからない。この方は片耳リファーマで反対側はOKですが、お母さんそのものの感情が不安なことを本人が自覚されていて、病院からセンターを紹介されました。不安を傾聴して、要精査だけでは未確定だということと、難聴についての質問に答えるという対応を行いました。

今度は、予想外ですが、パスであったが不安を抱く方です。子どもを見ていると音の反応が薄い。新スクでは問題なしと言われたが、難聴があるのではないかと。これも不安を聞いて、耳鼻科にかかりたいと言われましたので、その辺の耳鼻科では検査ができないので、検査ができる耳鼻科、久留米の療育機関への訪問を紹介しました。

こちら、パスだったが振り向かない、これにはさまざまな原因が考えられるので、まずは耳鼻科で難聴の有無を調べるとともに、あとは療育関係です。気持ちを受け入れてくれるところなので、療育機関への訪問を勧めました。療育機関に行きたいとのことでしたので、紹介しました。

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会のホームページに、1歳半までの耳のきこえと言葉の発達のチェックリストがあります。難聴と診断されていなくても自分で確かめるためにお勧めしたりしています。

福祉に関する質問もあります。両耳が聞こえない。子どもの将来を考えると不安だというのが多くあります。いくつかの内容をひとつずつ聞き取り、アドバ

イスをします。この方には安心感を与えることに努め、ピアカウンセリング、親の会、いわゆる当事者どうしが会える場を作りました。

片側難聴で、片方が聞こえない。一側性の場合は、福祉のサービスはありません。日常生活において、注意や配慮が必要ということを情報提供しました。一側難聴がけっこう多い。

他にきた相談は、難聴学級に通っているが、周りとうまくいかない。幼稚園の先生が、大きな音に怯えて隠れると。進級にあたり、ロジャーという補聴支援システムを申請したが、許可が出ない。このような社会制度の相談も入っています。

4年経ち、これからいろんな課題が見えています。やっぱり子どもさんの場合、相談先は小児科の先生が多いです。新生児聴覚スクリーニングで関わるのは、産科と耳鼻科、療育機関のように思いますが、小児科を巻き込むことが非常に大切です。福岡でシステムが動き始めたのは、小児科を巻き込んだからだとは私は考えています。小児科の先生は行政に強いので、このあたりを利用といいますか、乗っかると仕組みが動き始めます。

行政機関に関しては、年1回、県主催で研修会をし、保健師などの勉強会もしています。先日もあり、早川先生も講演されました。療育機関は、相手が見えているので、様々な協力し合える関係をつくる。医療機関もそうです。システムを今後も整える必要があります。

見逃されているのは一側性難聴です。両側性難聴は手厚いですが、一側性難聴となると放置されることが多いです。最近は療育機関も一側性難聴に関わってくれるようになっていきます。養育者がアドバイスを受ける機会が少ないので、療育施設でみていただける場合は、お願いするようにしています。

一側性難聴のことはあまり書かれていません。学会にスライド(スライド 69)のようなページがあります。Google から「一側ろう」「耳鼻科」などと検索するとひっかかります。一側性難聴に関する一般向けのページを作っていますので、機会があれば見てください。

最後のスライドですが、共生社会は言い古されていますが、やはりキーワードだと思います。聞こえない・聞こえにくい子どもたちと関わる時、もっとも大切なのは心情の共有。本人が周囲を俯瞰する力をつける。その結果、自立した生活への自信、自尊心を身につける。つまり当事者を支援し、療育教育体制を社会として整え、最終的には聞こえにくいことで不利益を被らない社会を作るのが目標だと思います。

今秋、東京でデフリンピックがあります。私も関わっていますが、耳鼻科は聴覚ドーピングと言って、難聴がないのに偽ってデフリンピックに出る人がいるので、その人たちをスクリーニングする、必要になったときの相談先を作るなどで協力をしています。最後までありがとうございました。

阪本／中川先生、非常に膨大な資料を時間内におさめていただき、ありがとうございました。お聞きして、勉強になりました。

先生のお話で、難聴の子どもたちで補聴器をしている方も診られていて、成人になられる。私も補聴器をしている人が大学に行き就職をする中で、いろいろお聞きしており、長く見ることは大事だと思っています。医療との関わりがあることが大事だと思いました。

それと、セルフアドボカシーです。自分のことを自分で説明できる力は、とても大事だと思います。今は合理的配慮とよく言われています。その中で自分の困っていることを、自分でわかっていて説明できる力を育てるのは大事だと思いました。

先生がおられて、切れ目のない支援の厚労省の提言に多様性の中に寛容性を入れていただいたことは、素晴らしいことだと思います。私たちも、違いを許さないことにぶつかることが多くて、社会が寛容性を失うと、みんなが暮らしにくくなると感じます。ありがとうございます。

河崎／ありがとうございました。中川先生は、去年9月にこめっこ、ベビーこめっこにも見学に来てくださいました。お忙しいのに先生から一度見てみたいと思っていたとおっしゃってくださり、その時も保護者の質問に丁寧に答えてくださいました。ありがとうございました。

【指定討論①】

乳幼児支援のありかた 医療機関と療育施設の連携 ～耳鼻咽喉科医の視点から～

大阪母子医療センター 岡崎 鈴代

司会／指定討論に関して、「耳鼻咽喉科医の視点から」を岡崎先生にお話いただきます。岡崎先生は、平成14年大阪大学を卒業され、その後、めまい、聴覚関係で学位を取得され、ご研鑽を積まれ、平成27年から大阪大学医学部の耳鼻咽喉科の助教として、幼児難聴の外来をされていました。平成29年からは大阪の新生児聴覚スクリーニングの精査機関としては重要な施設のひとつである大阪市立総合医療センターに赴任され、令和2年大阪母子医療センターに赴任され、こちらも新生児聴覚スクリーニングの精査機関としては、二分するような機関です。乳幼児の診療に関しては、大阪でとても大事な先生です。よろしくお願いします。

岡崎／大阪母子医療センターの岡崎です。よろしくお願いします。本日は、乳幼児支援のあり方ということで、耳鼻咽喉科医の視点からお話します。

自己紹介の代わりですが、小児難聴との関わりとしては、現在の職場である母子医療センターでの診療として、新生児聴覚スクリーニング(NHS、以下「新スク」)でひっかかったお子さんの精密検査から、補聴・人工内耳の手術などを行っています。また、連携している近隣療育施設との定期カンファレンスを行っています。この際に、当院の言語聴覚士の大黒先生、藤川先生も欠かすことのできない存在で、大変お世話になっています。その他、院外活動をいろいろお声がけいただきしていますが、具体的には新スク後の難聴児の精査状況を集計したり、教員への耳鼻咽喉科疾患の啓蒙、日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会の委員会で、言語評価を含めた健診内容を見直す取り組みにも参加しています。

乳幼児にとってきこえとは、についてです。生活リズム・場所を認識するための感覚であり、家族など環境と直接接点を持つ感覚でもあります。また、家族の声で安心するなど、感情に直結する感覚でもあります。言葉によらないコミュニケーションによる人への愛着形成に非常に重要ですから、早期発見、早期療育が重要となっています。

新スクの歩みについてです。日本では 2000 年に導入され、大阪では 2002 年に開始されました。その後、2017 年には母子健康手帳に結果を記載するように推奨されるなど、どんどん検査が浸透しています。

大阪府では、2017 年に大阪府新生児聴覚検査関係機関連携会議が持たれ、大阪府の行政、療育関係、医師会の先生、産婦人科、耳鼻咽喉科、小児科医で連携会議を持っています。目標としては新スクの 100% 普及と、公費負担制度の設立です。この活動の中で手引を作り、啓発活動や、精密検査後の調査をしながら、新スクの受検率を上昇させています。

2019 年には国でもジャパンヒアリングビジョンとして、出生前、新生児期、小児期における難聴対策に力を入れられるようになり、厚生労働省や文部科学省でも同様のプロジェクトが始まりました。

新スクの流れです。学会のホームページにも載っていますが、初回の検査は生後 3 日以内です。検査方法は従来 2 種類でしたが、より正確に取りこぼしなく精査できる自動聴性脳幹反応(AABR)が推奨され、買い直しなどの補助も大阪府でもなされるようになりました。これでリファー後、1 週間以内で再検査をするようになりました。結果はパスかりファーになります。近年では、リファーの人は生後 21 日以内に、難聴の原因となります先天性サイトメガロウイルス感染症を尿検査でできるようになりました。その検査までを一連のスクリーニングの流れとしています。

現在、大阪府における新スクの行政の補助です。直近で調べた限りでは、あと 2 市町村を残して、すべての市町村で補助があります。唯一、1 か所だけ所得制限が付いているだけで、だいぶ浸透してきている印象です。

2022 年の厚労省の「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針」では、項目がいろいろありますが、私は地域の実情に応じた取組の①新生児聴覚検査体制の整備に注目したいと思っています。リファー児を追跡調査するとありますが、そのためにはリファー時の検査結果を把握したり、受検率の向上、精度管理をしたりなど人手がいります。リファー児を追跡した結果、幼稚園・保育園から小学校、中学校、高校、就業まで切れ目なく支援しようとする、かなりの人手を要します。

令和 4 年の新スク関連の数字です。全国的には出生時に対する新スクの実施状況は、受検率 95%、未受検は 1%でした。初回のリファー率は 2%とこども家庭庁から報告されています。大阪府に当てはめると、5 万 7315 人が同年に出生しています。大阪府の耳鼻咽喉科医会の乳幼児対策委員会で調べている新スクリファー後の精査目的で病院を受診した方は 486 人おられました。出生数の 0.85%ですが、この方々に対しては、病院とつながって療育、補聴を続けていく形になります。ここでケアする必要があるのは、新スク未受検が 1%ほどい

るだろうということで、大阪府では 570 人くらいの未受検であり、進行性・遅発性難聴の子どもさんも、後々、新スク後に難聴で困る可能性があるため、注意が必要です。

大阪の精密聴力検査病院は 9 か所、5 大学病院と 4 病院があります。大阪母子医療センターは比較的南に位置します。精密聴力検査病院へのアクセスが悪いようなら、最初に二次聴力検査病院で受けて、その後、紹介という流れをとる人もいます。

大阪府耳鼻咽喉科医会の乳幼児対策委員会のデータです。新スク後の聴力精密検査機関別の検査数ですが、精密聴力検査機関で行っているのが 82%、二次聴力検査機関を経て診断に至られる人が 18%でした。

精密検査結果ですが 2022 年は 486 件ありましたが、両側が正常の人が 35%、片側難聴が 25%でした。この人たちは何らかのきこえに配慮が必要な可能性があるだろうということです。両側難聴が 37%で、この人たちには、補聴や療育が必要です。

新スク結果の片耳ごとの精密検査結果です。片側リファーの人は、片側パスなのですが、パスの方の耳に関しても 32%で難聴がみられました。リファーの耳に関しては 61%で難聴でした。新スクをパスしても約 3 割が難聴なので、新スクが万能というわけでもありません。

大阪府の療育を巡る現状です。療育施設として特別支援学校が 4 校あり、それを取り巻くように、障害児通所支援教室であるびよんびよん、ゆうなぎ、なないろなどがあります。やや大阪の中心部に集中している傾向があります。本日お世話になっている、ひだまり MOE、こめっこも大阪の中心に位置しています。

大阪母子医療センターと療育施設の関わりです。精密聴力検査で難聴診断されると、該当校区の聴覚支援学校と通いやすい通所支援教室を提示して、たいていは複数施設を見学して、通学・通所先を決定しておられます。そして、療育や補聴を開始します。まずはトータルコミュニケーションを行いながら、個々にもっとも適したコミュニケーション方法を模索します。連携療育施設と定期的にカンファレンスをします。これは個別のケースカンファレンスです。療育や補聴を適切に行われているか、補聴器の導入やフィッティングをする施設は、それについても話をします。発達やコミュニケーション方法、人工内耳の適用など、意見交換することも多いです。母子センターはやや南に位置するので、大阪府の南の療育施設や、和歌山ともつながっている特徴があります。

大阪府の聴覚障害児支援中核機能は最近のトピックであります。厚労省ホームページには 5 項目が掲げられています。一つ目の協議会はすでに設置されています。

厚労省による協議会や中核機能についてのイメージ図です。大阪府では中核

機能はひだまり・MOEさんが担っています。その周りに当事者、福祉の方、行政の方、我々などの拠点病院、医師会などの団体の皆さんで構成するイメージです。中核機能のイメージは、厚労省が3つ提示しています。大阪府は連携型がじっくりくると思います。既存の福祉情報コミュニケーションセンターで聴覚支援学校などと連携をとって、やっていきたいと思いますというものです。

2、3、4で、特に3、4の家族支援や巡回支援の実施は、各聴覚支援学校や通所施設もしていますし、大阪府は人口も多いので、福祉施設がしていることを、ひだまり・MOEなり、中核機能のところでサポートすることも重要な役割だと思います。2として、連携がありますので、2～4は中核機能を中心に、府下の複数施設がしっかり連携を取っていくことが重要です。5に関しては、今回のような研修会を開いていきたいと思いますということです。

耳鼻咽喉科医が期待する中核機能の役割について。

1つめはコーディネート機能です。もちろん、新スクリファアを経て精査の上、難聴で療育される方、手話を習得する人がいることが大前提です。プラスアルファで期待することとして、その新スクの流れに乗ることができなかったなどで、支援を必要としているお子さんを把握し、適切な医療・療育施設につなげることが重要な役割だと思います。

具体的には、乳幼児期に十分な療育につながらなかった方、就学後に支援が必要な方、特にインクルーシブ教育でなんとなく通常学級へ通っているものの勉強が難しいと感じている人の中で実は難聴でお困りの方、新スクを受けていない方、新スクはパスしたものの進行性・遅発性で難聴が起きた方、病院への通院が途切れている片側性難聴の方などが対象になります。

大阪府耳鼻咽喉科医会のデータで、2023年に太田先生が発表された論文からのものです。縦軸が人数、横軸が難聴の度合いを表しています。注目いただきたいのは、両側中等度難聴の43%で補聴器を装用していないという結果です。中等度難聴で補聴器をせず、かつ通常学校に通うと、難聴で勉強に支障がでたり、交友関係、中川先生のお話にあった自尊心やセルフアドボカシーが構築できなかったりすると思われます。補聴器の必要性を保護者にしっかり理解してもらい、継続的な難聴療育を行う必要があります。

その際の問題点が、療育施設の通いややすさに地域格差があること。また、聴覚支援学校が複数あるので、なかなか1か所で全てを把握することは難しいということ。インクルーシブ教育として、難聴のお子さんが通常学校にも通っているのに、どこにどんなお子さんがいるか大阪府で把握しきれていないということ。個人情報になるため、簡単にやりとりしにくいなどの問題点があります。

そのためトラッキング方法の構築が必要になります。ただし、個人情報なので、行政との連携が必須ですが、行政の健診や学校健診で、難聴の子どもをフ

フォローできるシステムづくりが必要だと思っています。

続いて、耳鼻咽喉科医が期待する中核機能の役割、第2弾として後方支援機能を挙げます。難聴児の療育には、言語聴覚士が重要な役割を果たしますが、難聴療育に経験豊富な言語聴覚士さんの人数に限られています。難聴療育に習熟するには、期間がかかりますのですぐに交代とはいかず、育成を促進することが重要になります。インクルーシブ教育現場へ巡回したり、補聴器を取り扱ったりするにも、マンパワーが取られるため、習熟した言語聴覚士の育成を行政中心にしていただければと思います。以前は、養護教諭の先生が言語聴覚士の資格を習得するための休業補償があったようですが、言語聴覚士資格取得の学費の補助、休業の収入補助などが行われると良いなと思います。また、言語聴覚士を派遣できる制度が構築されていれば、急な産休や育休で空きが出たり、今後行政の健診時に言語評価を行っていったりしてマンパワーが必要になった場合、人材を補うことができますので、行政・言語聴覚士会で後継者を育てていただき、何かの際には補充できるシステムがあればいいなと思います。

早期発見・療育の成果として、人工内耳のお子さんを1人提示します。

先天性両側重度難聴の方で、1歳2か月で両側に人工内耳を埋め込みました。ご家族が非常に熱心で、人工内耳のリハビリを病院で行い、療育機関への通所プラス、お家でも本を読まれたり、歌をたくさん歌ったりして、3歳の時点で裸耳の状態ではスケールアウトですが、人工内耳をつけるとこのようにはっきりと音程をつけて歌うことができるようになっていきます。

(子どもの声)

♪いとまきまき いとまきまき

ひいてひいて とんとんとん

できた できた

みんなのぼうし♪

人工内耳を入れられても、活用の程度は様々ですが、早期療育、早期挿入することで言語がここまで発達できるという例を提示しました。

最後にまとめです。難聴児が笑顔で自立した生活を送るためには、療育、教育体制の拡充として、言語聴覚士さんをはじめとする人材の育成が必要です。難聴児のトラッキングをしていく方法の対策を立てることが急務だと思います。

絵のように、難聴児、養育者を囲んでいる専門機関を、中核機能が円滑につながり役割を果たすようになることで、難聴のある乳幼児さんの支援が充実すると思います。ご清聴ありがとうございました。

【指定討論②】

聴覚特別支援学校乳幼児相談担当の視点から

福岡県立久留米聴覚特別支援学校 早川 恵

司会／福岡県立久留米聴覚特別支援学校 乳幼児教育相談担当の早川 恵先生のご発表です。早川先生は、ろう学校勤務 23 年目。主に小学部で日本語の読み書きの指導と障害認識に力を入れてこられました。小学部、幼稚部での指導を経て、読み書きも障害認識も、その基礎を作るのは 0・1・2 歳の親子関係であるとの考えに至り、乳幼児教育相談の担当を希望して 5 年目になります。よろしくお願いします。

早川／皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、久留米聴覚特別支援学校で乳幼児教育相談を担当している早川です。本日は、その中で大切にしていることを話します。

先程の中川先生のご講演にもありましたが、福岡には 5 つの聴覚特別支援学校・部門があります。私が担当しているのは、県南地域です。どちらかといえば、手話寄りだとお話がありましたが、共通言語としては手話を使って指導しています。ただそれだけではなく、聞こえない子どもも聴力に応じて、聴覚活用も行っています。人工内耳をしている子は 40％程度います。

久留米聴覚特別支援学校には、幼稚部から中学部まであり、総数 53 名が通っています。

幼稚部に入る前の、0～2 歳、3～5 歳も対象となっていますが、主に 0～2 歳の支援を行っています。私はひよこ組を担当しています。0 歳の子どもが 50％、1 歳児が 24％、2 歳児が 26％です。

新生児聴覚スクリーニング検査の受検率を見ると、私が担当を始めた 5 年前は、全員が受検しているわけではありませんでした。令和 6 年には 100％が受検してから来ています。

来始めたときの年齢としては、生後半年までに約 70％が来ています。1 歳までには 80％以上が来ています。5 年前に担当し始めたときは、1 歳までに来たのが 30％程度だったので、早く来るようになっていくことがわかります。

ひよこ組を利用し始めたきっかけとして、病院からの紹介が 50％。5 年前は

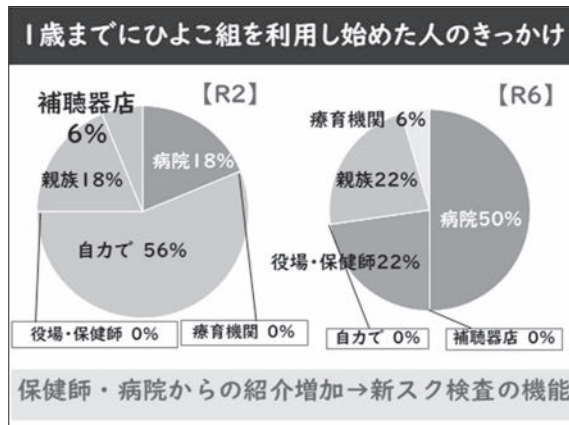
20%もなく、病院からの紹介は少なかったのですが、それが約半数になっています。それ以外に役場の保健師からの紹介も増えています。中川先生の話にもありましたが、中川先生を中心に検査後の早期発見をして、早期療育に繋げるシステムの構築にご尽力いただいたおかげで、それがこの数字にも表れていると思います。

生まれた子どもが聞こえないとわかったときに、保護者の気持ちについて、アンケートでスライドのように答えていただきました。アンケート結果を示していますが、共通した気持ち、非常に悲しかった、不安を感じた。そこから療育が始まっています。この保護者の気持ちを私たちは常に考えないといけないと思います。

そういった保護者に対して、支援をするうえで、大切に考えないといけないことは、さまざまな療育場所がありますが、どこでも共通しているのは、声掛けの仕方、体験を言語化、幼児としての生活の支援をする。これらは大切ですが、それに加えて、親が聞こえない子どもが聞こえないことを受けとめる。つまり障害認識の土台を築ける、深める支援が一番大切だと思います。これは、0～2歳の子どもを持つ親御さんがその時期に行ってもらいたいです。聞こえない子どもは聞こえない大人になります。そして、その子たちが健やかに育つ環境を作る。そして、手話を使ってろうコミュニティ、ろう児の集団の中で、自分たちが通じる、安心できる環境を提供することが大事だと思います。

親御さんが不安に感じるのは、ろうについて知らない、先の見通しが立たないからです。けれど、大人のろう者が幸せに生活していることを知ってもらうために、大人のろう者との出会いも提供したいと思っています。

具体的な支援についてお話しします。年齢ごとにグループ指導をしてい



子に障がいがあると分かった保護者の気持ち

- 娘が聞こえないなんてまさか・・・。
正直先生から話されたことは覚えてない。
聞こえない娘をどうやって育てたらいいか？
コミュニケーションはどうしたらいいの？
どこに相談したらいいの？全く見当がつかない。
- 私の声も聞こえない。聞こえない子に産んでしまった。
どうやってこの子は生きていくんだろう？
- ただ、ただ泣いた。落ち込んだ。
私が妊娠中になにかしてしまったのだろうか、と
自分を責める気持ちが強かった。

ひよこ組での支援・学びたいこと

参照：「たったひとりのクレオール」2014年ポット出版 上農正剛

日常的な対応 → **障害認識という土台**

- 声かけの仕方、体験の言語化、ことばの育て方
- 実態に応じた聴覚活用（補聴器・人工内耳）
- 乳幼児としての生活（生活リズム、身体作り、栄養、遊び）
- 聞こえない子どもは聞こえない大人になること
- 分かる環境で育つ大切さ
- ろうコミュニティ・ろう児集団の必要性
- 社会モデルによる障害の捉え方（言語的マイノリティであること）
- 多数派と異なることの価値と意味
- 手話の有効性、成人ろう者を知ること

ます。親御さんとも一緒に来ていただき、親子あそびをしています。最後には振り返りをし、コミュニケーション方法、遊び方について、親御さんがどう見たのかを話します。親御さんには手話学習の時間も取っています。聞こえにかかわらず子育ては大変なので、親同士で話し合える場も設けています。

そのときの様子の写真です。0歳児のグループです。1、2歳児の様子です。家の中では、キッチンで汚れるとか危ないこともあると思いますが、クッキングの時間も月に1～2回あります。外遊び、運動遊びの様子です。

グループ支援のあとには、親子でお弁当を食べます。その際に、親御さん同士で情報交換をして、ほっと一息つける場所になればいいなと思います。

グループ支援以外にも個別支援も行っています。聴力検査、補聴器の調整など、保護者の必要に応じた支援をしています。私と保護者との信頼関係を元に、個別の相談をしています。

保護者教室は年間20回程度開いています。難聴についての知識を持ってもらうために、それに応じた内容になっています。聴覚障害教育についての学習、人工内耳や聴覚活用等についても、バランスを考えて、さまざまな内容を取り入れています。必ず取り入れているのが、成人ろう者に経験を話してもらう。そして、聴覚障害児を育てた保護者にも話をさせていただいています。

週に1回、保護者対象の手話教室もしています。ろう者に講師に来ていただき、手話の単語、手話を学ぶだけでなく、出会いを通して、成人したろう者の様子をみていただくこともねらいとしています。

手話だけでなく、写真カードや絵本、いろいろなものを使って、子どもと通じ合うことの喜びを感じてほしい、子どもと話ができることの満足感をいただきたいと思い、さまざまな道具も使って、絵本の読みきかせ、絵日記、写真カードなどを使って、語彙を増やしていく、言葉の獲得することを目指しています。

早期支援に必要なのは、4つの出会いだと思います。1つは専門家、医師や私たちなど。そして、手話。「素人の専門家」と書いていますが、ろう者との出会いもとても大切です。将来の見通しが

スライド17

持てるようになります。同じように聞こえない子どもたちを育てる仲間。この4つの出会いが大切です。これを全て提供できるのが、聴覚特別支援学校だと思っています。

今後の課題としては、早期発見し、早期療育に結びつける。今はインターネットやSNSで親御さんにもさまざま

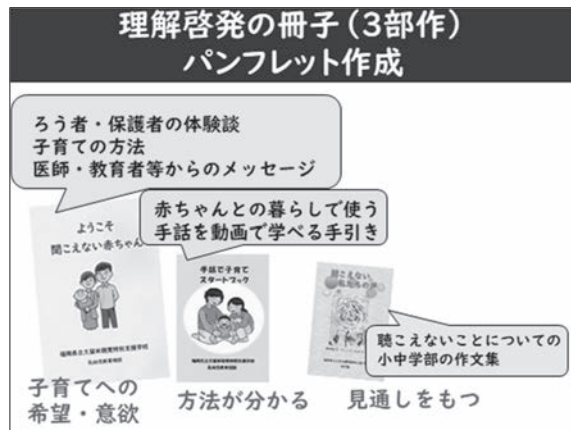
課題解決のために 医療機関・市役所等との連携

- 大学病院との連携
 - ・本校主催の研修会で耳鼻科医の講話
 - ・耳鼻科医と教員の懇話会
 - ・日常的な情報交換(メール)
- 産婦人科病院への理解啓発
 - ・産婦人科病院の研修への出席、講話
 - ・新スクについてのちらし作成
 - 県南全ての産科で配布
- 市役所、保健所、子育て支援センターへの理解啓発
 - ・関係機関訪問
 - ・保健師の研修への参加、講話

医療・福祉との
連携

な情報が入ります。人工内耳で早期に聴覚活用をしているから、ぜひ自分の子どももそうなりたいと思う方も多いですが、それだけでなく手話で見て十分に見てわかる環境も必要だという情報を提供しながら、バランスの取れた支援をしたいと思っています。これらを今後の課題として取り組みたいと思っています。

これからもいろいろな場所と連携を取り、より良い支援、保護者支援に努めます。私からの報告は以上です。ありがとうございました。



【指定討論③】

大阪府難聴児支援の中核機能拠点の窓口から

ひだまり・MOE 中尾 恵弥子

司会／大阪府難聴児支援中核拠点窓口「ひだまり・MOE」の中尾 恵弥子先生からお話しいただきます。中尾先生は臨床心理士として、20年にわたりろう学校や聴覚障害者施設できこえない人たちとご家族の支援に携わってこられました。中尾先生よろしくお願いします。

中尾／ご紹介ありがとうございます。「ひだまり・MOE」の臨床心理士をしています、中尾と申します。

「ひだまり・MOE」は、大阪府委託の相談事業として、2018年に開室いたしました。そして、ご存知のように、中川先生が座長を務められた検討会を経て、2022年2月に厚生労働省から出された「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針」にある「難聴児支援のための中核的機能を有する体制を確保すること」を受けて、2023年度より、ここ大阪府立福祉情報コミュニケーションセンターが、大阪府における難聴児支援の中核機能拠点となり、その相談窓口を「ひだまり・MOE」が担うことになりました。

こちらが「ひだまり・MOE」のパンフレットです。

「ひだまり・MOE」の主な支援対象者は、聴覚に障害のある子どもさんとそのご家族ですが、聴覚に障害のある保護者とそのご家族にもご利用いただいています。スタッフは聴覚障害を専門とする公認心理師、臨床心理士等で、事前申し込み制、相談料は無料です。受給者証も必要ありませんので、産院でリファーマの知らせを受けたばかりの赤ちゃんや、だいたい生後3か月頃に受ける確定診断前のご家族も相談に来ていただくことができます。また、手帳を取得できない軽・中等度難聴や一側性難聴の子どもさんも対象です。

こちらが連携の図です。「ひだまり・MOE」は難聴児支援の中核機能拠点として、相談支援ネットワークを構築してきました。それを活かして、「ひだまり・MOE」に相談に来てくださったご家族には、大阪府内の聴覚支援学校や難聴を専門とする療育機関、手話支援機関であるこめっこの情報など、さまざまな難聴児支援にかかわる情報を偏りなく提供することを心掛けています。手話言語との出

会いを確保できることが、他の拠点にはない大阪府の強みですし、私たち相談員としても、手話を獲得して成長している子どもさんの様子や、生き生きと活躍するろう者の姿をみてもらえる現場があることをとても心強く感じています。

そして、確定診断を迎え、いよいよお子さんがきこえない・きこえにくいということがわかっていく中で、手話言語の獲得と補聴器や人工内耳による聴覚活用、どちらかひとつしか選択できないというのではなく、補聴も療育も手話獲得も、ご家族がそれぞれの環境に合わせて選択し、ろう学校も療育機関も、手話言語獲得のこめっこも、どれも両輪、三輪で進めていかれるのを、私たちも一緒に応援していきたいと思っています。

相談内容についてです。お子さんの年齢にかかわらず、きこえについてのご相談を幅広くお受けしており、ご事情によっては家庭訪問やオンラインでのご相談も可能です。やはり一番の特徴は、新生児スクリーニング検査でリファア、いわゆる「お子さんの耳がきこえていないかもしれません」と知らされたばかりの保護者、ご家族に、確定診断前でもご相談に来ていただけることです。支援する親御さんの大半は、それまでの人生の中でろう・難聴者や手話などに出会ったことがない方々です。まさか自分の子に聴覚障害があるとは、全く想像もしていなかったと話されます。妊娠中からその可能性を予測できる疾患や障害もありますが、聴覚障害の場合は、生後2・3日目の新生児聴覚スクリーニング検査を受けて初めて知ることがほとんどですので、ご家族にとってはまさに青天の霹靂。お子さんがきこえていないかもしれないと告げられたときの驚きやショックは当然大きいものです。また、リファアから確定診断が可能となる生後3か月頃までの期間、多くのご家族が特に何のサポートも得られず、ひたすらインターネットで情報を探して不安だけが大きくなっていったという時期を過ごされています。

リファアにあたっては、医師から「リファアになることが時々あるんですよ。お耳の中に羊水がたまっているだけのことも多いので、1か月健診のときにもう1回調べてみましょう。普通に過ごしてたら大丈夫だからね」というような説明を受けることが多いようです。確かに、この時期の赤ちゃんは、きこえていてもきこえていなくても、特に接し方に変わりはありません。おなかがすいたらミルクをもらって、満足したらねんねして、起きたらママが来てお着替えさせてくれて、みんなにかわいいねと愛でてもらって。そうしたかかわりの中で、ママやパパのにおい、やわらかくてあたたかい雰囲気を感じながら、自分は周囲から歓迎されているんだ、この世界は安全なんだということを実感していきます。

でも、リファアの知らせを受けてから、1か月健診を経て、実際に精密聴覚検査を受けて確定診断に至るまでの期間は、「もしかするとこの子はきこえてい

ないのかも知れない」という思いが常に頭の片隅にあり、本来なら自然に赤ちゃんに向けることができたであろう笑顔や声掛けすらできなくなっていたという体験を、たくさんの保護者から伺いました。「〇〇君、名前をよんでみたけれど、今の私の声はきこえてないのかな」と悲しくなったり、この音には反応するかな？とお耳の近くで大きな音を鳴らしてみたり、1人になると何か自分の行動が悪かったのかもと自分を責めたり…。多くの親御さんが「暗黒の3か月」と話されるこの時期に、できるだけ早くお会いし、わいてくるいろんなお気持ち、とりわけネガティブな感情もないものにしてしまわず、お母さんお父さんのありのままの思いをまずはお聞きするところから始めたいと思っています。

最後に「ひだまり・MOE」の現状と今後の課題について触れたいと思います。「ひだまり・MOE」の相談件数は、2023年度はのべ81件、そのうち新規相談は44件でした。今年度2024年度においては、2025年1月末時点でのべ87件、うち新規相談が52件とすでに昨年度を上回っており、相談件数が増加傾向となっています。

その背景として、①保健師との連携、②保護者のネットワーク、③ホームページ等の広報、の影響が大きいと捉えています。

①の保健師さんとの連携については、2022年度から府と我々相談支援ネットワークが共催で大阪府内の「母子保健担当者向け説明会」を開催し、「ひだまり・MOE」の活動を知ってもらう機会を作ってきました。今年度で3回目を迎え、保健師さんから直接、問い合わせをいただくケースが増えており、中には本当にリファーマ直後、0か月でお会いできるご家族も出てきています。「ひだまり・MOE」からの家庭訪問に保健師さんが同行してくれることも増えてきており、保健師さんとの連携の大切さを感じています。

②の保護者ネットワークについては、実際に「ひだまり・MOE」を利用した保護者が他の保護者にMOEのことを紹介してくれたり、InstagramなどのSNSを通じて保護者同士がつながり、MOEにつなげてくださる場合も増えており、保護者のネットワークはとても心強く感じています。

そして、私たち「ひだまり・MOE」のホームページも活用しながら、今後もさまざまな形で広報活動にも力を入れていきたいと思っています。

そんな中で、今一番の課題であると感じているのが、医療機関とのつながりです。これまで「ひだまり・MOE」を利用してくださった親御さんからも、「MOEのような場所があることを新スクでリファーマが出たそのときに、産院で教えてもらいたかった」「ここに行けば難聴のこと、いろんな支援について教えてもらえる、とにかくここにつながればいいという場所があると安心できる」というお声をたくさんいただいております。これから生まれてきてくれるろう・難聴の赤ちゃんとそのご家族にできるだけ早い時期にお会いできるよう、今後、産科、小児

科、耳鼻咽喉科のお医者様や医療関係者の方々にも「ひだまり・MOE」の活動をもっと知っていただけるようにがんばっていかなくてはと思っていますところでは。

以上のように、「ひだまり・MOE」では、愛着形成の出発点から子どもさんの成長を見守り、継続して応援していくことを目指しています。年齢に応じていろんな選択決定をしなければならないときに、またさまざまな節目に迷い悩まれるときに、必要なときにはいつでも相談に来ていただけるような、「心理的な港」として、ろう・難聴児さんとそのご家族を迎えられる場でありたいと願って活動しています。ご清聴ありがとうございました。

【指定討論④】

保護者の視点から

こめっこ参加家族 小橋史佳・小橋千穂子

司会／続いての発表は、先日5歳のお誕生日を迎えたばかりの息子さんが1歳のときから、丸4年こめっこに通ってくださっている小橋 史佳氏、千穂子氏ご夫妻です。「保護者の視点から」ということで、お話しいたします。よろしくお願いします。

小橋父／小橋です。今日は、こめっこを利用し、ろうの子どもを育てる家族の経験や考えを話します。よろしくお願いします。

まず、簡単に家族の自己紹介をさせていただきます。私、妻、5歳の息子、7か月の娘の4人家族です。5歳の息子が生まれつきの重度難聴で、ほかの3人は聞こえます。息子は補聴器を装用した状態で、太鼓など振動のある大きな音には反応がありますが、音声の聞き取りは難しいです。家庭でのコミュニケーションは手話のみです。息子の名前は「れお」で、手話ネームは「れお(手話)」です。こめっこで考えていただきました。ライオンのたてがみと、かっこいいという手話と、おでこにつむじがあることを掛け合わせています。今日は手話通訳の方には、この手話ネームで通訳していただこうと思います。

れおの1日は、大阪府立生野聴覚支援学校に朝から昼過ぎまで、そのあと週5で、ぐんぐんPOEを利用させていただいています。POEとは、こめっこの理念にもとづいてつくられた児童発達支援・放課後デイサービスです。スタッフの方全員が手話でコミュニケーションをとってくれます。こんなに手話があふれ、聞こえない・聞こえにくい子どもたちが生き生きと過ごせる場所はPOE以外にないんじゃないかと思います。放課後の時間や夏休み等は毎日ここで過ごしています。月2回、土曜日に開催されるこめっこに参加し、こめっこがない週の金曜日に開催される放課後こめっこにも参加しています。私たちは決して手話が上手ではありませんが、このような恵まれた環境のおかげで息子の手話力がぐんぐん伸びているなど感じています。

私たちは、息子が生まれるまで手話に出会ったことがありませんでした。息子が1歳になる頃から親子3人でべびこめや土曜こめっこに通い始めました。

今で、ちょうど4年になります。それ以外に手話講座等には通っていませんし、毎回楽しく通っていらしたので、親は負担なく手話を学び、子どもは遊びながら自然と手話を習得していきました。

小橋母／手話で子育てしてみて、コミュニケーションにおいて、「わかる」ということの大事さを感じています。ぜんぶわかるということ、相手に伝わっていると実感できることが重要なのであって、伝える手段は実はなんでもいいのではという気づきがありました。話すのが得意な子は音声で伝えてもいいし、もちろん手話でもいいし、大人になれば筆談やスマホを使って伝えることができるようになると思います。でも、話せるから全部聞き取れているというのは違って、難聴児には必ず聞こえない音や聞こえにくい状況があり、聞こえもそれぞれなので、それは本人にしかわからないことだなと思います。

では、ある程度聞こえたら手話がなくてもいいのかというと、たまたま聞こえなかった部分が会話の要点の部分だったことで勘違いにつながることや、相手を傷つけてしまう場面があるかもしれません。すべての子に平等に「全部わかる」を保障するのが手話だと思います。

聴覚支援学校、こめっこ、POE でがっつり毎日手話のある環境に置いてもらっていることで、わかる・伝わるが当たり前前の環境にいるからこそ、わからなかったということを伝えられたり、わかってもらうための工夫を子どもなりに考えられるようになってきたなと感じます。まあこんなもんか、とわからないことをそのままにするのは、特にいろんなことに興味が広がる幼児期にとってはとてももったいないことだし、一番ショックなのは自分ではちゃんとわかっていると思っていたのに実はわかってなかったときですね。聞こえる・聞こえないに関わらず、大人も経験があるのではと思います。

自分でわからないことを認識し、何がわからないかを相手にわかってもらうことって実は高度なことだと感じます。でも手話があれば、聞こえない子どもでもそれができる場面が増えてきたと思います。

息子が手話を使うので、よく遊ぶお友だちも手話を使ってくれることが増えてきてとてもありがたいと同時に、比較的聞こえがいいお子さんにとっても手話は効果があるなあと感じることが多いです。伝えるときは音声メインでもインプットに手話を手がかりにしている子や、音声だけで相手に伝わっていないなと感じたときに手話を付けて伝えてくれる子、使い方は子どもによってさまざまですが、発語の妨げにはなっておらず、むしろ相乗効果でいろんな相手とのコミュニケーションをスムーズにしていると感じます。

聴力活用もうまくいっているし手話はなくても大丈夫かもな…と感じるお子さんでも、大人になる過程で、自分に手話があってよかった、手話で通じる

仲間がいてよかったと思うタイミングがくるかもしれないので、親が積極的に手話を学び、手話でお友達と関われるようになることにはメリットしかないのではと思います。音声や文字に加えて手話、選択肢は少しでも多く用意し、子どもが必要になったときに使えるという環境をつくってあげられたら良いのではと思っています。

先にお話したとおり、我が家は1歳のときから親子3人でこめっこに通い始めました。必然的に両親ともに手話が覚えられて、結果としてはすごくよかったなあと思っています。

どうやって子どもと関わったらいいかわからない…と行動できずにいるパパがいるなら、もったいないです！こめっこに来れば、何もわからない状態でも優しくフォローしていただけるので心配いりません。子どもが成長する中で、パパとしたいことも増えてくるし、聞こえなくても家族みんなと普通にお話できる環境が子どもの情緒の安定にもつながっていると思っています。何より夫が子どものことを同じ目線で考えてくれることで、ひとりで頑張っていると、孤独を感じなくなったことがよかったです。仕事が忙しい、時間が取れない等それぞれ事情はあると思いますが、家族みんなで対等に話ができる言語を持つということはかけがえのない財産だと思うので、ライフスタイルを変えてでも学ぶ価値ありです。

小橋父／私は息子が1歳のときに育休を取って、そこからこめっこに通い始めました。手話を学ぶことができたのはもちろんのこと、先ほど妻が言った「孤独感」をなくせたことがなによりよかったです。手話を学ぶ以外でも、ママと同じ目線で子どもの現状を把握し、これからのことや、学校の進路のことを一緒に考えるだけでもママの不安や孤独感を和らげることができるかと思います。

あと、これは育児とかではないのですが、息子が難聴とわかったときに自分の中で決めたことがあります。それは「どんなことがあっても明るくいよう」ということです。みなさまの中には子どもが難聴とわかったときにいろいろと不安になったり、ショックを受けたりした人があるかもしれません。もしかすると自分を責めてしまったりした人もあるかもしれません。うちの妻がそうでした。なので私まで同じように考えてしまうと負のスパイラルになってしまい何も良いことはないので、私だけでも「大丈夫、なんとかなるさ」というマインドで常にいるようにしていました。ただ、「していた」というと無理をしているようになってしまうのですが、私は息子の難聴がわかったときも、「耳が聞こえない。なら手話を覚えればいいか！」としか思わなかったくらい能天気な性格だったので、改めて決意をした感じです。何が言いたかったかという、子どもと手話でおしゃべりは楽しいし、ママの心理的負担もパパが参加することで軽く

なるし良いことだらけですよということです。

小橋母／こめっこに通うまではなんだかこのままでいいのだろうかと不安がスッパリしなくて、とにかく自分がなんとかしなくてはとがむしゃらでした。検索魔になってネットで情報収集したり、まだ赤ちゃんで泣く子をチャイルドシートに乗せて病院や療育をいくつも行ってみたり、その度ショックを受けたり疲れたりすることもあるって、とにかく毎日必死で、かわいい赤ちゃんのときの子育ての記憶があんまりないです。私の場合はその過程でこめっこに出会うことができたので、行動したこと自体は決して無駄ではなかったとは思いますが、あっという間に過ぎてしまったかわいい赤ちゃんの頃の子育てを、もっと楽しめたらよかったなと少し後悔しています。

こめっこに出会い、聞こえなくても大丈夫と思えてからは気持ちに余裕が生まれて、子どもと笑顔で関われることがぐんと増えました。聞こえる親のもとに聞こえない子が生まれたときに気持ちが落ち込む一番の要因は、子どもの将来の見通しが見つからないことだと思います。どのくらい聞こえているのかわからない、どうやってコミュニケーションがとれるようになるのかわからない、親は何から始めたらいいのかわからない、わからないことだらけでした。手話は見てくれていると伝わっていると実感できるので、聞こえているのかわからない赤ちゃんのときからでもしっかりコミュニケーションをとることができると思います。ちゃんと伝わっている、自分の頑張っていることは無駄じゃないという実感があるだけで親の心はずいぶん救われます。

私のご縁あってこめっこを知ることができましたが、こめっこに出会えてなかったら今のように息子とお話できるようにはなっていなかったと思うと、本当に出会えてよかったと心から思います。お子さんが難聴とわかったら、全員が、早期の治療や療育に併行して、ワンストップでこめっこに繋がるようなシステムができたらもっといいなと思います。できるだけ早く私たちのような親御さんが手話に出会い、この子は大丈夫、ひとりでがんばらなくていいと感じてくれたら嬉しいです。

こめっこには、何人もの難聴児をみてきた専門の臨床心理士の先生方がいて、先輩ママパパがいて、同級生はもちろん異年齢の聞こえない・聞こえにくい子どもがいて、なによりかっこいいろうスタッフがいます。子どもたちはろうスタッフさんが大好きで、みんなそれぞれ「推し」がいます。表現ゆたかな手話に大人も子どもも魅了され、どれだけ手話を学んだとしても聴者には到底及ばない領域だなあ、手話ってかっこいいなあと感じています。

ろうスタッフの存在は、親としても聞こえない子どもの今後の成長の見通しがつくことで安心につながるし、ミニレクチャーといっぺろうの大人の方の生

の気持ちを聞く貴重な機会も定期的に企画してくださっています。私たちもミニレクチャーでお聞きした、ろうスタッフの方の経験談には何度心を揺さぶられたかわかりません。なかなか人に話すことも少ないような大事な気持ちを話してもらえて、聞こえない・聞こえにくいことへの理解を深めることができ、自分の子どもへの関わりにおいても何を大事にすべきか考えることができました。

息子にとっては、手話があって「ぜんぶわかる」環境が一番大事だと、今の環境・進路を選ぶきっかけにもなりました。

小橋父／おかげさまで、息子は学校もこめっこや POE も、お友だちのことも大好きで毎日楽しく過ごしています。学校、こめっこ、POE どれも自分から行きたくないと言ったことは一度もありません。これはわたしたち親の力ではなく、関わってくださっているみなさまのおかげです。みなさまに支えられて今のれおがあり、この先、壁にぶつかることがあっても頼れる存在があるという安心感があるので、きっとこの子は大丈夫と思えます。

つい先日れおは誕生日を迎え、5 歳になりました。こめっこや POE、学校、友だち、たくさんの人に助けていただいているおかげで、「れおの耳が聞こえたらよかったのに」と思ったことは、息子が生まれたときから今まで一度も思ったことがありません。もちろん息子にも「僕の耳が聞こえたら良かったのに」と思わせないように、これからも周りの方のお力をお借りしながら、また家庭内で息子が孤独感を感じないように引き続き家族で手話を学んで、密なコミュニケーションをとれるようにしていこうと思っています。

最後に、こめっこの活動がこれからもますます発展し続けられますよう、陰ながら応援しております。ご視聴ありがとうございました。

【コメント】

＜研究プロジェクトチームから＞

河崎／それでは、研究プロジェクトチームの先生方からコメントをいただきます。最初に、言語脳科学と思考力をご担当くださっている酒井 邦嘉先生にお願いします。

酒井／みなさん、こんにちは。今日のシンポジウムは、内容が去年にもまして濃いように感じながら聞いていました。中川先生がご尽力されて、厚労省で新たに指針となるガイドラインができたのは、大きな一歩だと思いますが、決してこれで十分ではありません。これを絶やさずにもっと多くの人たち、医療関係者だけではなく、一般教育に携わる先生方や保護者も含め、理解を進めていけないといけないと考えます。

先ほど、学校の合理的配慮の話もありましたが、教室に1人でもインクルージョンで聞こえないお子さんがいれば手話通訳が付くという、当たり前のことが日本では全く実践できていません。大学も同じです。アメリカでは当たり前のように手話通訳が2名付いて講義をサポートしています。手話通訳の費用を公的に負担するという仕組みを含め、手話を1つの言語として認める必要があります。

早川先生もおっしゃっていましたが、ろう者という存在が一般の人には知られていません。ろう者との出会いの場などのコミュニティを作っていないと、そもそも、聴者の想像力が足りないために、誤解が生じたり、我が子が聞こえないとなるとショックを受けたりします。まだまだ日本は閉鎖的だと強く感じます。私は自身の研究を通して臨界期は存在しないといった話をしてしていますが、その認識すら学会を含めて共有されていないので、早いうちに言語を獲得しないといけないということが優先されてしまいます。大人になっても何語でも習得できるのですが、日本では英語が教科でありながら、英語が話せないということが何十年経っても変わらないという現状があり、近年はむしろ英語力が低下しています。

シンポジウムで特に素晴らしかったのは、れお君のお父さんとお母さんの講演でした。「本人が自分でわかる言葉」という基準を、ぜひ皆さんも重視していただきたい。私はリモートで聴いていましたが、自然と感涙におせぶほど素晴らしいお話でした。人工内耳で自分の言葉がわかっているのではないかと、お医者さんは想像しているかもしれませんが、わかっているのは本人だけなんです。もし当人が手話による言語獲得の経験ができていないと、自分が言葉をわかっているのかどうか、人工内耳や補聴器を通して聞こえてくる日本語だけで

は評価できないのです。その人の十全な母語として手話を持つことは、人権に関わる大切なことです。母語という基準に照らしてはじめて、自分はどれくらい日本語が受容できているのかという判断ができます。その意味で「自分に手話があってよかった」とおそらく当人が思うことだろうと思います。文字が読めれば良い、筆談ができれば良いというわけではありません。人間にとって、音声と手話が自然言語で、文字は副次的なシンボルに過ぎません。音声と手話を等しく重視するためには、学校教育の変革が必要です。

全国的にどう展開するかの1つのアイデアとして、こめっこをモデルにしてコミュニティを作ることが挙げられます。そこでは聴者とろう者が頻繁に関わって教育などについて議論する。自然言語の1つとして、多言語の1つとして、手話があるのです。先日、大阪でこめっこの会議があった折、隣でヒップファミリークラブ・言語交流研究所の催しがありました。会議で私がちょうどその話をした矢先でびっくりしたのですが、彼らは多言語を「ファミリー」というコミュニティの活動を通して楽しんでいます。手話を学ぶ視点と同時に、手話を広げるという活動をそうした枠組みの中で広げると、自然にろう者がどういう活動をしているのかが共有されます。ろう者の漫才もあれば、劇もあり、常に多様な文化的活動があることを知ると同時に、聴者も手話を知ることによって得られるものが大きいという認識につながると思います。ぜひ、こめっこを次のステップに繋げていけるようなサポートが必要です。

河崎／ありがとうございました。全国展開に向けてのことが、質問にもありましたので、先生からそこのお答えをいただけたと思います。次に、言語獲得と理解力をご担当の武居 渡先生、よろしくお願いいたします。

武居／金沢大学の武居です。今日はありがとうございました。4つの話をしようと思ったのですが、その中の1つは、小橋さんが私よりも説得力のあるお話していただけたので、3つの話をします。

1点め、最初のこめっこの活動報告で久保沢さんが、こめっこメソッドとして大阪だけでなく、いろいろな地域に広げていきたいという話をされていました。こめっこメソッド、メソッドとは方法のことですが、早期に手話を入れて教育をすれば子どもは伸びるといういわゆる方法論のようにこめっこのさまざまな活動を矮小化するのではなく、わかる経験を保証し、保護者が自信を持って安心して子育てできるように支援し、成人のろうの人を目の前で見るなど、すべてを含めてこめっこの活動だと思います。ですから、久保沢さんの手話を見ると、こめっこメソッドを「方法」の手話は使ってなかったと思います。それらをすべて含めて、大阪だけでなく、別のところへ広げる、それが大切だと思

いました。

2点めは、中川先生の話聞いて思いましたが、何をもって、ろう教育の成功とするのか。これを1つにしてしまうと、日本語力、社会性、発音明瞭度、なにか1つをろう教育の成功の尺度にしてしまうと、必ず正規分布をする、つまりできる子と得意じゃない子が必ず出てきます。でも、聞こえない子どもたちの、ろう教育の成功は1つではないと思います。ある子は、勉強面でもものすごい力を発揮する、そういう聞こえない子がいてもいいです。デフリンピックで活躍する、勉強は得意でなくてもスポーツ選手として活躍する子がいてもいい。俳優、女優さんのかたちで、人々に幸せを分け与える仕事で秀でた力を発揮してもいい。聞こえない子どもたちの成功の尺度は1つではない。それを1つにしてしまうと、良い・悪いの話になってしまう。その子の幸せの尺度がどこにあるのか、見つけることが大切だと思います。その意味で、基本方針の中の多様性と寛容性が、まさにそれだと思います。何をもって、ろう教育の成功とするかは、1つではないということがお伝えしたい2つめです。

3つめ、これも先ほどの中川先生の講演にあった話ですが、セルフアドボカシー、自分のしてほしいことを他者に求めることができる力。それには、自己理解と自己肯定感が必要だと思います。特に、自己肯定感や自尊心が必要だと思います。これを補聴器や人工内耳など、聴力だけで考えようとすると、不可能ではないかもしれないが、しんどいと思います。補聴器や人工内耳は、聞こえない、聞こえにくい部分を補償するものです。補っても、聞こえる人にはなれないし、聞こえる人のように聞こえるわけではありません。そこで自己肯定感を育てようとしても、常に聞こえる人から少し劣った自分ととらえてしまいます。だけど、ここで手話がものすごく大きな力を発揮します。聞こえる人たちは音声で理解するが、自分は目、あるいは目と耳で理解する。わかる手段が違うかもしれないが、理解した後は対等だと、表面的な対等ではなく、真の意味での対等で自分自身を肯定的に認められると思います。そこに手話が大きな力を発揮すると思います。その意味では、こめっこの手話の力は、自己肯定感、自己理解、セルフアドボカシーに繋がります。

最後におまけです。こめっこの本当の成果、評価は、今、こめっこに通う子どもたちが5年、10年後に、自分がこめっこに通ってきたことを、どのような言葉で語るのか。それがこめっこの真の評価になると思います。きっと、こめっこのことを彼らなりの言葉で語ってくれると思います。その中の何人かは、将来のこめっこスタッフになりたいと言ってくれるのではないかと、私はみています。以上です。

河崎／研究プロジェクトチームのメンバーとして、臨床心理、発達臨床を中心

に取り組む私としても、武居先生が述べてくださった３点とおまけは、全部そのとおりだと感じました。ありがとうございます。真の評価を得たいので、「元気で長生きしたい」が、最近の私の日々のセリフになっています。

＜こめっこから＞

河崎ノでは、これまでの発表から、こめっこ活動を代表して、物井代表理事からはいかがでしょうか。

物井ノすばらしいお話をいただき、ありがとうございました。武居先生がこめっこの活動を話されましたが、その通りだと思います。こめっこは、手話で遊んでいるだけだと見られることがありますが、そうではありません。今の活動を作る流れの中で、さまざまなことを考え、工夫してきました。まずは、保護者と子どもが一緒に共有できる、楽しく遊ぶことを大事にしています。私たちが非常に大切にしていることは、手話ぱんぱん、絵本よみ、手話劇、きゅっとものがたりです。

特に日本手話から生まれる手話ぱんぱんはこめっこオリジナルのもので、小さい子たちが目でみて楽しめる童謡のようなものです。きこえる子どもたちが自然に口ずさむように、こめっこの子どもたちも目で見て、自然に手が動きます。先ほど、お父さん、お母さんが、こめっこにも学校にも楽しく通っていると話してくれました。みんなで楽しく活動する中で子どもだけではなく、保護者も自然に楽しみながら手が動き共有することができるのです。

私は活動の中で子どもたちが手話を獲得習得していく様子に、毎回驚かされています。保護者も私以上に、自分の子どもや他の子どもたちが「目で見てわかる」様子を実感しています。そして保護者から家での様子についてたくさん報告をいただきます。早川先生の話にもありましたが、わかる環境で育てることが、とても大切だということでした。保護者は子どもからの伝えたいことを理解しよう、子どもと伝わりあいたいという気持ちを持って接するようになり、そのことが一番子どもたちのことばと伝わりあう心を育む力になっていると思います。

基調報告にもありましたように、こめっこにはさまざまなきこえをもつ子どもたちがいます。人工内耳をしている子も多いです。私たちは聴覚活用や口話を否定しているのではなく、それらについては医療や療育が中心に応援する。そして、みてわかることば「手話」はこめっこで応援する。この2つの両輪と一緒に子どもたちの成長を支えていけるよう、関係者のみなさんと連携していきたいと思います。以上です。ありがとうございました。

【ディスカッション】

阪本／今日、中川先生、岡崎先生に来ていただけて、改めて医療機関との連携が大事と感じます。医療機関、耳鼻咽喉科医は聞こえないことをなんとかしたいと考えています。中川先生が紹介された、耳鼻咽喉科学会の新生児聴覚スクリーニングの手引、最初の手引を作るときは、僕も委員でした。その時から告知されたときのお母さんの心理的ショックを考えましょうということが言われていました。でも、それが本当にわかっていたかという、よくわかりません。それをどうしたらいいかは、今日、早川先生の話と小橋さんのお父さん、お母さんのお話を聞いて、生まれたばかりの最初の段階で、赤ちゃんとその家族に、聞こえなくても、伝えたいことを、ちゃんとわかってもらえる手段があることを、特に最初にしっかり伝えることが大切と、思いました。その手段として手話も大事であるし、武居先生、酒井先生の話にもあったように、補聴器や人工内耳があっても、聞こえる人とまったく同じにならない、それに加えて補聴手段や援助が必要だとはわかっているのですが、その意味を本当にわかっていなかったと思います。難聴のある人にとっての、本当にわかる母語としての手話の意味が、日本人が英語を学ぶ上で、日本語がちゃんとわかっているからこそ、英語との違いがわかる、母語があって差がわかるとのお話から、母語を持っていることが大事だと、とても感じさせられました。

聞こえない赤ちゃんの最初に接する専門家として、大阪府では、中核事業のひだまり・MOEがありますが、今は医療機関からのアクセスには壁があって、なかなか難しい面があります。それについて「中川先生、福岡では、一貫した仕組みが構築されていて、感銘を受けました。福岡は先生がおられてこういうシステムができており、人によるというか、キーパーソンがいればできることは多いと思います。ただ、一人の力に頼らずに制度として確立させることが必要だと思いますが、制度化のために最も重要なアプローチは、どのようなものだとお考えですか。」という大きな質問がきています。

中川／挨拶ができる環境を作っておくことだと思います。そうすれば相談もできます。知らない人だと何を考えているかわからない。そういう誤解が生まれます。顔を合わせる機会を作って、連絡を取る接点を作るだけでいいのではないかと思います。あとは、私もそろそろ引退ということもあり、やはり、制度化は難しいです。福岡も10年後どうなっているのか不安です。ルールは一応敷いています。若い世代なりに、問題に当たって、それぞれについて考えていくだろうと思うので、そこは任せていかないとしょうがないなど。最初、様々な人たちと接触をする機会をたくさん頂いたことが、私にとって大切な入口だっ

たと思います。即効的な意味がないと思っても、集まる場を作ることが一番大切なことかと思っています。

阪本／顔を合わせるといことは大切だと思います。私も河崎先生とのご縁で、こめっこに出入りするようになって、いろんなことがわかるようになりました。私自身もこども病院では全然難聴がわからなかったもので、兵庫県のろう学校の先生に、直接お会いして沢山のことを教えていただきましたので、すごくよくわかります。それを制度化し、いろいろな施設の人がやらないと大阪は、大学が5つもあって、それぞれやっている面もあるのでなかなか難しく、規模の大きい自治体としての問題点もあります。岡崎先生はその中核施設の2箇所を経験されてどうですか？いろいろご提案を公表でいただきましたが。

岡崎／大阪府の耳鼻咽喉科医会で奥村隆司先生をはじめ諸先輩方のご尽力で、新スクの受検率も増えてきています。医会での新スクに関するデータ収集は2002年からされていて、かなりの蓄積があります。そのような中、聴覚障害児支援中核機能に関連する大阪府障害者施策推進協議会手話言語条例評価部会の担当の話をいただきました。中核機能や行政、医療機関の間に壁があると言わずに、うまく潤滑油のような役割ができればと思っています。

阪本／中核拠点の委員会に河崎先生と私と岡崎先生が入らせていただいていて、そこで少しでもMOEのような相談施設を周知していく、そこに繋がれるアクセスがとても大事だと思っています。そこをもう少し改善していければと思います。今の報告のように、相談件数も伸びているので、少しずつ認知も伸びているということでしょうか。

中尾先生にお聞きしたいのですが、相談内容はどんなものが多いですか？ご紹介いただきましたが、例えば保護者の方が多いとか、他にどんな人が来られますか？

中尾／やはり保護者の方が多いです。インターネットでいろいろ調べて、ご自身の力で、ひだまり・MOEにつながるご家族も多いです。最近では、保健師さんとのつながりが広がってきたので、すぐにつないでいただいて、0歳の早い時期にお会いできることが増えてきました。また、各自治体、保健センターなどから「こういうお子さんがいらっしゃるので、ひだまり・MOEをご紹介しますことはできますか？」というお問い合わせも増えてきています。着実に広がってきていると思っています。

阪本／自治体からの「こういう子どもがいるので、どうしたらいいですか？」という問い合わせに關してのコーディネートもされているということですね。こういう機能は大事だと思うので、それができる施設だということをいろいろなところに周知しないといけないですね。

河崎／私も難聴のことに限らず、臨床心理士の視点でということで、行政等から依頼を受けて講演に出向くときには、そこに参加しておられる学校の先生や保健師さんたちに、大阪府の取り組みの一つとして難聴児支援のことを伝えるようにしています。そこから輪が広がることを今すごく実感しています。大事なところだと思っています。

阪本／質問がいくつかきています。「産院での聴覚スクリーニングでリファーマと診断された場合に、保護者の同意があれば地域の保健センターに連絡が行き、早い支援に繋がるようなシステムは現在ないのでしょうか？」という質問がきています。今のところ、自動的に接続するシステムはないのですかね？

河崎／大阪府では自動的なシステムはありません。

阪本／こういうシステムは、岡崎先生に、いろいろご提案いただいたように、データをトラッキングすることが大事なので、それができるよう委員会でも進めていければと思います。岡崎先生、それに対して、具体的なご意見はありますか。

岡崎／大阪府は人口が多いので、すべてを1か所でというのが難しければ、何力所か拠点を作って、中核機能は統括するというような形で漏れがないようにしても良いと思います。

阪本／大阪は面積は小さいですが人口は多いので、それは考えていくほうが良いと思います。

他の質問としては、中川先生への質問です。「教育方法を限定する必要はない」とのことをおっしゃっていました。地域によっては病院のほうから「手話を使うと音声伸びない」と言われるという話を聞いたことがあります。そういう例についてはどうお考えでしょうか。よく聞かれる話と思いますが。

中川／私は限定する必要はないと思います。就学期までは、どういう方法で入れてもいいですが、学校に行き始めると、学習が始まるので、ある程度母語の

固定が必要だと感じています。20 数年関わってきて思うことは、小さい頃はどちらを選ぶと悩みながら、先ほど早川先生が言われたように、福岡はどこに行っても、音声も手話も使うような感じになっています。通常校ではできませんが、ろう学校に行っていれば大丈夫。その子たちが大人になって、できあがったとき、親の苦悩はなんだったんだろうという具合に、良い感じになっています。小さいときは悩んでいただき、上がってしまえば、その子なりにやطيعける。大切なのは、講演でも言いましたが、自信を失って引きこもってしまうことにならないようにすることです。「伝わることは楽しい」との話がさきほどから出てきていますが、私もそのとおりだと思います。方法論の選択段階で、最初の「寛容さがない」という言い方をしましたが、制限するものではない。

研究結果として、人工内耳をすれば手話を使わないほうが言葉の伸びが良い、という論文があります。それは言葉の伸びの評価を音声でやっているの、当たり前のことだと思います。先ほど飛ばしましたが、言語評価をしていくと、手話中心の子は、小学校3～4年生になるとその子なりの正しい評価ができなくなります。評価ができないから、言語が伸びていないのではなく、ただ単に評価ができなくなっているだけです。音声言語と手話言語は、そういうところが違います。

また、社会に出てからの差も多少はあります。先ほど酒井先生が言われたとおり、社会が手話話者を当たり前受け入れる体制にすることは理想です。現実にはそれができないので、現時点では、セルフアドボカシーが必要です。だんだん、将来的にそういうことが解決すればいいと思っています。現状は、どちらかを選ばせる施設があるのが現実です。それに対して、こめっこは、言い方は失礼ですが、「手話の巣窟だ」と言われていました。いざ見たら、全然そうではない。近々人工内耳がピカピカ光っている子も4割くらいいます。早川先生も言われましたが、福岡の特別支援学校も4割くらい人工内耳の子がいます。どちらでもいいとは言いませんが、どちらも選べて、どちらも使える、その子に適した割合でやطيعいき、成長するにつれて、その子を選んでいく、その環境が特に小さいときには大切だと考えています。なかなか地域の問題は難しいところがあります。学会として制度を整えないといけないと、手を付け始めているところです。

阪本／先生は難聴分野でも耳鼻咽喉科の中核的な先生ですので、先生が今後そのような立場におられることが、非常に心強いです。

早川先生に質問です。先生は、最初は大きいお子さんを支援されており、今は小さいお子さんをみられています。早く早期から関わるのが非常に重要と考えていいのですね。

早川／子どもが小さいときは保護者の不安が大きいと思います。子どもの支援も必要ですが、そのためには保護者の支援を優先することが大切です。親が子どもと通じることができると安心して楽しくなれば、親が変わる、そして子どもが変わっていく。そのためにも早期介入、早期支援が大切だと思います。

阪本／難聴がわかった時点ですごく不安になっているご家族に、どうしたらいいのか。我々はことばではわかっていても、実際にどうなのか、わかっていなかったことが、よくわかりました。小橋さんどうですか、今振り返って思えばどうでしょう。

小橋母／今思えば、自分でネットを見たりすると、文字だけでしか読めないもので、無駄に不安ってしまうことも結構ありました。実際に成人のろうの方に早く出会えたら、こんなに元気に幸せに大人になれるんだと、もっと早く出会えていたら不安はちょっとでも和らいだと思います。それが最初は病院に行って、難聴と診断され、療育に行くという日々が1年くらいありました。それと一緒に、こめっこや、楽しい手話のコミュニティに参加できたら、もっと楽しくうまく回っていたかなと、今となれば思います。

阪本／ご主人は？

小橋父／そのとおりだと思います。

阪本／ありがとうございます。そのところは、私もそのとおりだと思いました。

お話の中によくでてきたことですが、私もこめっこに参加させていただいて、診ている人工内耳の方が最初は手話ですごく話をされていて、大きくなると口でのお話が出てきた。最初はややこしいことは手話でしか言えないので手話になるが、両方使い分けているお子さんを見えています。そういう子どもは、自分でやりたい方法で話ができるなとわかります。バイリンガルに手話を入れることは、すごく良いのだらうと思います。このことがあまり耳鼻咽喉科医に伝わってはいないのは、難聴を診ている耳鼻科医それを実際目にする機会が、あまりないためだと思います。大阪でこのような試みがされていることを、医療機関の先生に知っていただき、一緒に子供をみて、その子が将来成長していったときの自分のアイデンティティや自己肯定感に大きく影響することが少しでもわかれば、見方も変わります。そのうえで人工内耳を使うことで音声コミュニケ

ーションもできるようになることが大事ことだと思います。そのあたりの位置づけは、難聴を治すという考えよりは、聞こえる、口話もできるようにすると考えたほうが良いと思っています。それは病院だけで医療を行っている医師がわからないことなのかも知っています。子どもの難聴は、耳鼻科医やそれに関わる先生方も勉強しないとわからないことも多いと改めて思いました。

河崎／先ほど、中川先生から、こめっこは手話の巣窟と言われていたとありましたが、逆に、ろうの方が見学に来られると、あそこは日本語、音声言語ばかりと聞いていたけれど、そうじゃないんだな、と言われます。ろうの方が来られても、完全な日本手話で全てがわかる、かつ、きこえるママパパが一瞬でも不安になったり、手話が難しい感じたりしないよう、内容がちゃんとわかる読み取り手話通訳するスタッフがいます。日本手話と日本語が確実な両輪で進んでいるので、見学に来ていただかないとわからない誤解があるのだなとつくづく思いました。

それぞれの聴覚活用で、こめっこの外では、子どもたちは使える音声は思い切り使い、よくしゃべります。アメリカンスクールの教室で英語ネイティブの先生が喋っていれば、そこではネイティブな英語を理解して話しますが、スクールを一步出るとママパパと日本語で喋っている、というようなバイリンガルな世界と同じです。幼児期にそのような体験をした後、聴覚がとてもよく使えて、地域の学校に行ったり、難聴学級に行った場合に、あんなにしゃべれた手話を忘れてしまうということも生じます。これは帰国子女についてよく言われることと全く同じで、だからこそ言語だと思うのです。帰国子女の親御さんがせっかくだからと英語などを残してやろうと努力をされる。でも、子どもはいらないお世話と思うかもしれませんが、親御さんの努力で、学童期に触れ続ける機会があると、青年期まで忘れずに残っているのと同様に、手話言語も、こめっこや POE で身につけた後、続けてもあこめの活動に参加してくれることで、一定守られていく状況を見てきました。英語やフランス語を忘れるかどうかは、ご家族の判断によりますが、きこえない子にとっては、手話の力が思春期以降が非常に重要になることを臨床心理士として体験したことを考えると、仲間と自由に通じ合える言葉をもって青年期を過ごすため、手話力の維持は「得するかな」と思っています。

阪本／最後に、皆さんからひとことずつお願いします。

中川／河崎先生が非常に良いことを言われましたが、音声言語で成育されたとしても、手話を維持することはとても良いことです。音声言語に行った子を私

がずっと見てみると、手話の世界にもどるというか、手話も使えるところにまた行って、そのときに、手話があると助かる。心理的な安定が、手話があると得られているのが事実です。手話を小さい頃に身につけて、音声言語のみの世界に行った本人たちに言わせると、友だちの手話は高度に発達していて、私の手話はヨチヨチだと言います。しかし、見てみるとその後、また上達します。小さな時期に、手話はいったん身につけておきたいと私は常に思っています。その後手話を主体にする、音声を主体にするか、それは本人たちが決めることだと思っています。今日は勉強になりました。ありがとうございます。

岡崎／難聴を早期に見つけることで、お子さんがどんな方法でコミュニケーションをとりやすいか、手話も含め音声も含め、トータルコミュニケーションをしながら豊かなコミュニケーションをできるように導くことがすごく大切だと思いました。小橋さんご夫妻に関しては、私も初期から医療関係者として接しており、人工内耳とか補聴をせずに手話にというのは、私の口から早期に手話に行きましょうというのは、心苦しく感じてしまう面もありますが、本日、ご夫妻から「振り返ってみれば、もっと早く手話に出会いたかった」というご意見をいただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。

早川／今日は、医療の現場の方、教育、療育、いろんな人が集まって話をする機会を得て、改めて感じたことは、医療のかたは少しでも聞こえを良くしたいということ。それがその方々の役割だと思います。そういった場もうまく使って、それだけでなく、教育、療育の場で私たちは子どもたちをずっと見守っていけます。私たちの現場の声も医療の方にも聞いていただき、皆で支援をしていくことが大切だと思います。そして、保護者が迷われたり、悩まれたりしないように私たちが連携することが必要だと思いました。中川先生がセルフアドボカシーが必要だと話されました。私の話の中の障害認識ともつうじることだと思います。子どもが障害認識をしっかり持ち、聞こえないものとしてのアイデンティティを持つ。読み書きができたり、聞こえたり、話したりできたりしても、それでも聞こえないことがあって、その中で幸せに育つためには、自己認識をきちんとする。そのためには親御さんが、自分の子どもについて認識する。保護者への支援を通して、子どもたちが自己肯定感、自尊心を持てる環境づくりをしたいと改めて感じました。本日はありがとうございました。

中尾／今日は、九州の中川先生、早川先生の取組を伺って、すごく学びになりました。また、大阪の小児難聴の医療現場で活躍されている阪本先生、岡崎先生とご挨拶できる関係になれて、とても嬉しく思っています。小橋さんの息子

さんのように、コミュニケーション大好き、お友だち大好きという元気いっぱいなお子さんが育ってくれる。武居先生のお話しにもあった、自己肯定感たっぷりの自信満々の子に育ってもらえることが、心理士としては一番の願いです。大阪でも新生児聴覚スクリーニング検査でリファーマーになったお子さんを追跡調査して見守り、切れ目のない支援ができる、1人のお子さんを皆で見守り、応援できる、そういう体制を作る役割をひだまり・MOE も一緒に担わせてもらいたいと思いました。今日はみなさんのお話しからパワーをいただきました。ありがとうございました。

酒井／皆さんがおっしゃったことに尽きると思います。日本手話が自然言語であるということを科学的な基礎として、今後の活動をどう展開するか、また改めて相談させてください。今日は非常に有意義な意見交換ができたと思います。ありがとうございました。

武居／一方で、手話の難しさが何かというと、聞こえない子が生まれたときに、保護者がすぐに手話を直接与えられない難しさがあります。保護者も学びながら子どもと手話で話をする。そのときに、外部の資源がとても大切になります。それが「こめっこ」の重要な意味だと思います。こめっこがなければ、手話で育てることのかなりハードルが高くなるので、そういう意味では、みんなで聞こえない子どもを支えていく、育てていくという発想が、家族が頑張っただけで子どもを伸ばすかではなく、みんなでその子を支えて、支援する、そのような社会の変容がこれから大きく求められるし、それがこめっこの活動だと思いました。以上です。

小橋父／本日はありがとうございました。このような難聴児の問題や今取り組んでいることを、これだけ近くで話が聞けたことがすごくありがたいです。

小橋母／お話の中にあった、自尊心を育てること。私も、ともすれば聞こえないからショックを受けたり、聞こえないことで伝わらなくて怒っている息子の姿を見て、「他の子よりも、自分はできないんだ」というときに、できるところや、できているところ、すごいところをちゃんと見てあげて、自尊心が折れないように、育てていきたいなと改めて思いました。今日は勉強させていただき、ありがとうございました。

阪本／ありがとうございます。今日のシンポジウム、講演は非常に示唆に富む、勉強になることが多かったです。みなさま、ありがとうございました。

河崎／酒井先生も言ってくださったように、今日は大事な機会だったと思います。ここからまた進んでいけるという感触を持つことができました。本当にありがとうございました。支えてくれたスタッフ、準備に関わってもらった方々に心からお礼をお伝えします。

資 料

【資料-1 基調報告】

基調報告

こめっこはどこへ向かうのか？

NPOこめっこ 常務理事
久保沢 寛

本日お話しする内容

- 1.こめっこ参加状況(ろう・難聴児について)
- 2.研究プロジェクトについて
- 3.こめっことしての今後の課題と展望
- 4.もあこめ手話合宿について

1

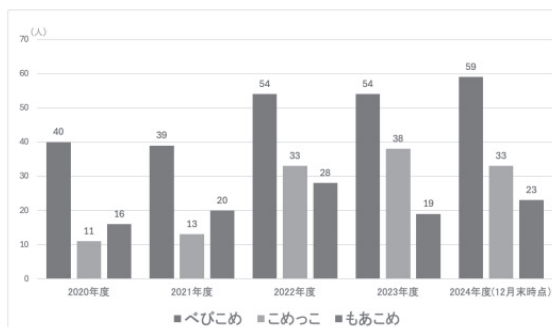
2

1.こめっこ参加状況(ろう・難聴児について)

対象年齢	名 称	活動日	活動頻度
0～3歳台	べびこめ	○平日べびこめ(毎週火・金曜日) ○土曜べびこめ(第1・3土曜日)	10回/月
3～6歳台 (幼稚園)	こめっこ	○土曜こめっこ(第1・3土曜日) ○放課後こめっこ (翌日に土曜こめっこがない金曜日)	4回/月
小学生	もあこめ	○土曜もあこめ(第1・3土曜日) ○放課後もあこめ (翌日に土曜もあこめがない金曜日) ○もあこめzoom(第2・4水曜日)	6回/月

3

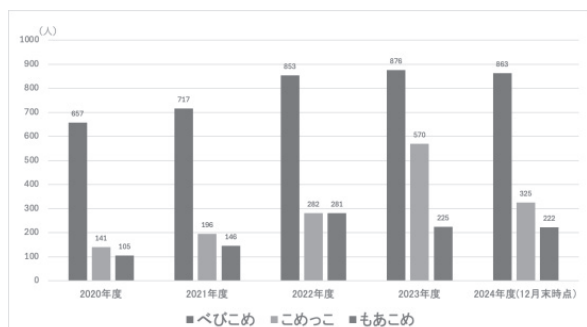
1.こめっこ参加状況(ろう・難聴児について)



参加実人数 図1

4

1.こめっこ参加状況(ろう・難聴児について)



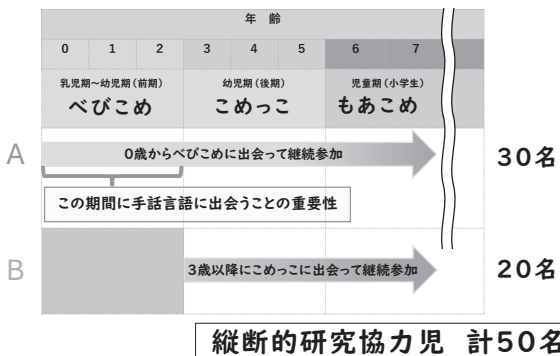
参加延べ人数 図2

5



6

1. こめっこ参加状況（ろう・難聴児について）



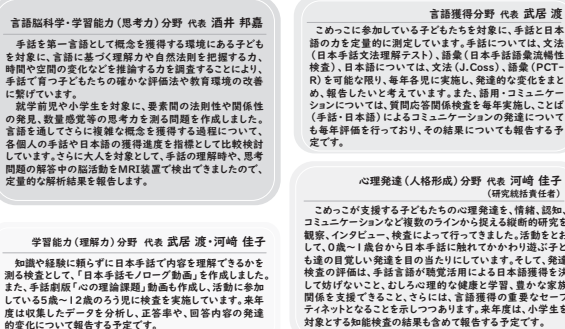
7

2. 研究プロジェクトについて



8

2. 研究プロジェクトについて 手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト



9

3. こめっことしての今後の課題と展望

- ①縦断研究の継続
- ②日本手話によって日本語を習得する支援方法の構築
- ③こめっこメソッド（乳幼児期手話言語獲得および家族支援）を全国に広げる

10

一般社団法人 POE

児童発達支援・放課後等デイサービス事業所

ぐんぐんPOEは…

子どもは赤ちゃんの時から、あらゆる感覚を使って物事を捉え、たくましく育つ力に満ちています。そして、視覚を活かして成長するきこえない子どもたちは、世界を目で見え理解し、感じます。そんな子どもたちの自然な手話（ことば）を大切に、発達を支えていきます。



11

4. もあこめ手話合宿について



12

【資料-1 特別講演】

2024年度大阪府手話言語条例シンポジウム
手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト
乳幼児支援のあり方 ～こめっこの進む道についての示唆～
大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター 2025年2月8日

新生児聴覚スクリーニング検査から早期支援、教育へ
～福岡の現況と、そこに至る道筋～

なかがわ たかし
中川尚志

九州大学大学院医学研究院
耳鼻咽喉科学分野



1

1. 福岡の教育・医療連携について

まず自己紹介と
私が小児難聴に関わり始めたきっかけ、
なぜ今のようなスタンスなのか
お話します



2

福岡県について

(2024年 現在)

福岡地区	257万人
筑後地区	82万人
北九州地区	129万人
筑豊地区	42万人
総数	510万人
出生数 / 年	4万6千人



歴史的にも九州の他の県と異なり、複数の国、藩から成立し、
地域によって文化や気質、方言が異なる。
大陸とも近い商業地であるため、開放的、外向きの気風。
人口密度が三大都市圏以外で唯一1,000 人/km² を超えている繁華な県

3

私が小児難聴に関わるきっかけ

九大病院では小児難聴を専門にしている先生がおらず
私の知識も「こどもは難聴が50-60dB以上だったら補聴器が必要！」ぐらい
大学に乳幼児聴力検査の機器もなかった。
福岡県の難聴児が人工内耳を希望した時は遠方まで行かなくてはならず
地元出身で聴覚に関わる医師としての“責任”を感じ、
小児難聴についての勉強を始めた
小児の人工内耳を行うには関連施設との協力が必要...と知った

まずは小児難聴の関連施設に出向いて挨拶をしよう！

それから、現場で様々なことを学んでいきました

教科書でなく...

4

教育・療育サイドからは「何か用ですか？」という反応

とにかく...療育施設、教育機関を積極的に訪問
難聴児が診察に訪れたときから密に連絡をとる

- ・ 学校はヒエラルキー社会:校長先生へ手紙
- ・ 聴能(現自立)担当の先生の意見を伺う
- ・ 保護者に行った説明はすべて療育サイドに報告
- ・ 多忙でも、連絡を怠らない

当事者との関わり、ここが私の原点
多分、ここが他の耳鼻科医と異なる？

各施設の今までの療育法を尊重
現場の声をを知るために、養育者、ろう者、教育者が主催する集まりに参加

5

福岡県の療育施設と行政区分

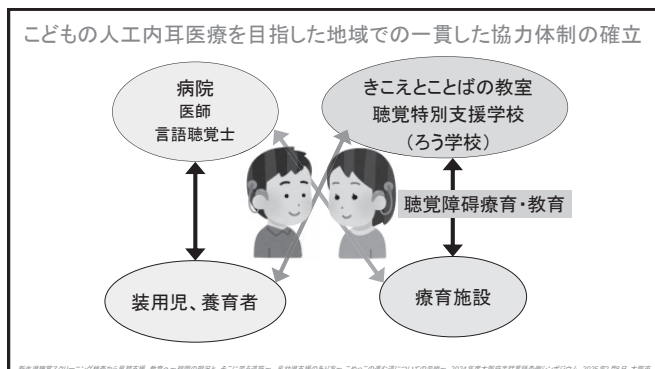
療育の考え方や手法、環境が地域や施設によって
異なっていることを知った → 療育にも多様性



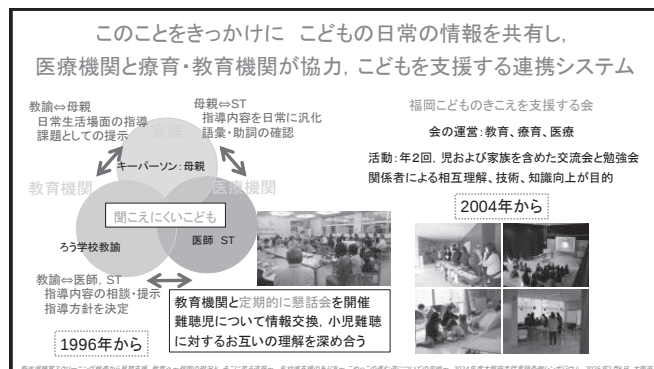
ふたつの政令指定都市に各々、
難聴児療育施設。
行政区分が三つに分かれる。

● 聴覚特別支援学校4校 ● 二つの難聴児療育施設

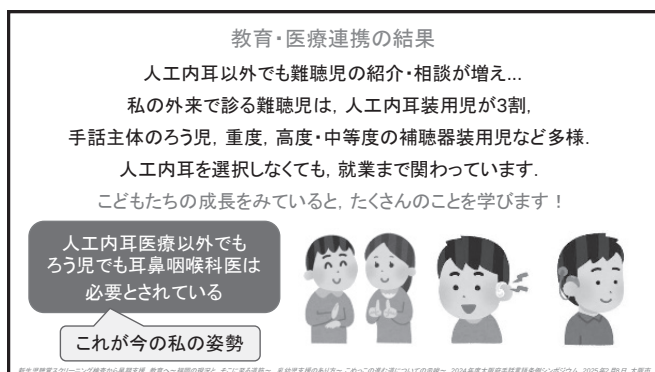
6



7



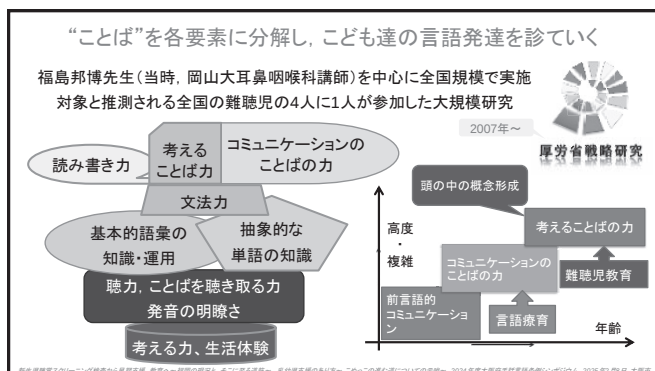
8



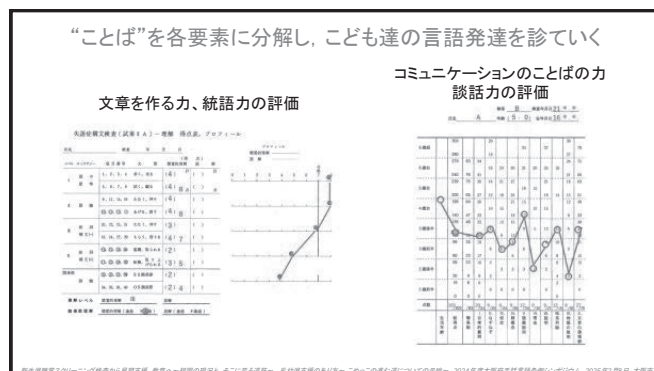
9



10



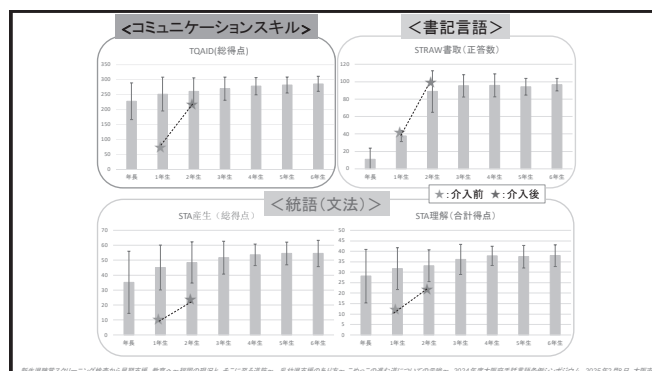
11



12



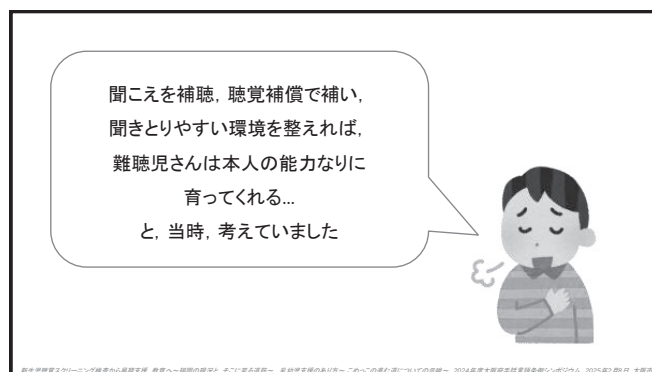
13



14



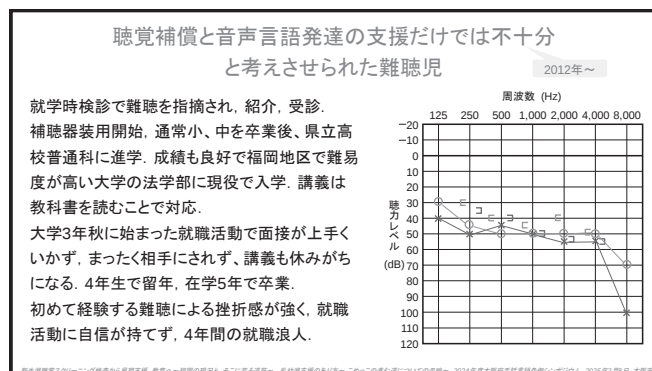
15



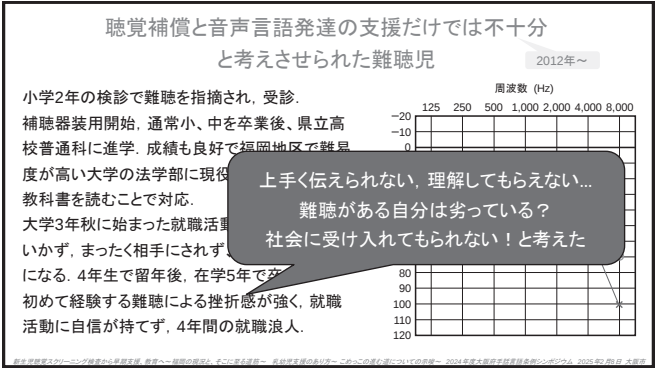
16



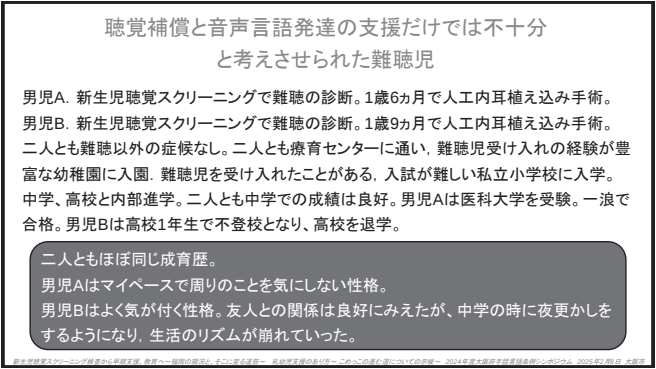
17



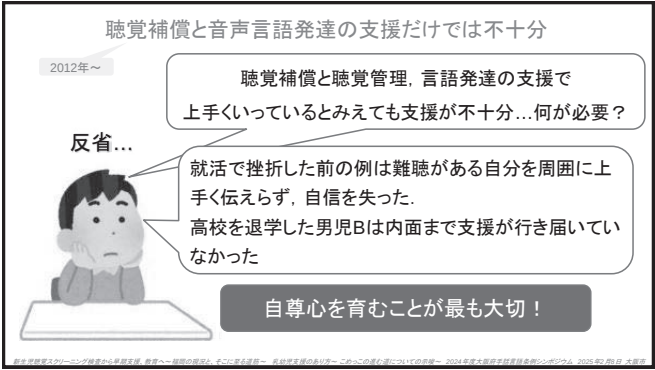
18



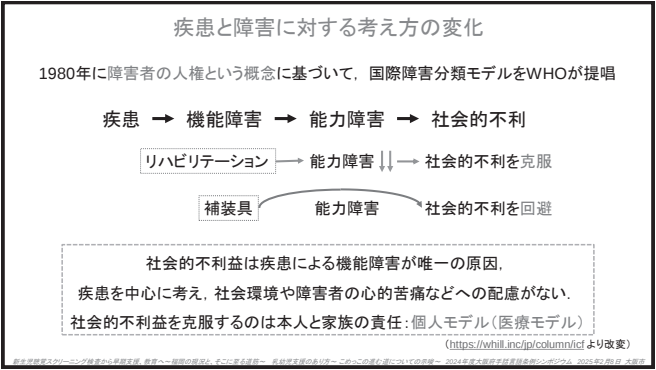
19



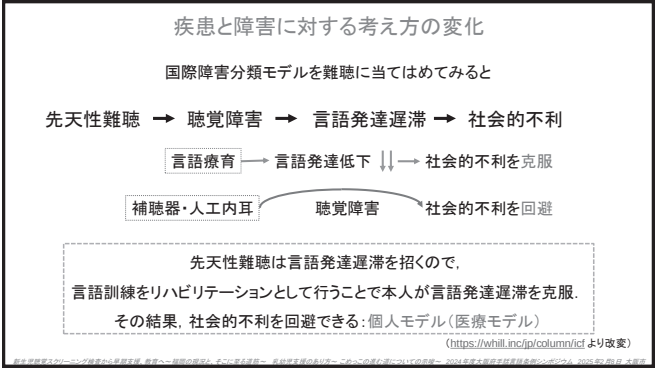
20



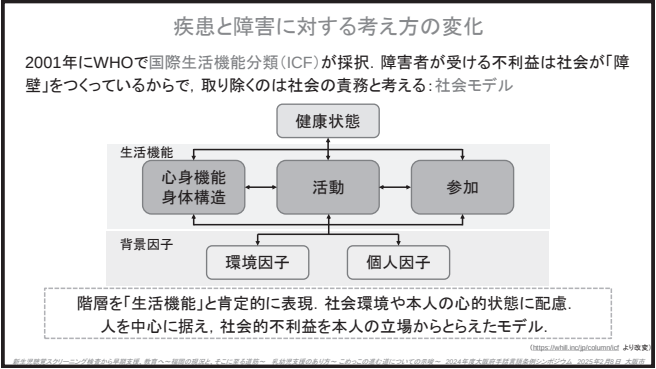
21



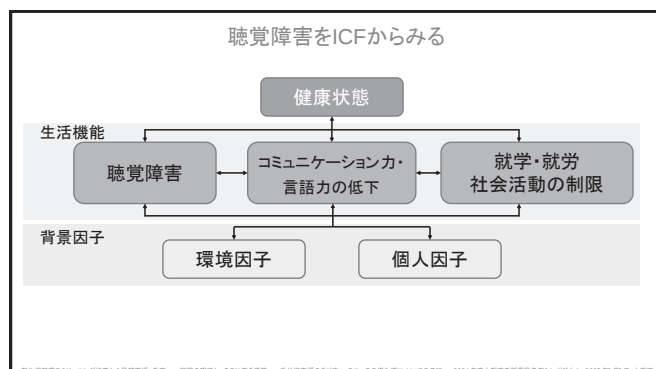
22



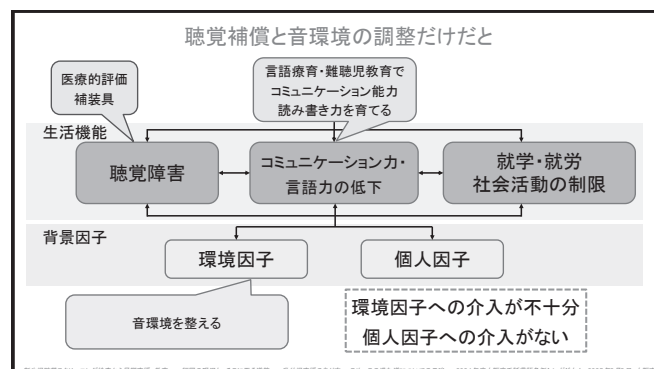
23



24



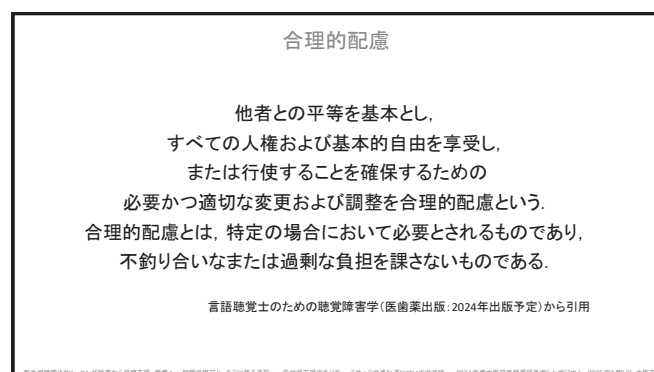
25



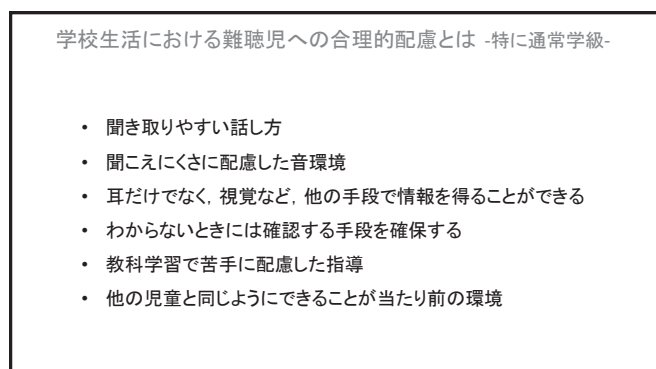
26



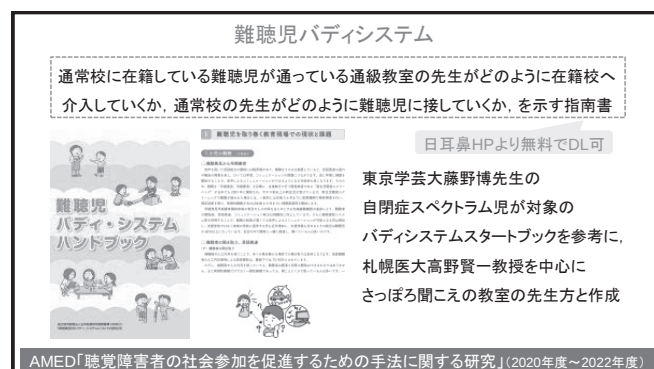
27



28



29



30

難聴児パディシステム

難聴による困難さを意識せずに関われる相手
 難聴に関係なく忌憚なくかわろうとする相手が、パディです。
 パディはいろいろなことを一緒に考え、楽しめる相手です。
 そのような相手とは、ことばを超えた内容を共有することを楽しんでいるので、
 いつの間にか難聴のことを忘れ、関わられます。
 自己が主体となりパディとともに次の目的に向かいます。
 一方で、自分から困っていることもできることも発信する必要があります。
 何も言わないと、周りの人は困っていないと考えてしまいます。
 発信する力をセルフアドボカシースキルと呼びます。
 相手もあなたと一緒に考えることでたくさんの学びがあります。

31

難聴児パディシステム



32

セルフアドボカシーとは？

障害のある当事者が必要なサポートを獲得するために自分で声を上げて
 周囲と交渉、同意に至る技術

- ✓ 聞こえないことを認識：音の存在を理解、騒音や距離の問題を認識。
- ✓ 聞こえるために必要なことを知る：
 - 補装具の基本的な知識、補聴支援機器の知識。
- ✓ 聞こえればできることの認識：得意なことの確認、自信と自尊心。
- ✓ 社会の制度についての知識：
 - 社会システムとその成り立ち、基本的人権・法律について

33

セルフアドボカシースキルを学ぶ「聞こえのワークブック」

ついでに宣伝

中学生から高齢者までを対象とした「聞こえのワークブック」を南修司郎先生が中心に作成。
 自分で記入しながら、聴覚について・聴覚支援機器について・コミュニケーションについて
 セルフアドボカシースキル、環境調整など環境因子と個人因子について学べる内容



34

4. 早期発見・早期療育に向けて - 国の動き -



35

難聴対策推進議員連盟

議連がスタートすると当事者団体や難聴関連の様々な組織が関与。
 国際生活機能分類の概念と障害者権利条約に基づく国の方針に従って、
 民主主義の理念である様々な意見を集めるとの原点に立ち返り、
 2019年12月にジャパンヒアリングビジョンとして先天性難聴児に限らない、
 加齢性難聴も含めた内容を含む政府への要望書がまとめられた。

36

ジャパンヒアリングビジョン

難聴対策推進協議連が難聴対策の指針を提言

難聴者が誰一人取り残されず、
生き生きと心豊かに暮らすことのできる社会の実現

- ① 出生前・新生児期及び小児期における難聴対策
 - ② 成人期・老年期における難聴対策
 - ③ ライフサイクルに応じた難聴対策を支える基盤づくり
- を3本の柱として掲げ、政府の骨太の方針に加えられた。

最初に①の小児難聴に取り組まれることになり、
厚労省と文科省が連携し、検討。
調査報告の結果、各都道府県の地域差が浮き彫りになった。

37

難聴児の早期発見・早期療育における問題点

難聴児の早期発見・早期療育を支える社会システムには地域差がある

- ・ 難聴児のその後を含め、理解、取り組んでいる耳鼻咽喉科医師が少ない
- ・ 難聴児の早期発見に関係する産科、療育の関わる小児科との共通認識の欠如
- ・ 療育・教育機関との連携における風通しの良さの違い
- ・ 社会的な器を作る行政組織の地域間での温度差
- ・ 難聴者・ろう者などの当事者団体とのつながり



養育者はインターネットで様々な情報が得られる時代になっている
得られる情報と地域差との違いが養育者の困惑を招く実態がある

38

新生児聴覚検査体制整備検討事業

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部が文部科学省初等中等教育局の協力を得て
「難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針作成に関する検討会」を開催



Press Release

令和3年3月19日
社会局
社会・援護局障害保健福祉部企画課
課長 堀 俊 平田 (3003)
課長 堀 俊 藤田 (3019)
【電話・直通】 03(3595)2389

報道関係者各位

第1回難聴児の早期発見・早期療育のための基本方針作成に関する検討会
(オンライン会議)を開催します

2021年3月36日 第一回検討会
2021年5月28日 第二回検討会
2021年6月24日 第三回検討会
2021年7月28日 第四回検討会
2022年1月28日 第五回検討会

YouTubeで公開
基本方針を作成
2022年2月25日公開

(https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_24107.html)

都道府県の難聴児早期発見・早期療育
推進プランの作成指針として
新生児聴覚検査に係る取組の推進、
早期療育の促進のための保健、医療、
福祉及び教育の連携の促進、
難聴児の保護者への適切な情報提供
の促進等を内容とする基本方針を作成

39

難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針

(厚労省HPで令和4年2月25日公表)

広く情報を提供し、選択の自律性を担保、継続した支援をする

<基本的な考え方>

- ✓ 早期発見の重要性
- ✓ 保健、医療、福祉及び教育の連携
- ✓ 本人及び家族等を中心とした支援
- ✓ 学校や障害児通所支援事業所等関係機関における取組の重要性
- ✓ 切れ目ない支援の必要性
- ✓ 多様性と寛容性(共生社会の実現)

40

難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針

多様性と寛容性：共生社会の実現

聞こえる、聞こえにくい、聞こえないにかかわらず、多様性を認め合う寛容性をもった社会、聞こえる人も聞こえにくい人も聞こえない人も共に生きる共生社会づくりが重要である。言語は思考の礎にもなる重要な要素であることを認識し、それぞれの難聴児が本来持つ力を生かして習得できる言語は何かということに立ち返り、言語・コミュニケーション手段の選択肢が限定されことなく、どの選択肢も保障・尊重されることが望ましい。また、どのような選択肢にしても、難聴児の発達に関する理解に基づく療育及び教育が受けられる環境を整えていくこと、本人が成長した時に自身の言語・コミュニケーション手段を自ら選択し、決定するという過程を保障することが重要である。

41

難聴児の早期発見・早期療育推進のための基本方針

地域の実情に応じた取り組み

- ① 新生児聴覚検査体制の整備：リファリー児の追跡調査、手引きの作成・活用、受検率の向上、精度管理、検査体制の強化
- ② 地域における支援：地域における人的資源及び現状を把握したうえで関係機関の日常的な連携や認識の共有をはかる。多様な関係者を参画させ、当事者を連携体制に加える。特に多様性・寛容性に配慮。
- ⑤ 切れ目ない支援に向けた取り組み：軽中等度、進行性や遅発性、一側性難聴。どの地域でも適切な指導援助・支援を受けられる取り組みの検討。

42

5. 福岡県の取り組み



43

福岡県における新生児聴覚検査体制整備検討事業

福岡県新生児聴覚検査体制整備検討会議

マニュアル作成

委員メンバー

委員長: 中川 (学識経験者)

委員: 福岡県医師会理事: 小児科医, 産科医

各科専門医会: 産婦人科医会, 小児科医会, 耳鼻咽喉科医会

福岡県助産師会, 福岡聴覚特別支援学校

地方自治体子育て支援課, 住民課, 福岡県保健所所長会

聴覚特別支援学校PTA, 福岡県聴覚障害者協会

新生児聴覚検査から療育まで
連携なく円滑に繋ぐための
事務処理マニュアル

当事者・当事者団体に
入ってもらいました

令和3年8月
福岡県

44

福岡県における新生児聴覚検査体制整備検討事業

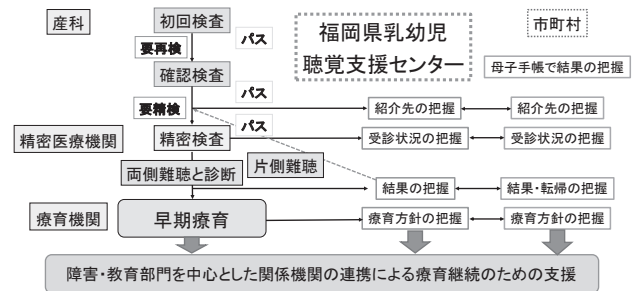
2021年1月16日より

県医師会内にあるメディカルセンターに
福岡県乳幼児聴覚支援センターを開設
ろう教育の免許をもつ教諭,
小児難聴を専門とする言語聴覚士を
2人が週3日, 嘱託雇用
県内の関連医療・療育・教育機関に配布
福岡県のHPIに掲載



45

福岡県における新生児聴覚検査体制整備検討事業



46

福岡県における新生児聴覚検査体制整備検討事業 福岡県乳幼児聴覚支援センターの役割

1. モニタリング(精度管理)

2. トラッキング(追跡)

3. 電話相談



47

養育者への心理的サポート

新生児聴覚スクリーニングで難聴の
疑いがあることがわかりました。
精密検査をお勧めします！

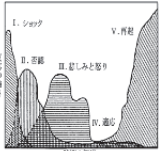
せっかく授かった赤ちゃんに難聴の疑いがあると
急に言われても
…認めたくない！



48

養育者への心理的サポート

障害受容の過程は混乱から回復までの段階的な過程として説明されることが多い (Drotarの段階説, 1975)。



すべての親に「障害の受容」を越えなければならない課題と期待した場合、まだ、その段階にない親に過酷な要求をすることになる。結果、専門家の恣意的な判断が親の苦悩をより深める。聴覚障がいについての事実を知り、聴覚障がいに対する適切な認識をもつ、「障害認識」にたどり着くことが最初の目標

親の苦悩に配慮でき、共感の姿勢を示すことが重要。
障がいについての事実と適切な認識をもつように変容を促すスキルが必要。

49

養育者への心理的サポート

こどもさんの利益である早期療育につなげるために、
ショックを受けた養育者の心のケアに行政保健師さんのご支援が必要です！




母子手帳に新生児聴覚検査の実施と結果が記載される欄が設けられました(厚労省令様式 p17)

50

福岡県乳幼児聴覚支援センターへの相談

福岡県乳幼児聴覚支援センターについて



ご相談受付日 月・水・金曜日(年末年始・祝日も除く) 10時～18時まで
電話番号 092-402-2673(直通)
FAX 092-405-3126
E-mail fukuoka@fukuoka-med.ac.jp

多様な相談内容



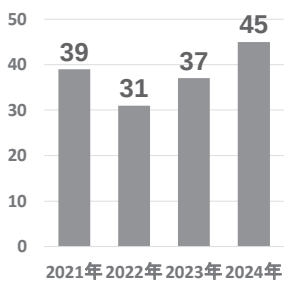
どのような相談がきているか、まとめてみました

51

相談事例数

2021年の開設から
2024年9月までの対応実績
累計1,026件

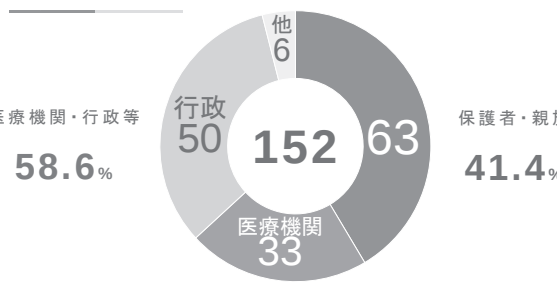
152



年	相談事例数
2021年	39
2022年	31
2023年	37
2024年	45

52

相談者別

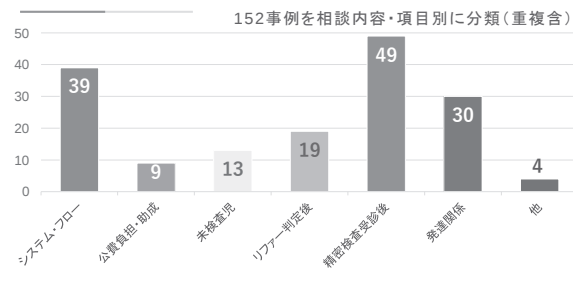


相談者別	件数	割合
医療機関・行政等	50	58.6%
保護者・親族	63	41.4%
他	6	
合計	152	

53

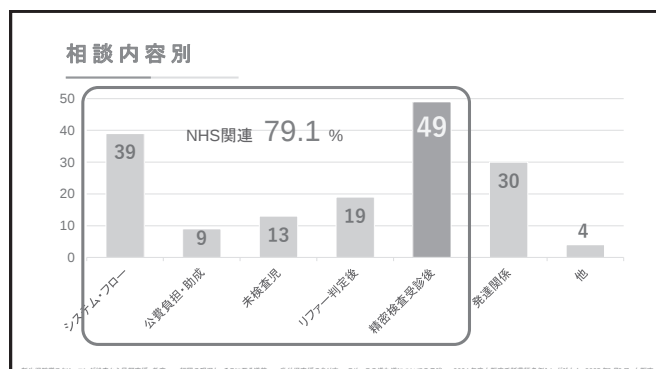
相談内容別

152事例を相談内容・項目別に分類(重複含)

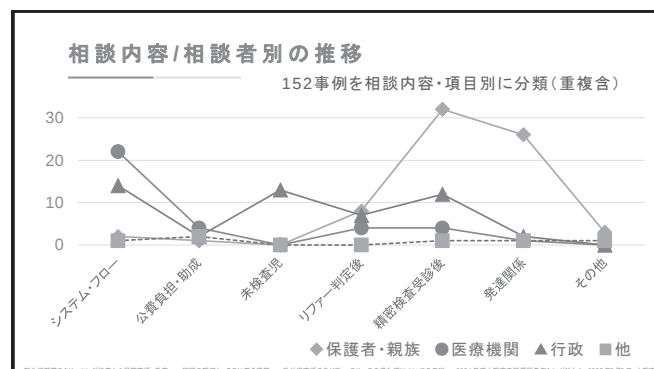


相談内容別	件数
システム・フロー	39
公費負担・助成	9
未検査児	13
リアパー判定後	19
精密検査受診後	49
発達関係	30
他	4

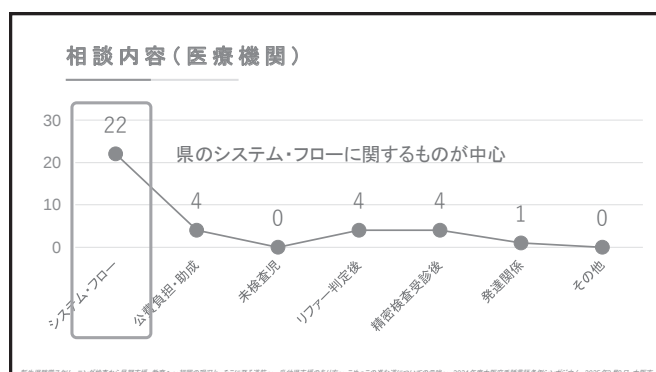
54



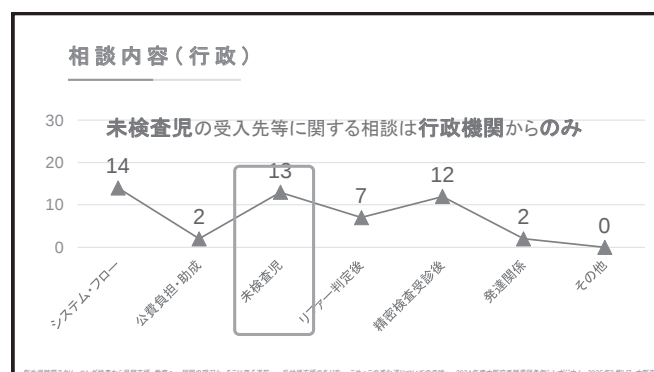
55



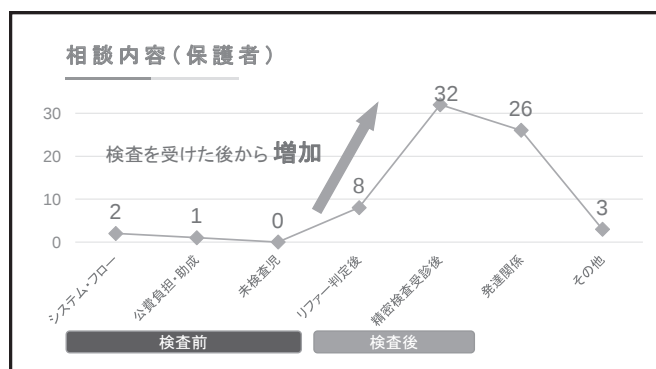
56



57



58



59

相談事例③リファーマへの不安

保護者(母)

スクリーニング検査で耳が聞こえない可能性がある、との結果が出た。これから子どもと、どのように接していけば良いのか分からない。

検査結果は片耳リファーマ、感情が不安定なことを自覚されており、入院中の医療機関からセンターを紹介されて、相談につながった。

- ❖ 不安を傾聴
- ❖ 精密検査を受けるまでは耳が聞こえないかどうかは未確定なこと
- ❖ 難聴についての正しい情報提供

60

相談事例④ パスであったが...

保護者（母）

日頃の様子から、音への反応が薄いように感じる。
新生児聴覚スクリーニング検査では「問題なし」と言われたが、
聴こえていないのではないかな。
詳しい検査を受けたほうが良いのか。

まずは保護者の不安を傾聴。
耳鼻咽喉科への受診や療育機関への訪問を希望されたため、
居住地近くの機関を紹介した。

61

相談事例④ パスであったが...

保護者（母）

呼びかけに振り向かない等、反応しないことがある。
これからどうしていけばよいのだろうか。

まずは保護者の不安を傾聴。
対象となる児の日頃の様子を尋ねて、考えられる可能性を示し、耳鼻咽喉科へ
の受診や療育機関への訪問を検討してはどうかとアドバイスした。
◆療育機関への訪問に前向きな回答が得られたため、居住地近くの機関を紹介
した。

62

耳の聞こえと言葉の発達チェック

※ 赤ちゃんの発達には個人差がありますが、参考にしてください。

- 【0歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【1歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【2歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【3歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【4歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【5歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる

- 【6歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【7歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【8歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【9歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる
- 【10歳児】
- ① 顔を覗き込んでみる
 - ② 顔を覗き込んでみる
 - ③ 顔を覗き込んでみる

63

相談事例⑤ 療育・福祉に関すること

保護者（母）

両方の耳が聞こえないと言われた。
子どもの将来のことを考えると不安で仕方がない。
補聴器や人工内耳、今後の進路について、どう考えていけば良いのか。

不安に感じている点を1つずつ聞き取り、それらに対して、アドバイスすることで
安心感を与えることに努めた。
◆ 難聴児の親の会を紹介

64

相談事例⑤ 療育・福祉に関すること

保護者（母）

片方の耳は全く音が聞こえていない状態と言われている。
受けられる福祉サービスがあれば、教えて欲しい。

両側難聴児に提供されるような福祉サービスは一側性の場合、
適応されないことを説明した。
※ 日常生活における注意や配慮が必要となる事項があること等を情報提供

65

相談事例⑦ その他

保護者（母）

難聴学級に通っているが、周囲とのやり取りが上手くできていないようだ。

幼稚園の先生から、大きな音に怯えて、隠れてしまうことがあると聞いた。
耳の問題があるのか、気になっている。

進級にあたり、補聴支援システムの購入申請をしたが許可がおりないと回答が
あった。どうすれば良いだろうか。

66

今後の課題

関係機関との連携

福岡県における情報共有の仕組み

福岡県乳幼児聴覚支援センターの役割等の周知が不足

- ◆ 行政機関：研修会等を通じて、周知と協力依頼
- ◆ 療育機関：会議への参加等を重ねて、協力し合える関係づくり
- ◆ 医療機関：関係者向けの説明会を開催して、周知と協力依頼
- ◆ 小児科等への広報・周知活動

67

今後の課題

一側性難聴児への情報提供

両側難聴と診断された児と比較すると、

専門家などからアドバイスを受ける機会が少ない傾向が伺える

68

69

共生の社会への実現に向けて

聞こえない・聞こえにくい子どもたちと関わる時、最も大切なのは、
本人および養育者と心情を共有し、本人が周囲の環境を俯瞰する力と
自立した生活への自信、および、自尊心を育むことへの支援です。
それには...養育者支援、療育・教育体制を整え、
聞こえにくいことで不利益を被らない社会を作らなくてはなりません！

70

デフリンピック2025東京大会
2025年11月15日(土)から26日(水)の12日間、開催予定
日耳鼻、臨床耳鼻科医会が合同で協力予定

オリンピックは平和を守り
パラリンピックは勇気を生み
デフリンピックは
夢を育む

長い話し、最後までありがとうございました！

Deaflympics
ろう者のオリンピック

デフリンピック
に参加・応援
しよう！

71

【資料-1 指定討論(岡崎)】

1

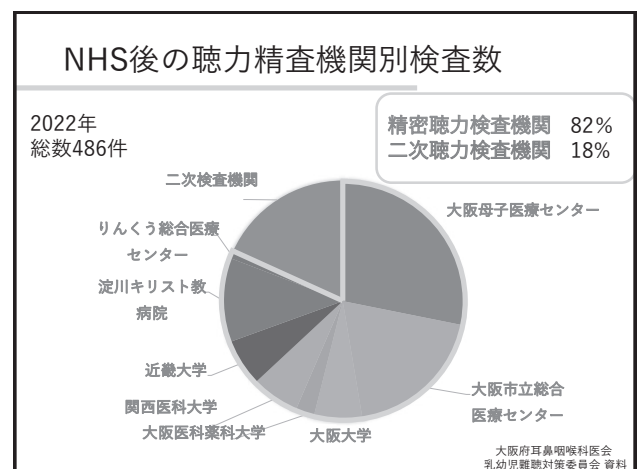
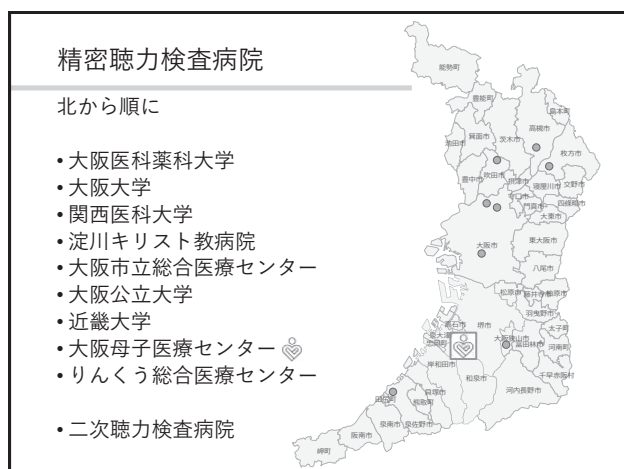
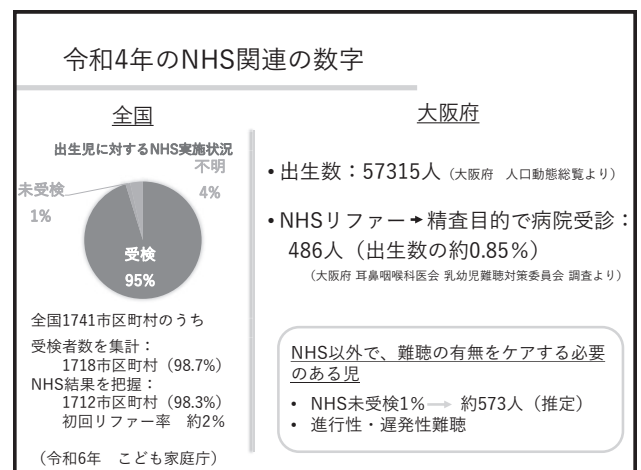
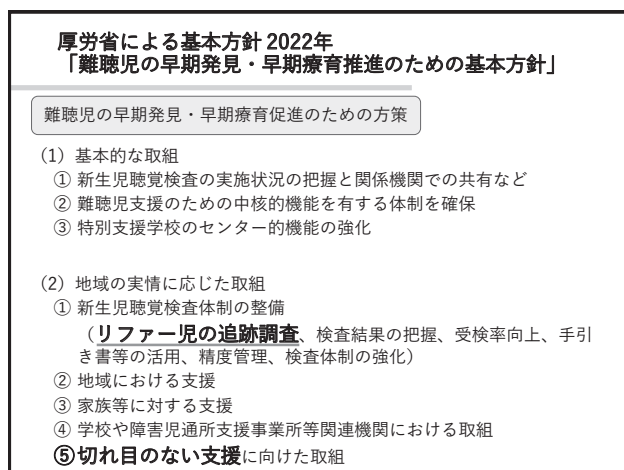
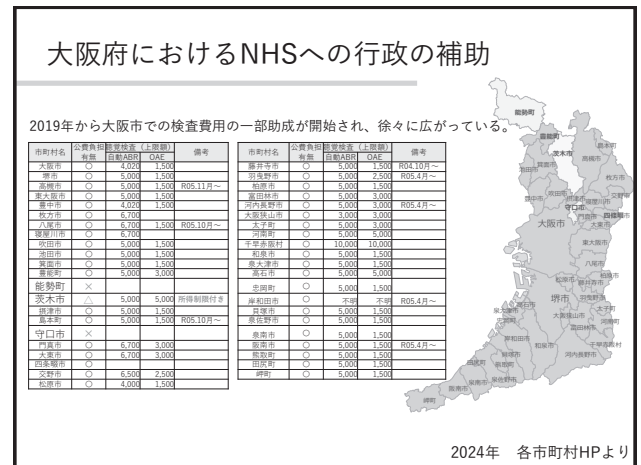
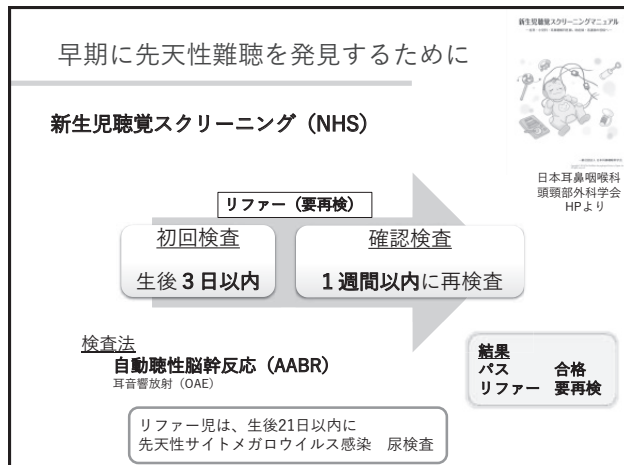
2

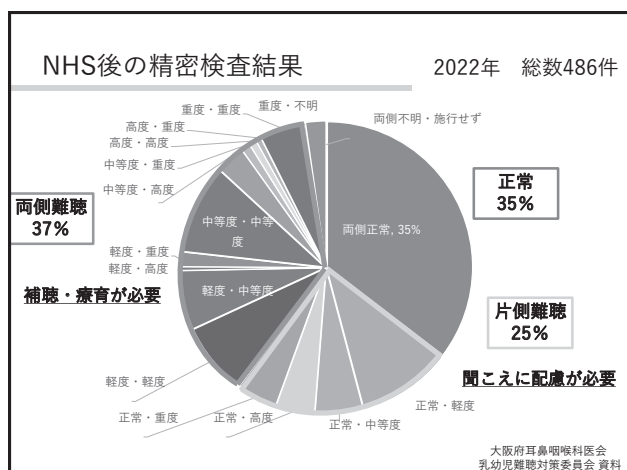
3

4

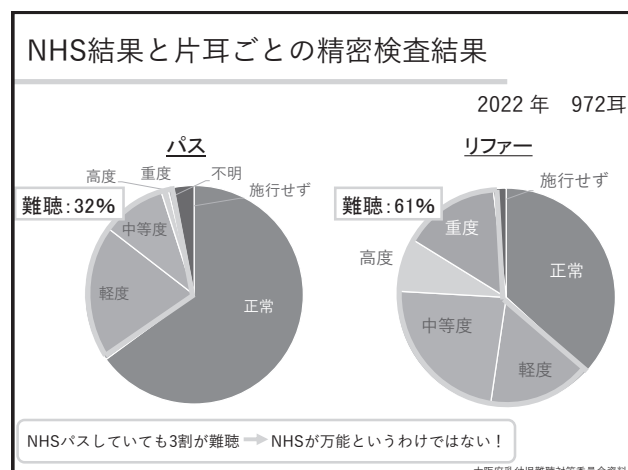
5

6





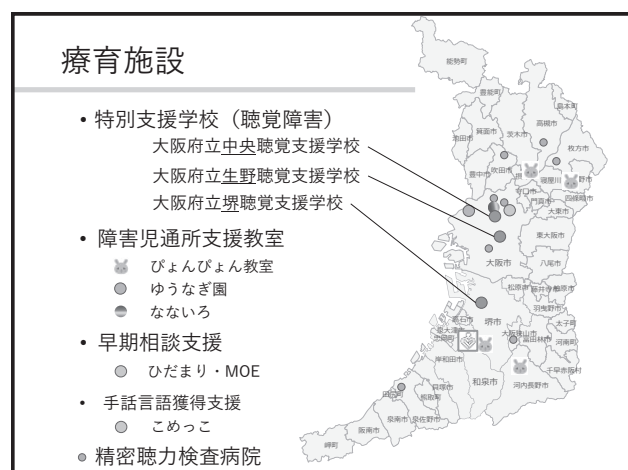
13



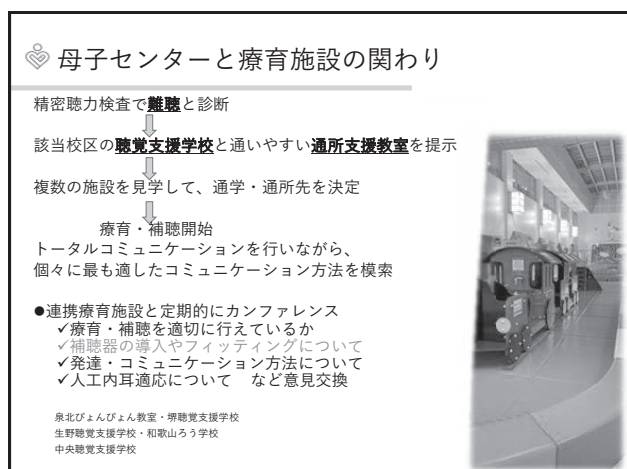
14



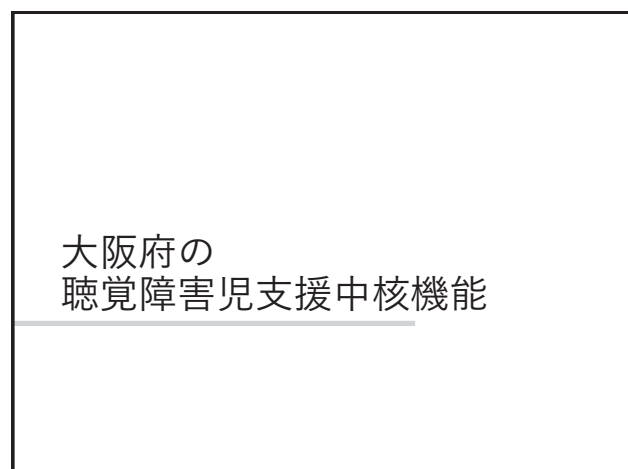
15



16



17



18

聴覚障害児支援中核機能

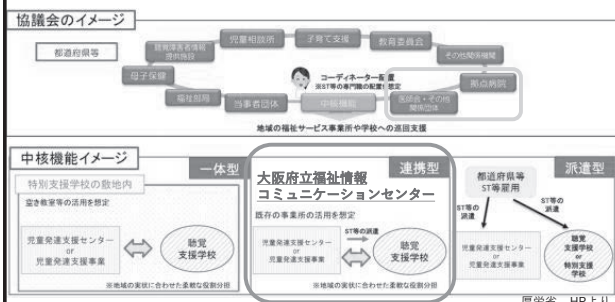
1. 聴覚障害児に対応する協議会の設置
2. 聴覚障害児支援の関係機関との連携
3. 家族支援の実施
4. 巡回支援の実施
5. 聴覚障害児支援に関する研修等の開催

厚労省 HPより

19

聴覚障害児支援中核機能

1. 聴覚障害児に対応する協議会の設置
大阪府障がい者施策推進協議会 手話言語条例評価部会



厚労省 HPより

20

聴覚障害児支援中核機能

1. 聴覚障害児に対応する協議会の設置
2. 聴覚障害児支援の関係機関との連携
3. 家族支援の実施
4. 巡回支援の実施
5. 聴覚障害児支援に関する研修等の開催

連携

各聴覚支援学校、通所施設の実施をサポート

厚労省 HPより

21

耳鼻咽喉科医が期待する

中核機能の役割

コーディネート機能

支援が必要な児を把握して、適切な医療・療育施設へつなげる

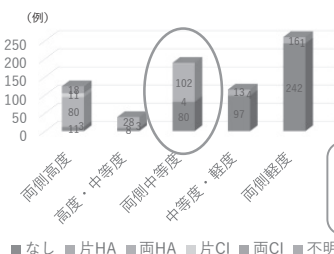
- ・乳幼児期に十分な療育を受けていない児
- ・就学後に支援が必要な児
 - ・インクルーシブ教育で困難を抱えている児
- ・NHSを受けていない児
- ・NHSパス後の進行性、遅発性難聴児
- ・病院への通院が途切れている片側性難聴児

など

22

難聴程度別の補聴介入

2013年1月から2017年12月にNHSを受けた児 1966人



両側中等度難聴の43%で補聴器装用なし

- ・補聴器の必要性を保護者に理解してもらう
- ・継続的な難聴療育を行う

太田ら, 小児耳鼻, 2023

大阪府耳鼻咽喉科医会 乳幼児難聴対策委員会

23

支援対象の把握方法

問題点

- ・療育施設へのアクセスに地域格差がある
- ・聴覚支援学校が複数ある
- ・インクルーシブ教育の普及
- ・個人情報の取り扱い

トラッキング方法の構築が必要

- ・行政の健診時
- ・学校検診 など

個人情報を伴うため、行政との連携が必須

24

耳鼻咽喉科医が期待する

中核機能の役割

後方支援機能

・言語聴覚士の育成促進

- ・難聴療育に経験豊富な言語聴覚士に限られている
- ・難聴療育に習熟するためには時間を要する
- ・インクルーシブ教育現場への巡回の重要性
- ・補聴器の取り扱い
- ・養護教諭などが言語聴覚士資格を取得するための補助

行政

・言語聴覚士を派遣できるシステムの構築

- ・行政の健診時に言語評価を行う
- ・産休・育休による休職のカバー

行政・言語聴覚士会

など

25

早期発見・療育の成果



26

お子さん

NHS : OAE 両側リファクター、AABR両側リファクター

ABR : 2カ月齢 右95dB、左scale out
補聴器装用継続、療育通所

人工内耳ハビリテーション（病院）
療育通所
ご家族による家庭での言語訓練

1歳2か月 両側人工内耳植え込み

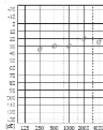
3歳0か月

遊聴聴力検査

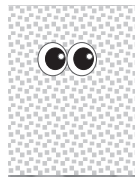
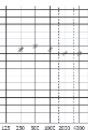


装用閾値検査

右人工内耳



左人工内耳



27

まとめ

難聴児が、笑顔で自立した生活を送ることができるようになるために

- ・療育・教育体制の拡充（人材育成など）
- ・難聴児のトラッキング



28

大阪府手話言語条例シンポジウム

乳幼児支援のあり方

～特別支援学校乳幼児相談担当の視点から～

福岡県立久留米聴覚特別支援学校
乳幼児教育相談担当 早川 恵

1

福岡県立久留米聴覚特別支援学校

小倉聴覚特別支援学校
直方特別支援学校
聴覚障がい教育部門
福岡聴覚特別支援学校
福岡高等聴覚特別支援学校
久留米聴覚特別支援学校

福岡県南地区を担当する聴覚特別支援学校

2

福岡県立久留米聴覚特別支援学校

幼児児童生徒数

学級	人数
幼稚園部	13名
小学部	24名
中学部	16名
幼児児童生徒数	53名

3

家族支援の実施(乳幼児教育相談ひよこ組)

【対象：0～5歳児】
グループ指導(0～2歳児)
個別指導(0～5歳児)

年齢	人数
0歳児	12人
1歳児	5人
2歳児	6人
3歳児	0人
4歳児	0人
5歳児	0人
合計	23人

R6・12月現在 ※1度だけの相談は除く

4

新生児スクリーニング検査受検率

【R2】

受けた 82%
受けなかった 18%

【R6】

受けた 100%

5

R6 療育開始の月齢(計23名)

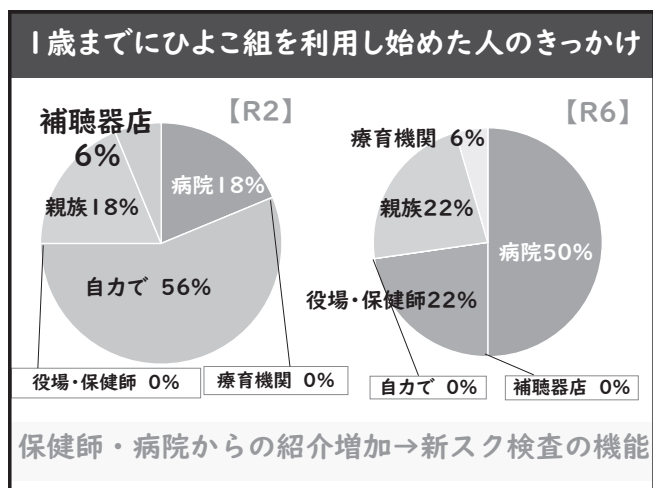
生後半年までに約70%
1歳までに86%

1歳8月 1名
1歳～1歳半 2名
1～3ヶ月 8名
7～9ヶ月 4名
4～6ヶ月 8名

○6か月～1歳の理由
・姉がいて育児方法が分かる
・親がろうで困っていない
・他障がい療育を優先
・母親のメンタルが不安定
○1歳以降の理由
・きょうだい児の療育を優先

R2
1歳までに療育開始 30%

6



7

子に障がいがあると分かった保護者の気持ち

○娘が聞こえないなんてまさか・・・。
正直先生から話されたことは覚えてない。
聞こえない娘をどうやって育てたらいいか？
コミュニケーションはどうしたらいいの？
どこに相談したらいいの？全く見当がつかない。

○私の声も聞こえない。聞こえない子に産んでしまった。
どうやってこの子は生きていくんだろう？

○ただ、ただ泣いた。落ち込んだ。
私が妊娠中になにかしてしまったのだろうか、と
自分を責める気持ちが強かった。

8

ひよこ組での支援・学びたいこと

参照：「たったひとりのクレオール」2014年ポット出版 上農正剛

日常対応

- 声かけの仕方、体験の言語化、ことばの育て方
- 実態に応じた聴覚活用（補聴器・人工内耳）
- 乳幼児としての生活（生活リズム、身体作り、栄養、遊び）
- 聞こえない子どもは聞こえない大人になること
- 分かる環境で育つ大切さ
- ろうコミュニティ・ろう児集団の必要性
- 社会モデルによる障害の捉え方（言語的マイノリティであること）
- 多数派と異なることの価値と意味
- 手話の有効性、成人ろう者を知ること

障害認識という土台

9

乳幼児教育相談（ひよこ組）の支援

①グループ指導・支援

年齢ごとに週1回

- ・親子遊び
- ・設定遊び
- ・保護者同士の懇談
- ・手話の学習

- 親同士が話す時間の確保
- 活動後の懇談会・学習会
- ・今日の活動の振り返り
- ・子供の様子、保護者の反省
- ・体験の言語化のために
- ・テーマに沿った学習会
- ・ロールプレイ
- ・育児の悩みなど

保護者と子ども
保護者同士

10

グループ支援の様子【1歳児・2歳児】

ママ同士
楽しいおしゃべり
情報交換

みんなでお弁当

11

乳幼児教育相談（ひよこ組）の支援

②個別指導

- ・担当者と保護者と子供との遊び（関わり方）
- ・担当者と保護者の懇談
- ・聴覚障がいについての学習
- ・聴力検査、補聴器の調整
- ・教材作りなど

子どもとの関わり方
個別の相談

12

保護者教室

月に2～3回の実施(年間20回程度)

○聴覚障がい教育についての学習

- ・心、ことば、思考を育てる関わり方
- ・コミュニケーション支援

○聴覚障がいに対する正しい知識

- ・聞こえの仕組み、補聴器、人工内耳、聴覚活用
- ・難聴疑似体験、マイノリティー体験

○聴覚障がいに対する正しい認識(障がい認識)

- ・ろう者の話
- ・聴覚障がい児を育てた保護者の話

○聴覚障がい児の心理について

13

言語力・日本語力のために

言語力・障がい認識

全ての基盤となるのが0、1、2歳児代の親子関係



14

早期支援に必要な4つの出会い

専門家
(医師・教師・ST他)

手話
(通じる言語)

ろう学校(乳幼児教育相談)

レイ・エキスパート
素人の専門家
(ろう者)

仲間
(親・先輩ママ)

local knowledge (ローカルな知恵) をもった人たち

東京都立ろう学校早期支援員/木島 照夫 先生

15

今後の課題

- 早期発見を早期療育に
(6か月までに療育に繋がること)
病院・保健師・子育て支援関係部署との連携

- 様々な情報(価値観)がある中、保護者が手話の有効性を実感し、保護者の障害認識を育む支援のあり方



16

課題解決のために 医療機関・市役所等との連携

○大学病院との連携

- ・本校主催の研修会で耳鼻科医の講話
- ・耳鼻科医と教員の懇話会
- ・日常的な情報交換(メール)

○産婦人科病院への理解啓発

- ・産婦人科病院の研修への出席、講話
- ・新スクについてのちらし作成
→県南全ての産科で配布

○市役所、保健所、子育て支援センターへの理解啓発

- ・関係機関訪問
- ・保健師の研修への参加、講話

医療・福祉との
連携

17

理解啓発の冊子(3部作) パンフレット作成

ろう者・保護者の体験談

子育ての方法

医師・教育者等からのメッセージ

ようこそ
聞こえない赤ちゃん



子育てへの
希望・意欲

赤ちゃんとの暮らしで使う
手話を動画で学べる手引き



方法が分かる

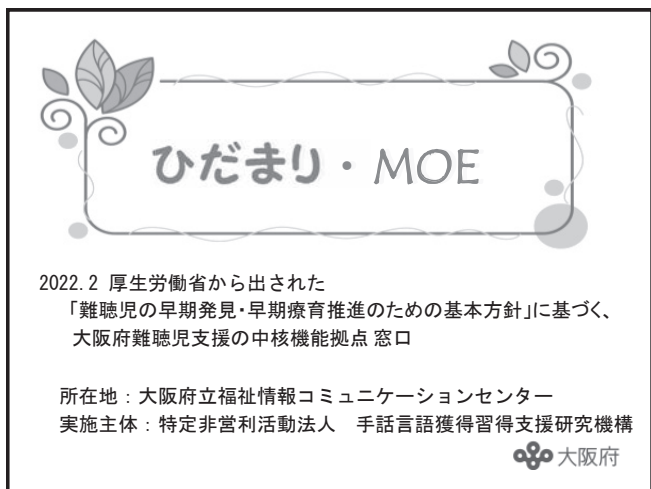


聞こえないことについての
小中学部の作文集

見通しをもつ

18

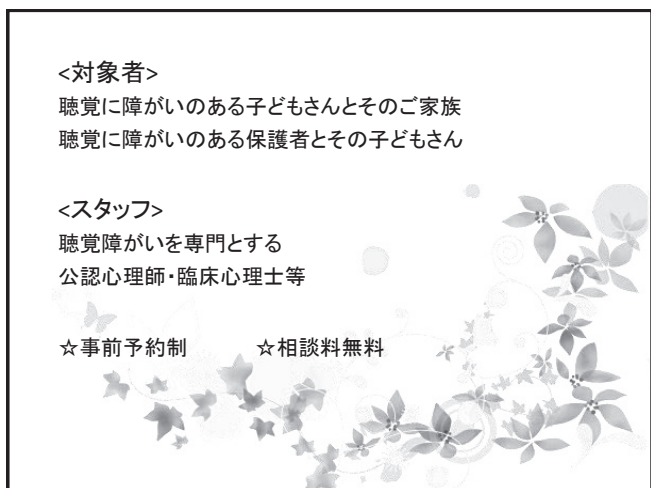
【資料-1 指定討論(中尾)】



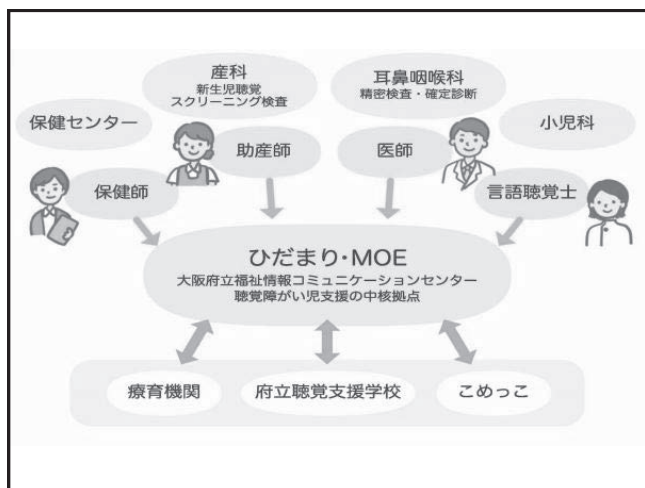
1



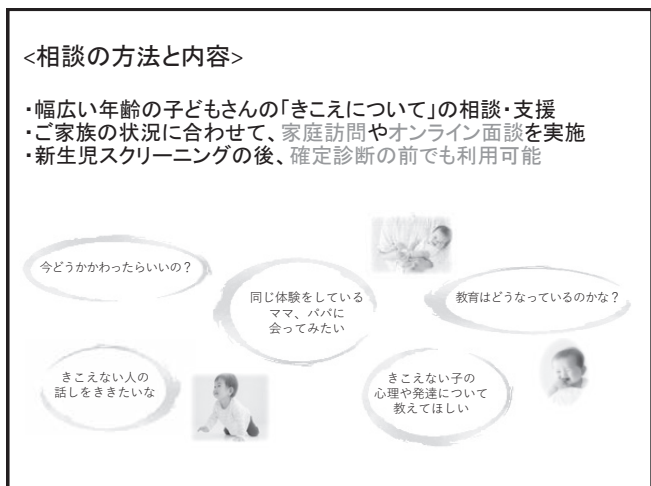
2



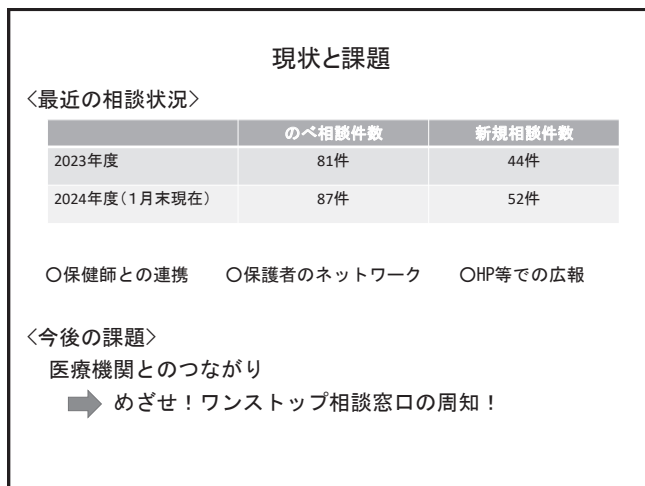
3



4



5



6

大阪府難聴児支援中核機能拠点

ひだまり・MOE

子どもたちの成長に沿った“切れ目のない支援”のはじまり

ひだまり・MOEは「お子さんのきこえ」について、相談・支援しています。
聴覚障がい専門とする心理士がお話をうかがい、幅広いネットワークをもって
支援していますので、どんなことでもご相談ください。

保護者の視点から

小橋史佳・千穂子 こめっこ参加ご家族

1

自己紹介



パパ
聴こえる



ママ
聴こえる



れお
ろう・5歳
(年中)



妹
聴こえる
7か月

2

れおの一日



9:30~

14:00

17:00



聴覚支援学校



児発
放デイ

放課後デイサービス
ぐんぐんPOE

その他

- ・第一・第三土曜日 こめっこに参加
- ・隔週金曜日 放課後こめっこに参加

3

聴こえる親が手話で子育てしてみた気づき

- ・「わかる!」「伝わる!」が大事
- ・すべての子に平等に「わかる」のが手話
- ・「わからない」と伝えられるようになるには「わかる」経験の積み重ね
- ・聴こえる難聴児にも手話は有効



4

パパ参画のススメ

- ・家族で対等に話せる言語を持つ



- ・子どもの情緒の安定、成長の促進
- ・ママが孤独じゃなくなる

ぜひパパもこめっこへ



5

家族が笑顔でいることのススメ

手話 = 赤ちゃんでも 見てわかる・伝わる

→ 聴こえない子が生まれたことの不安が減った

だんだん反応してくれることの喜びが感じられる

まず こめっこへ!

「この子は大丈夫!」って思えることで

笑顔になれる



6

こめっこでの出会い

- ・専門の臨床心理士の先生方

→数多くの難聴児の成長・悩みをみてきたスペシャリスト

- ・先輩パパママ

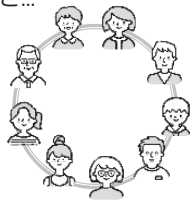
→子育てのこと、療育のこと、進路のこと...

なんでも相談できる心強い存在

- ・聴こえないお友達

- ・ろうスタッフ

かっこいい✧



【資料-2 参加状況】

大阪府手話言語条例シンポジウム 参加者

参加申込者数	621人（他関係者・スタッフ83人）
第Ⅱ部 参加数	389人（途中入退出者含む）

■参加者所属内訳

行政機関（福祉部局）	64人	手話通訳関連団体 （全通研・手話サークルなど）	95人
行政機関（教育部局）	3人	大学や研究所	30人
行政機関（その他）	8人	当事者（保護者含む）	58人
学校関係	170人	マスコミ機関	3人
医療関係	45人	一般企業	5人
福祉関係	23人	その他	12人
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	62人	特になし	16人
当事者団体 （ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	27人		

【資料-3 アンケート報告】

○回答状況

申込者数	621 人
回答数	248 人

(回収率 約40%)

○アンケート結果

1. お住まいの都道府県					
北海道	13	石川県	0	岡山県	1
青森県	3	福井県	2	広島県	15
岩手県	4	山梨県	2	山口県	8
宮城県	2	長野県	2	徳島県	0
秋田県	2	岐阜県	1	香川県	4
山形県	0	静岡県	4	愛媛県	1
福島県	2	愛知県	3	高知県	0
茨城県	3	三重県	3	福岡県	10
栃木県	1	滋賀県	1	佐賀県	4
群馬県	2	京都府	7	長崎県	3
埼玉県	6	大阪府	65	熊本県	7
千葉県	4	兵庫県	9	大分県	1
東京都	12	奈良県	8	宮崎県	3
神奈川県	6	和歌山県	6	鹿児島県	5
新潟県	2	鳥取県	4	沖縄県	2
富山県	3	島根県	1	海外	1

2. 【事前配信】こめっこ活動の様子を視聴できてよかった	
非常にそう思う	177
そう思う	61
あまりそう思わない	1
みていない	9

3. 【事前配信】こめっこ参加ご家族の声 Part3 を視聴できてよかった	
非常にそう思う	190
そう思う	47
あまりそう思わない	0
みていない	11

4. 基調報告について	
よくわかった	184
ある程度わかった	61
あまりわからなかった	3

5. 第二部全体について	
大変有意義であった	197
ある程度有意義であった	50
普通だった	1
あまり有意義ではなかった	0

6. ご所属、職種等について、教えてください（複数回答可）	
行政関係	21
教育関係（聴覚支援学校、難聴学級）	88
教育関係（上記以外）	10
医療関係	28
児童福祉関係（デイサービス・療育教育等）	23
福祉関係（上記以外）	35
当事者団体（ろうあ連盟・聴覚障害者協会等）	6
手話通訳関連団体（全通研・手話サークル等）	60
大学や研究所	12
保護者やご家族	24
その他	18

7. 年齢を教えてください	
20 代	8
30 代	39
40 代	58
50 代	75
60 代	56
70 代	11
80 代以上	1

8. シンポジウム開催をどこでお知りになりましたか（複数回答可）	
チラシ	85
メール（NPO こめっこから）	103
メール（NPO こめっこ以外）	5
ホームページ（NPO こめっこ）	15
ホームページ（NPO こめっこ以外）	2
新聞・広報など	4
SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど)	4
その他	31

9. 8の質問に、「メール（NPO こめっこ以外）」「ホームページ（NPO こめっこ以外）」「新聞・広報など」「SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど）」「その他」と回答された方は、よろしければ具体的に教えてください（他の回答をされた方は次にお進みください）	
【メール（NPO こめっこ以外）】 主な回答：ろう教育を考える会、大阪府耳鼻咽喉科医会、職場関係のメールなど 【ホームページ（NPO こめっこ以外）】 主な回答：聴覚障害者情報センター 【新聞・広報など】 主な回答：職場内の回覧 【SNS(フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなど）】 主な回答：フェイスブック、X（旧ツイッター）、イベントコミュニティサービス	

[その他]

主な回答：知人からの紹介、医師からの紹介、職場での情報共有など

10. 大阪府手話言語条例シンポジウムに参加されるのは何回目ですか
(2018 年から継続して行っています)

初めて	102
2 回目	37
3 回目	49
4 回目	22
5 回目	15
6 回目	5
7 回目	18

11. 今回のシンポジウムをご視聴くださった感想など、自由にお書きください。

自由記述部分については、今回もたくさんのご意見・ご感想をお寄せいただきました。紙面の都合上、遠隔実施に関する感想、企画運営や情報保障に関するご意見、開催に対する感謝のお言葉等については割愛させていただいております。貴重なご意見やアドバイスを、今後の開催に反映してまいります。心強い励ましをいただき、誠にありがとうございました。

○関係機関、当事者保護者などが集まり、それぞれの立場で聴覚障害支援について語られることは大変有意義で勉強になりました。

○専門家からの知見や、家族の意見があっても貴重な経験であった。当事者の意見もあるとさらに有意義なものになると思う。また参加したい。

○様々な分野が手を取り合い、子どもたちの成長を見守れる体制づくりができればと思います。

○大阪府のシステムは、先駆的で素晴らしいと感じました。

○難聴児にとって、聴覚障害者にとっての手話の重要性が多角的な視点で語られた、大変勉強になったイベントでした

○こめっこメソッド、ろう学校の現場で検討したいです。

○医療、療育、教育の連携も手話でのコミュニケーションも本当に私たちの手と声で保護者にも行政にも訴えなければと改めて実感が湧きました。

○都道府県によって体制はちがいますが、聴覚障害の子どもたちにとって、幸せだと感じられるように、これからも関わっていきたいと感じました。なかなか、連携が思うようにいかない日々ですが、少しずつ繋がりを作っていきたいです。

○とても学びの多い機会となりました。多様性に加え寛容性をさらに磨いていきたいと思います。

○医療側の話や保護者の声を聞くことができ、有意義だった。私がかかわっている保護者にも聞かせたいと思った。ぜひまた開催してほしい。

○多様性だけではなく、寛容性も加えて大切だと感じました。

○こめっこの活動について聞く機会がこれで2回目なのだが、山口県にもあったらいいなと思います。手話『も』選択できる環境をすべての難聴児に用意できればいいのに、と常々思っているのです、大変参考になりました。

○自己肯定感を高めるのには、やはり手話が関係あるように感じています。家族も手話ができる環境って素晴らしいと思いました。

○人工内耳装着率がほぼ40%という中でも、乳幼児支援として手話も欠かせないものだと、よく分かりました。

○専門性の高過ぎる講演ではなく、理解がしやすかった。保護者の思いなども知ることができ、大変よかった。

○訪問看護ステーションの看護師です。難聴のお子さんに対して、もっと早くこめっこを知っていたら紹介できたのに、と悔やまれます。制度などもよくわかっていなかったのも勉強になりました。

○自尊心を育てる環境の大切さ。保護者にとって成人のろう者との出会いが大切なこと実感しています。

○他県の取り組み、またこめっこさんの考え方、保護者さんの思い、研究の内容など知る機会をいただき、学ぶことが多くありました。様々な立場からのご意見も考えを聞けたことや、みなさんがきこえない・きこえにくいお子さん、またその保護者さんを支えるために一緒に考えていくことの大切さを感じました。今後の自分の取り組みにも活かして行きたいと思います。

○手話を獲得することの大切さ、自尊心を育てることの大切さがわかりました

○今回は医療と療育など関係者の連携についての話しもお聞きすることができました。更にこめっこの活動の拡がりを実感することができて、良かったです。

○以前、中川先生の講演を聞かせていただいたのですが、改めて聞け、またたくさんの方に聞いていただけて良かった。本県は、人工内耳＝音声の県だが、少しずつ小さい子たちは手話も大事にしている学校外で遊んだりしている 子供た

ちが幸せに育つよう、自分の子どもや周りの子どもたちと関わって行きたいと思いました。

○医療関係の方とつながるのが、とても難しいと日々感じています。手話か口話かという問題。他県でも同じような課題があり、そして関係機関と連携する方法を色々と模索されているんですね。とても参考になりました。

○耳鼻科医の先生方の中にも、こめっこと同じ方向を見て進んで下さっている先生方がいらっしゃる事を嬉しく思っています。私も、子どもの自尊心、自己肯定感、自信を持って生きれる力を支えていける人になりたいと改めて感じました。今後、もし機会があれば、デフファミリーに関わって行く支援者に、どんな支援を求めるのかについてなども取り上げて頂けたら嬉しいです。

○大阪にいて活動は知ってましたが、ますますその働きが充実してきているのを感じ、今回のシンポジウムでより実感できました。手話が言語として果たす大切さは教育だけでなく、社会の変容にも関与していく様になって欲しいと思いました。どの方の発言もとても勉強になりました。

○こめっこの活動、いつも応援しています。医療とのつながりの部分、とても大事ななと思いました。河崎先生、物井さん、久保沢さんをはじめ、スタッフの皆さまのお力ありきなんだなと強く感じています。スタッフの連携の取り方などについても改めてお話聞きたいです。

あと数年したら、もあこめに通っているお子さんのお話もシンポジウムで聴けるようになるのかな…とちょっと期待しています。

○姪がデフファミリーの為、コミュニケーションをとるために、叔母の私も手話を学んでいます。コメッコには随分お世話になっています。

○どの子もそれぞれ自分に合った方法、言語を使って自信を持って生きて欲しい。こめっこには、生き生きとした素敵なロールモデルがいるので、その方たちに出会える場所として本当に素晴らしい活動だと思う。

○医療、療育、教育、当事者がそれぞれの立場で話ができる場は非常に貴重でした。みなさんのお話を聞いて、さらに、ろう難聴者の成年期の悩みを当事者からも聞いてみたいと思いました。特に、インテグレーションして、手話を学生時代に選ばなかった方の。

○聞こえにくいこどもと、どうやってコミュニケーションをとっていくのか、保護者とともに考えることが大切なんだと、改めて感じました。そこで、音声も大事だけど、やはり手話をつけることの重要性は、もっと保護者と共有していきたいと思いました。

○涙なしには見られない、本当に愛あるシンポジウムで、このような皆様に支えられながら子どもが成長できていることを誇りに思います。また自分なりに区役所をお願いするなどして、未来の希望溢れる聾家族にひだまり MOE を紹介してくださいと、今から電話しようと思います。

○補聴器や人工内耳を装着しても聞こえる子供にはならない。聞こえる子供を目指すとしても追いつけないので自己肯定感が下がる。手話言語を獲得することで問題なく意思疎通が出来るようになる。

周りの大人が子供に合った環境を提供することで子供の自己肯定感を育める。手話を学ぶなら音声言語は排除する、音声言語を身につけるなら手話を使ったら駄目と言うように極端な考えを持たず、手話も音声言語もどちらも否定しない。寛容に受け止める事が大切。など本日は様々な事を学ばせて頂きました。

○子育ては、社会全体でできれば、聞こえる聞こえない、障害がある、ないに関わらず、安心してできる社会が理想だと感じた。こめっこのような活動、北海道にも広がると良いなあ。分かり合える人間関係が、気薄になってきている世の中に危機感を感じています。

○今回、私の職場でこれから児童発達支援事業が始まることで事前学習としてこちらのシンポジウム講演に初めて参加させていただきました。事前配信を含めてこめっこの活動内容を知ることができ、とても参考になることがたくさんありました。

小橋夫婦からのご家族の話がすごく素敵ですよかったです。ご家族の声でこめっこの早期支援や様々の活動の厚さがすごく伝わってきました。こめっこの活動ももちろん参考になることがたくさんあったし、他の話も聞いて医療も学校での連携もすごく重要だと改めて感じました。

きこえない、きこえづらい子供たちにとって自尊心を育てるようまた、保護者の支援も必要性を知ったので私たちも支援を頑張っていきたいと強く思いました。

○難聴児がどこで生まれても、幸せに生きていけるように、同じように支援が受

けられることを切に願います。医療、教育、福祉、行政が連携していけるシステムづくりができるといいなと思います。行政の方との連携が1番難しいと現在実感しています。

聾学校の児童生徒数が少なくなっているため、乳幼児教育相談や地域支援に関わる職員の人員が割けられないという厳しい現状もありますが、教育の立場としてできることを精一杯やっていきたいと感じた時間になりました。

○乳児期から伝わるのがわかるのがいいです 小学生の保護者で人工内耳をすればきこえると思っている方もいます 乳幼児期にしっかりと伝わる関係作りの大切さを改めて感じ、今担当している小学生とその保護者への支援の難しさも同時に感じました

○手話の大切さ、成人ろう者との関わりが、心理的安定につながっていること、SAには自尊心と自己理解が必要と分かりました。聞こえないではなく、こうすればわかる実感をもたせたいです。

○聴覚活用と手話言語は車の両輪として支援の柱にしているとのこと。音声言語（聴覚）大多数、圧倒的メジャーな社会の中で、やむを得ず保護者そして最後には当人の選択による。本当にそれで良いのかと言う問題意識への回答にはまだまだほど遠い内容。取り組み自体も足かけ6年、まだ6年。今後この事業を通して成長して成人となった難聴者を追跡して、選択肢を増やす等との逃げではなく、自身を持って方向を示すことができるようになってほしいと今回も痛感した。

○母子医療センターでいつもお世話になっている先生の話でしたので、先生の考えている事や病院と地域の連携等がわかって良かったです。

個人的には保護者方からの話が1番印象に残っています。自分の子供の事と重なる事や今後の成長を想像することができて良かったです。話を聞きながら涙が流れてきた時に、子供を産んで聞こえないとわかった後自分ではすぐに障害を受け入れ前に進んできていたと思っていましたが、私も不安だったんだな。こめっこに出会えて本当に良かったなと感じることが出来ました。

手話が子供にとって言語となるように親として関わっていけたらと思いました。

○関わってきたろう者を見ていて、彼らが自分の人生は幸せだったと言えるような社会について考えてきました。その中の一つに自尊心や自己肯定感があります。そのために何か必要なのかを忘れずにいきたいと思います。「わかる」、「伝

えられる」大切さを改めて確認できました。成功の尺度は一つではない、心に響きました。

○今までで一番中身が濃いシンポジウムだったように思います。小橋さんご夫妻、中川先生の言葉が特に響きました。「わかる」「つたわる」が担保されれば、それが手話でも音声でも構わないというご発言、そしてそう思えるようになるまでの「暗黒の3カ月」という表現もありました。中川先生の「自尊心」「多様性と寛容性」がキーワードかと思います。中川先生のこの20年超のお取り組みは、NHKの「プロジェクトX」の題材になってしかるべきかと思います（あるいは私が知らないだけで、すでに題材になったのでしょうか？）。日本財団の助成による研究事業が2025年度で最終年度とのこと。来年のこの時期のこのシンポジウムで、こめっこから研究成果のご報告とご提言があるとのこと、わたしは今から楽しみにしております。

○基礎的な知識から現時点での課題についても詳細に学ぶことができたので非常に有意義でした！

○難聴児を育てる家族としてこめっこに参加していますが、様々な機関と連携し体制を整えて下さっていることがよくわかりました。居住地域では、手話の考え方や地域の学校園とのつながりが、大阪や福岡と異なります。多様性は認めても、寛容ではないという言葉が強く響きました。

我が家の子供たちと、これからも皆さんから学び、よい社会になることを目指して行きたいと思いました。いつも支えていただきありがとうございます。

○医療機関の手話への理解が進んできたことに感動しました。

○難聴児支援の中核的機能のあり方が講話の中にもありましたが、北海道は地域格差が大きく、遠方で連携も困難な地域もありますが、大阪、福岡のように様々な機関とさまざまな形で連携をはかりながら取り組んでいけたらいいなと思いました。

○今回は早川先生が出演されるという事で参加させていただきました。

こめっこは日本手話というちゃんとした言語があるから良いと思います。

こめっこでも早川先生の乳幼児相談でも、ろう者に早くから出会い、保護者学習会にも参加して、たくさん勉強させていただき、今に至るので感謝しかありません。

娘も日本手話の環境のおかげで言語が入り、補聴器も年長の夏休みからほぼ一日中着けるように心がけました。娘は日本手話やCLで表現できるようになったあとにその日本語を話すようになっていっていると感じています。どちらも大切だと思います。子どもが日本手話で過ごせる場は本当に重要だと実感しています。これからも子どもが自分の言語で安心して話せる場を作っていってほしいと思いました。熊本にも欲しい…

○コミュニケーションがとれること、相手がわかっている／わかっていることがわかることが重要であり、そのためのツールは本人が決めればよい、というのが、本当にその通りだと思いました。

○端的で非常に説得力のあるお話ばかりでした。自分なりの答えが見つかった方が多数いるのではないかと感じました。

○自組織でも「子ども支援は親支援」、「わかる がこどもの心を育てる」という方針で事業をしてきました。方向性が間違っていなかったと確認できて良かったです。それぞれの取り組みがつながって大きなうねりになることと、次世代育成が今後の課題と感じました。

○病院勤務の言語聴覚士です。普段は言語発達に遅れや偏りのあるお子さんと関わるのですが、過去に数名の聴覚障害児へ介入したことがあり、当時もご両親と支援方法に悩んだことを思い出しました。言語聴覚士の中でも手話言語での支援について知識のある方は多くないため、今回知ったこめっこをはじめとした様々な聴覚支援活動はとても新鮮で学びの多いものでした。早期からの手話言語獲得を目指せる場が今後身近に増えていって欲しいと改めて感じました。

○様々な立場の方のお話を一度に聞くことができ、とても良かったです。こめっこの名前は知っていましたが、今回の動画で詳しく知ることができ、参考になりました。また、子どもがいるためなかなか研修会への参加が難しいのですが、オンラインという形があり、ありがたかったです。

○これまで全て参加しておりますが、最も充実したディスカッションが行われたと思います。小児難聴をご専門とされる耳鼻咽喉科医が3名も参加されていたこと、中核機能事業の担当者が参加されていたこと、早川先生が参加されていたこと、どれもそれぞれの立場を尊重されながら、それこそ「寛容性」が実現さ

れた議論で、今後につながる実りのある議論がされたと思います。また、武居先生のコメントが秀逸で、とてもいいまとめになっていて、勉強になりました。

○難聴児に関わることがあるので、参加させてもらった。自分自身まだまだ知らないことがたくさんあると感じた。

○乳幼児教育相談がもっと周知されるため、保健師さんとの連携が大切だと改めて思いました。

○事前配信でのこめっこの活動を拝見し、何度見ても、スタッフの方の細やかな事前準備、当日のスタッフの充実、ろうスタッフのサポートの手厚さに刺激を受けます。そのような環境に出会うことができた、ろう・難聴児とその保護者は本当に幸せだと感じました。他県の乳幼児教育相談・ろう難聴児の幼児教育に関わる者として、こめっこの取り組みや大阪府の研究プロジェクト、理念が、武居先生がおっしゃった「方法論」に終始せず、広く地域に浸透できるよう、私たちの側からも積極的に情報を得ていき、できるところから地道に取り組んでいきたいと感じました。

早川先生がお話された、障害認識という土台と日常的な対応という内容についても、まずは保護者の気持ちに寄り添い、一緒に進むというスタンスを大切に、保健師さん始め行政や療育、医療との連携のために努力していきたいです。保護者のお話にも感銘を受けました。たくさんの悩める保護者の元にこの言葉が届けばいいな、と思いました。この学びが明日からの支援に繋がるよう、頑張ります。

○どのようなコミュニケーションの方法であっても、伝わる、分かり合える事が大切。聴力が上がれば、手話が出来るようになれば、それだけではなく、産まれた時からの愛着行動、そして自尊心を育むように愛情を注ぐ、という事の大切さ。どの講座も勉強になりましたが、特にこの2点、印象に残りました。

○新生児スクリーニング検査で早期発見したときに、後々難聴だと分かったとき、保護者、子どもの支援の必要性がよく分かりました。特に保護者が聴者のときは戸惑うと思います。子どもの将来を考えたときに選択肢が多い方が良いです。特に思春期になったとき親以外に友だち先輩など相談できるひとが身近にいてると心強いです。

子どもの聞こえを良くしたいと補聴器、人工内耳と思う一方で手話言語も学びろう者手話関係者との繋がりも大切だと思いました。途切れることのない支援

を！

べじこめ、こめっこ、もあこめは必要不可欠な場所だと思いました。

○素晴らしい取り組みに驚きました。このような取り組みができればどれだけの難聴児と保護者の助けになるだろうと思いました。また、医療、教育、福祉等の連携ができていることに感動しました。

○様々な立場におられる先生方のお話をきくことができ、参加して良かったと感じています。普段は療育現場で働いており、手話を使うことは多くはないですが、「伝えたい」「伝えられた」「わかった」「できた」という気持ちになれるツールを見つけていくことがその子の心を育てるために大事だと改めて感じました。また、保護者の方が感じておられた気持ちを知り、こめっこさんのように相談できる場、情報提供共有の場、将来へ見通しが持てる場を作っていくことが大切だと思いました。

○医療と行政と教育、療育関係、保健師など厚労省の切れ目ない支援中核のシステムは、なかなか長崎県は機能していません。しかも、トラッキングシステムもなく、個人病院が主となり県もほとんど委託？？コミュニケーション手段も絶対的な聴覚。視覚手段としての手話を使うと紹介すらないという体制のなかで、一部の親の会、つまり価値観が大学、一流企業勤務などの動きの中で個人病院がつながり。本当に難聴の子どもさんが全て、ろう学校に紹介されないままの乳幼児さんもいます。本当に難しい県です。

○どういう活動をされているのか、動画を見て知る事が出来るのは大変興味深く学びになりました。近い将来、自分に何かお手伝いが出来るのかどうか…先ず手話のスキルアップをする事が必須だと考えています。

○親子間の「わかった」「伝わった」の基盤を支えるために、こめっこの様々な活動や支援を通して、共通言語としての手話を早期から導入していくことの大切さを再認識しました。

○毎年、年に1回のこのシンポジウムを楽しみにしています。耳鼻科の先生や保護者の方のお話などは、普段なかなか伺う機会がないので、貴重な機会となりました。人工内耳、音声言語、手話言語、医療関係者、ろう者など、ときには対立的な項目として挙げられることもあるものも、うまくつながれば相互作用でいい方向に行くということを改めて感じました。どの立場の人も、目の前の子ども

に幸せになってほしいという気持ちは皆同じなのだと思います。教育関係者として、もっと視野を広げ、さまざまな立場の方々とどんどん関わっていきたいと思いました。

○希望が燃える素晴らしい話を見ることができてますます使命感感じた。もっと全国にアピールし、広げたい、地域差を1日も早く無くし、れおくんのような子どもたちを増やしたいと思った。早川先生のような方がいてろう学校、早期におられてうれしいと思った。早川先生の実績、小橋夫婦の存在がとても大きく、もしかするとろう学校教育革命の星になるのでは？とすごく期待してるし協力したいと思う。

○助産師としてクリニック勤務しています。新スク検査でリファアが出た時に、よくあることだからと保護者の方に、実際によく声掛けているなと感じました。その先にある、保護者の不安を考えていない言葉掛けだなと客観的に聞いて、反省しました。

ひだまり MOE さんやこめっこさんがあることを今回、初めて知りました。聞こえない赤ちゃんと診断された時、される前までに今後は情報提供していきたいと思います。

人工内耳や補聴器、手話など、様々な方法での言語獲得があり、出生時から保護者とお子さんのご家族が全ての情報を知った上で、最終的にはお子さん自身がその時に応じて選択していけるように、社会全体で見守っていくことの大切さを今日は知ることが出来ました。

また、手話を学んで約2年経ちましたが、まだまだ、つたない手話です。ろうの方と、スムーズに会話は出来ませんが、手話言語の奥深さを毎回、強く感じていて、楽しく学ばせてもらっています。今回、サークルでこのチラシを頂き、シンポジウムを知り、初めて参加させてもらえたこともご縁を感じています。

○様々な立場の方々が連携し、互いに学びを得る姿に感銘を受けました。

○こめっこ開設直後あたりから比べ、ずいぶん組織として活動として広がりや発展を遂げてこられたと感じています。

学生時代を経て社会人として生きていくとき（親が何とかする年齢が過ぎたあと）何とか自分を守り生きていける力（自己肯定感）は本当に大切です。大人になっていくこめっこ達を引き続きレポートしていただきたいです。

また、社会のろう者や手話についての認識や理解は非常に低いです。テレビでも手話通訳が画面から切られることがまだ平然と行われています。こめっこのよ

うな動きを元に、理解する人を増やして変えていきたいです。

○いろいろな関係者の方からお話が聞けて、大変勉強になりました。データで情報を教えてくださって、イメージしやすかったです。特に、新スクでパスなっている、3割の子が聞こえが難しいことが後々分かったり、聴覚支援学校に人工内耳を装用している子が4割在籍しているなど、進路を考える上でもとても学びになりました。

障害認知をして、セルフアドボカシーできる力を育む事、そして何より自己価値観 肯定感をいかに高い子に育てられるか。そのために、わかるできる、難しい事もこうするとできるという経験をたくさん積む事、たくさんのモデルになる方や仲間と出会う事。そんな体験や力がつくよう、これからこめっこさんに親子一緒に通って、一緒に成長できたらと思います。

○事前配信と当日の親御さんのお話は自分も当時を思い出し、グッとくるものがありました。これからの不安はその都度あると思いますが、今前を向けているのもこめっこを早くに知れて、皆さんの優しさと手話を知れたからだと思っています。お話でもあったように今の問題でもある新スクリファの両親へのフォローについて病院からすぐこめっこを紹介してもらえたら、両親へのより早い精神的な救いになるかもなと母親目線で感じました。福岡の中川先生のような熱心な先生が大阪にももっともっと増えてほしいなと感じました。こめっこのこれからのよりよい発展を願っています。娘がこめっこのスタッフさんが画面に映るたびにニコニコしていて分かっているんだなと思いました。

○学校行事と重なっておりあまり視聴できませんでしたが、保護者の方の意見や久留米聾の先生の実践にもとづくお考えには共感できることがありました。武居先生の「何をもってろう教育の成功とするか」については、学校教育で今やっていることが間違っていないと自信を持てるようなご助言をいただいた気持ちになりました。「手話も、聴覚活用…も両輪で」という視点をどこまでも誤解のないように、関係者の皆さんと共有していきたいと思いました。

○事前配信、当日も含め、保護者の方がみなさん「子どもが家庭で安心できるように」「孤独を感じないように」ということを大事にされていて、そして「聞こえなくても大丈夫」と前向きに子どもと向き合っていらっしゃったことが心に残りました。こめっこのこれまでの活動と河崎先生の思いが報われたような気がして胸が熱くなりました。河崎先生、こめっこ関係者のみなさま、これからもお身体に気をつけて、こめっこをずっと続けてください。

○手話を勉強中の生徒さんにも、実際に参加させてあげたいなあと、思いました。

○図書館員として、絵本の読み聞かせに、聴覚支援学校へ行く立場で、参加させていただいていますネイティブやバイリンガルを大切にされている、こめっこの活動を尊敬しているので、聞こえる私達の拙い手話で良いのか迷いが消えることはないですが、ろう・難聴児の背景を知ること、手話を言語として尊重することを忘れることなく活動したいです

○事前配信によって、動画でこめっこの活動の様子を知ることができていたことで、シンポジウムの内容や意図が非常にわかりやすかったです。今後とも、こめっこさんの活動・発展から目を離せません。こめっこのチームワークの素晴らしさ、スタッフさんそれぞれの個性に感動しています。スタッフさん方が、こめっこに参加された経緯や思いなどを伺える機会がいただけるとうれしいです。

○医療、教育、療育、保護者、いろんな立場の方々のお話を一度に聞いたことで、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。聴覚障害のお子さんとそのご家族にとって、早期に手話に出会うことの大切さや良い親子関係を築くことの大切さを改めて感じました。またこのような機会があればぜひ参加させていただきたいなと思いました。

○長崎県諫早市の手話言語条例推進方針の中の「聞こえない聞こえにくい子ども、保護者、支援に携わる者に対して、手話理解を深めるための情報提供を行い、手話習得に関して必要な支援に努める」という柱に合わせた具体的な施策を始めていきたい、と、現在、推進メンバー（ろう協、手話サークル、行政）で準備中です。つい先日は言葉の森くるめの坂口和俊氏ともりやままなみさんを招いてイベントを開催。反響が大きかったこともあり、声をあげてくれているろう重複児童の保護者さんたちも一緒に、できることから動いていきたいと思っています。

本日のシンポ、大変参考になりました。地域でつながるイメージや医療関係者への働きかけ、モデルとなる成人ろう者の協力等、いろいろな立場の方を巻き込んでいけたらと思いました。

○手話が言語としてだけでなく、発達にも影響していることが分かった。日本でも当たり前の手話がある社会になるといい。もしかしたら知らないだけで身近にも聴こえない人、聴き取りづらい人がいるかも知れない。もっと手話ができるようになりたいと思った。

○聞こえない子を育てる親として、こめっこメソッドをぜひ大阪府の各市にも広めていただきたいです。北河内、北摂など大きい範囲でも構いません。聴覚支援の教室の数と同じだけ乳幼児への手話の支援の場も必要だと感じました。

○毎年貴重な保護者の声を聞くことができて良かったです。こめっこでの手話教室の教材やこめっこぱんぱんなどを共有できれば、聾学校乳幼児相談のグループ活動や保護者手話教室に活かせるなと思いました。聾学校では乳幼の先生は異動で変わりやすいので、こめっこの教材があれば先生が変わっても継続して使えるなと感じました。

○手話を獲得し、伝えたいという思いをもつことによって、全体的な発達にもつながっているということを知り、子どもの成長について改めて考えさせられました。

○初めて参加させていただきましたが、本当に充実した内容でとても勉強になりました。聴覚支援学校での勤務経験が2年未満でまだまだ分からない事だらけの毎日で、これでいいのか？という疑問がたくさんある中で医療関係者の方、聴覚支援学校の先生、保護者と色々な角度から話を聞かせていただけてありがたかったです。

本日の話の中心であった中核施設の話はとても魅力的で兵庫県でも早く機能して欲しいと思いました。実際職場に相談に来るお子さんの中でもどうして今まで学校を始め、いろいろな施設との繋がりをもてなかったのだろうと不思議に思うような事例があります。本当に産まれてすぐから、こめっこのような所に出会えていれば、、、、とってしまいます。そのようなお子さんが少しでも減るように、微力ながらも力になりたいと思います。

○年々充実している活動に圧倒されました。中川先生のお話からも力をいただきました。これからも素晴らしい活動の発信をよろしくお願いします。

○ろう学校で教えてもらい初めて参加させてもらいました。
中等度の難聴児の親としてどうやって関わっていったらいいのか、各学校での取り組み等をもう少し知れたらいいのかなと思いました。
また、重複児の場合の取り組みも知りたかったです。

○やはり難聴児には手話も必要なんだと再確認しました。でも、現実にはそれを受け入れられない保護者が多く、なかなか踏み込めない状況です。

○医療と教育と療育の連携が出来ている。手話は福祉という考えが強く、医療や教育とつながらない。やはり顔を合わせて関係を作るしかないのだろうと感じました。

○こめっこが順調に成長されてとても嬉しく思います。今回も素晴らしい企画をいただきありがとうございました。当初のコンセプトが広く当事者に受け継がれていることが成果そのものだと思います。

ふたつお伝えさせていただきます。

1) 人工内耳を入れたら手話は使わない方がいいという考えは誤りです。証拠になる文献も多々あります。

2) 大阪のように大都会は人材も豊富です。しかし地方はどんどん少子高齢化が進み人がおりません。こめっこによる支援が地方に住む保護者にも行き渡るような、地方の拠点との連携を是非視野に入れていただきたいと思います。

○今までお聞きしたことのない医療分野の方々からの講演が多くあり現状を知ることができました。うまく言葉に表せませんが、こめっこのアウトラインが自分の中で少し鮮明になってきたように思います。

○他県での先進的な取組や先進的な研究をされている専門家の先生の話聞くことで、自分自身の難聴児支援を再確認する機会になりました。

○専門家の皆さんや子どもたちに直接接しているかたのお話は大変有意義だったのですが、やはり何よりも小橋さんご夫婦のお話はれおくんに対する様々な思いや感情が伝わってきて、この事業の素晴らしさに大きな説得力を与えていたと思います。参加して良かったと心から思いました。

○乳幼児期からの保護者と子ども達への支援の必要性を再認識しました。乳幼児期からわかる、通じ合える環境を整えること、手話も聴覚も大切に、というこめっこの実践、すばらしいです。

○関係機関がお互い理解し合うためには、それぞれ現場に出向くことが必要だと思いました。若い耳鼻科のドクターに、ぜひ聾学校の授業を見ていただきたいと思いました。

○手話、音声言語との関わり方や、手話のある環境での子どもの発達について、分かりやすい言葉で話をしてもらったので、理解が深まった。医療と福祉の連

携がもっと深まると良い。家族の中でのコミュニケーションの大切さ。わかる事の大切さ。情報がある事の大切さがよく分かった。

○わかる（わからない）ことの大切さなど、学べるが多かった

○支援の関係者、保護者、当事者それぞれに見えている風景がかなり違うことを認識することがまず第一歩と思いました。医療、療育、教育それぞれの支援現場の考え方の違いを相互に理解して、多様性と寛容性をもって切れ目のない支援体制を作っていくことが大切なのでしょう。一方で現状では漏れている軽度難聴や一側難聴の多くのお子さんへの支援への対策も喫緊の課題でしょう。

○「出張こめっこ」と、「ろう重複児への支援を教えてほしい」と希望します。長崎では手話の環境が整っていないと感じます。私は、ろうとダウン症をあわせもつ5歳児の保護者です。私自身は看護師と保健師ですが、付き添いのため休職中です。

○保護者の声良かった。戸惑い、こめっこに関わってからの変化、ロールモデルになるろうスタッフに出会う事で自分の子供の未来への不安が少なくなる、本当に貴重な場だと改めて感じた。こめっこメソッドを是非、全国へ広げてほしい。相談機関と保健師をつなぐ、医療をつなぐ、そのノウハウも是非、全国に共有してほしい。聞こえない子供が生まれた聴親が安心して子供と向き合える、そんな日が日本のどこにいてもくると最高に嬉しい。

○聞こえない乳幼児が手話言語を習得するために、子供の力をどう引き出していくのか興味がありました。初めての参加で分からないことも多々ありますが、こめっこの活動の様子を知り素晴らしいと思いました。こめっこに参加している家族の声を聞いて感激しました。こんな活動が全国に広がっていけば、聞こえなくても自信をもって生きていける方が増えていくであろうと思いました。

○医療、療育、教育、保護者など、様々な分野の方のお話がきけてとても勉強になった。こめっこの今後の研究の経過が楽しみである。きこえないきこえにくい子ども本人が分かるコミュニケーション手段があることが大切だと思った。音声と手話、どちらかではなく、どちらも使っていくという考え方でよいと思った。社会もきこえないなら手話、と自然に考えられるように、手話がもっと社会に浸透していくとよいと思った。

○自分の取り組みについて振り返ることができました。子どもたちが通じ合う
わかり合う経験ができるように努力します

○難聴児の支援は決して簡単ではないですね。補聴機器で会話ができるから大
丈夫。ではないですよ。私の地域でもこめっこと同じような活動をしたいと思
っています。

○こめっこの取り組みを見せていただき、こんな風に保護者さんや子どもさんた
ちとの時間が過ごせるといいなと改めて思いました。ろうスタッフの方の存在
の大きさ、私たちも常に感じています。このように、常にろうの方と保護者さん
子供さんたちが触れ合う機会がたくさんあること、そのような機会をもっと意
識して設定すること、私たちの地域でできる方法を模索したいと思いました。
中核機能の動きについては、先日、本県でも会議がありました。中核機能に何を
求めるか、という宿題をいただいております、今回のシンポジウムに参加させてい
ただき、頭の中が少し整理できました。

中川先生のお話をうかがい、医療の立場の方がこんなにも積極的に子ども、保護
者を中心において取組みをされているお姿に感動しました。中川先生のような
方が本県にもいらっしゃると、私たちも心強いなと思います。中核機能に期待し
ているものの一つとして、医療の方との連携強化です。ケースをつなぐだけでな
く、その子どもさんについてしっかり話ができる機会が増えれば、もっとつな
がれるのではと思いますが、そのために誰がそこを中心となって担っていくのか、
ということがこれからの体制整備にとっても大切だと思いました。

パネルディスカッション、どの方のお話も興味深いお話でした。地方の体制作り
の難しさを感じていますが、都会は都会のまた課題があるのだなということも
感じました。保護者さんのお話は、とても心にしみます。事前配信の保護者さん
のコメントも拝聴いたしました。保護者の皆さんが笑顔でお話されていたのが
心に残りました。お子さんもですが、出会いを通して、保護者の方も人を信頼す
る、頼る、一緒に子育てを楽しむといったお気持ちになっていかれるということ
もあるのだろうなと感じました。たくさんの視点を提案いただき、とても有意義
な時間でした。

○当市において、行政の障害福祉担当課、子育て支援担当課、ファミリーサポ
ートセンター、社協、当事者団体、聞こえ親の会などと、聞こえない・聞こえにく
い子ども、その保護者（聞こえない・聞こえにくい保護者含む）とともに、3年
位かけて、支援体制の構築に取り組んでいるところですが、医師の関りがまだあ
りません。医師会に「あいさつをしている」関係の方がいるので、相談をしてみ

ように思います。また保護者の方とも、第一言語を日本語としたとしても手話を習得することは有用である、ということと一緒に勉強していきたいと思います。これがなかなかそんなに簡単なことではないのですが……。今後もこめっこさんから勉強させていただきたいです。

○事前配信の活動の様子でいつもの活動内容が、より具体的に理解でき、そこに登場される保護者やお子さんの様子からこめっこさんの活動の楽しさが互いの信頼関係の上に成り立っている、手話を難しいものではなく楽しいものとして無理なく親しめるようにされているということがとても良く伝わってきました。合宿での姿もですが、いつもの部屋での活動以外で得られる自然な会話もとても大切なように感じ、色々な場所に足を運びながら学べる手話もあるということを実感しました。

シンポジウムでは、医療機関との連携、他府県の事例など前年の内容より示唆に富むものが多く、まさに今回のシンポジウムタイトル通りの内容で勉強になりました。新生児スクリーニングからノンストップでこめっこさんなどの機関と関われるようにすることは、どの地域でも必要であり、それがなかなか難しいという現状に歯がゆさを感じました。

こども達の自己肯定感を育てるための言語としての手話の必要性を社会がもっと理解し、その場とそこへつながる過程がよりスムーズになればと感じました。

○自己理解、自尊心を高める力を育てる大切さ、獲得習得した手話言語の維持が、心理的な安定となると

のお話を心に留め、どの様なコミュニケーションがお子様のわかるに繋がるのかに注視し、たくさんお喋りができる関わりを心掛け活動に参加したいと改めて思いました。

○医療、教育、福祉各方面の方々のお話を聞くことができ、大変有意義な時間でした。

○保護者の方のお話を聞いたのが非常に参考になりました。情報が得られず不安を感じる期間をいかに短くするか、またさまざまな情報にフラットかつオープンに触れられるようにすることが大切だと思いました。

また、聾教育の「成功」とは？という問いについて、尺度(勉強、スポーツ、俳優など人々を幸せにする)は1つではなく、その子の幸せの尺度はどこにあるのかを見つけるのが大事であるということ、そこでも「多様性」と「寛容性」の大切さが再認識されるというお話に深く納得しました。

○様々な機関からのお話が聞けてとても勉強になりました。全てが連携し合えるように、まずは顔を合わせて挨拶をすると言う部分が特に印象的でした。

○どの方のお話もわかりやすく、多方面からの連携した理解と支援の必要性を改めて感じました。こめっこの活動を必要としている方皆さんに届くことを願います。そんな方々にまずは情報発信が必要だと言う事も。それには、最後に仰った「挨拶ができる関係作り」を心掛けて、自分にもできる事があるかも…なんて思ったりしました。

○ろうスタッフの生き生きした表情が印象的でした。ろうスタッフ当人の感じたことなども、活動内容報告の動画に盛り込んでいただけたら、と感じます。聴覚支援学校で教員をしています。成人した未来像をイメージする参考になりそうです。

○このような問題に医療や療育など専門の方々が真摯に取り組んでおられるのを知り大変感銘を受けました。最後に医師の方が、「早くに手話を勧めることが憚れたが、今日保護者の思いを聞いて学ばされました」と言われていたのが印象的でした。八尾市で3月議会で手話言語条例が議会提案される予定ですが、人工内耳や難聴の方にとっての手話がどういう役割を果たすのかが少し整理できた気がしました。何を持ってろう教育の到達を判断するのかという疑問の投げかけもありました。旧教育基本法の平和国家を作るための人格の完成を全ての子どもに保障できているのかがポイントだと思いました。大阪にこめっこがあって本当によかったです。市町村との連携をどう発展していくのか意識していきたいと思います。

○専門家の皆さんから知識を得ることができ、当事者家族の話しも聞いたことはとても参考になり有意義な時間でした。東広島市でも、聞こえない・聞きにくい子どもたちとその家族へ少しでも支援ができるようにろう乳幼児手話獲得支援事業を展開しているのでとても参考になりました。こめっこの活動が全国に広がることを願っています。

○事前配信は、とても勉強になりましたし、家族からの声は、実感がこもっていました。たくさんの方に、この取り組みの重要性を知っていただき、聞こえない、聞こえにくい子どもたちが、良い環境で成長できるように…私自身頑張りたいと、改めて感じたシンポジウムでした。

○以前から、こめっこの活動についていろいろお聞きしたり、こめっこのホームページに掲載されているいろいろな資料を拝見させていただいてきました。

いろいろ都合が合わず、今回は初めてのシンポジウムへの参加（オンライン）でしたが、具体的な話を聞くことができたことは、自分自身がろう児・ろう者と係わりを持っている中で、同じような思いを持っている方が全国各地にいらっしゃるということ、医療関係者にも中川先生や酒井先生のように難聴児の療育・教育、手話言語について深い理解をいただけている方もいらっしゃるのだとすごく励みになりました。

今から、15 年前に、地元で人工内耳装用の難聴児も含めた、早期支援体制を県行政や県内の医療関係者に提案しても、その意義（特にメリット）について理解していただかず、頓挫した経験があり、どのように訴えていくと良いのか、今回の研修はとても参考になり、私にとっても励みになりました。

まだ、地元の難聴児支援体制は、十分とは言えず2年前に協議会を立ち上げ、自分は職務の関係上直接かかわることはできませんが、医療関係者、教育関係者、福祉関係者、行政関係者が連携をもち、まずは0歳～2歳（3歳）までの間の体制構築を議論しながら具体的に進めているようです。その中に、今回の研修の中で中川先生らが説明していたことを、改めて共有しながら体制の構築をできたらと思いました。

大阪の方も順風満帆とは言えないところもたくさんあったかと思います。それでも、今回のシンポジウムでプラスの側面をたくさん見ることができたことは、良かったです。これからも頑張りたいと思います。

○対面で参加することにより、発表者の思いがより感じられました。「まずは挨拶のできる間柄」を目指し、臆せず発信してみたいと思いました。

○どうしても、東京・大阪の活動は特別に思えてしまいます。子ども達の事（今後のろう児の行く末）を考えているろう者の人数が多い事、公共交通機関の交通事情が充実していて、集まりにアクセスしやすい事、核となる人材が地方に比べて豊かな事、自ら声をあげて活動しているロールモデルとなるろう者が多い事。それでも、地方でも始めないことには何も生まれない。やれない（やらない）理由を述べてる時間があるなら、やれる可能性を模索する方に時間を、ですよね。今の自分達の活動が後々も続けられるように、さらに豊かになるように、今以上に知恵を出していかななくては、と思えたシンポジウムでした。

物井さんの報告、武居さんのお話し、保護者の方のお話しが特に印象に残りました。事前配信もとても参考になりました。キャンプの様子、というか、キャンプを行うにあたってろう・聴のスタッフの方々がどのようなディスカッションを

経て、ご準備されてどこまで子ども達に任せたのか、という所をもっと知りたかったです。こめっこメソッドを今後どのように伝えて下さるのか、楽しみにしています。今回も頭と心を揺さぶられるシンポジウムでした。

○行政、医療関係者、教育者、親のネットワークが確立すれば、我が子が聞こえないとわかった親さんが早期にさまざまな情報を得ることで、これからの子育てへの不安から早いうちに立ち直れると思いました。そうすれば、聞こえない子供も自分にあった自分の言葉を持って人に伝える事が出来、自己肯定感も育つと思いました。

○助産師として新生児スクリーニングにリファーマーとなった母子のその後を詳しく知ることができ、声かけもかわってくると感じました。より多くの助産師、産婦人科、小児科に広がっていければ良いなと思います。

○こめっこのことは以前より知っておりました。詳しく知りたいと思っておりましたので、チラシを見た時にすぐに視聴したいと思いました。講義も、本当にこれからの子どもたちの未来を考える上で大切なことばかりです。聴力に問題を抱えた子ども達、保護者様。連携して隙間のない支援を一生繋がることの重要性を改めて感じました。あたしは、聾学校の寄宿舎に勤めております。低年齢化する職場の支援をする上で、たくさんのことを学ぶ必要があると感じております。また、幼児さんむけの交流会のスタッフとして、より一層深めていくためにも、大切な研修となりました。保護者の方が、ろう者の方と交流したいとおっしゃってた意味を改めて知ることができました。今後もこめっこさんを目標に、講義の先生方の一言一言を再現して、日々の支援に努めたいと思います。

○聞こえない、聞こえにくい子どもたちが「幸せ」を感じるには、家庭と社会の温かい環境が大切と痛感しました。学校で行われているインクルーシブ教育が、形式的な段階を超えて、一日も早く多様性と寛容を取り入れた本当のインクルーシブ教育になることを心から願って、私もここでできることを頑張りたいと思います。私たちの地域にも「こめっこ」のような場があれば、聞こえない、聞こえにくい子ども達の幸福度はもっと上がると思います。皆さまの活動をこれからも陰ながら応援したいと思います。

○岡山県での施策を検討するにあたり大変参考になりました。

○研究機関・医療・教育・療育の連携が今後、さらに強化されると良いなと思い

ました。

○小さな子には楽しみながら手話に親しめるよう、大きくなった子には人生の先輩としての姿を見せながらと、各年代の子どもたちに合った対応で、自然に手話を習得できるように子どもたちと触れ合っているこめっこの皆様の姿勢に感銘を受けました。親御さんの感想を聞いても、こめっこの存在が、ろう・難聴児の支援に果たしている役割は、計り知れないと思いました。

○耳鼻科の先生からは専門の話を具体的に話していただき、具体的な提案の前にまず保護者の気持ちに寄り添って気持ちの整理がつくまで待つことなどを聞き、すごく良い体制だと思いました。

パパママからは産まれた時の悩む気持ちや不安について話していただき、子育てを楽しむ余裕があまり無かったと言っていたことに涙が出てきそうになりました。今はこめっこに出会えて生き生きと過ごしているので、こめっこという場があって本当に良かったと思います。パパママだけではなく、こめっこに通っているご家族がみんな、そのような気持ちを抱えているのだなと想像し、改めてこめっこをより安心できる場にしていきたいという気持ちが強くなりました。生の声を聞くことができとても良かったです。

印象に残ったことは、セルフアドボカシーについてのお話と、こめっこの本当の成果、子どもたちが5年後10年後、自分の言葉でこめっこをどのように話すか、というお話です。この将来を楽しみにしつつ、活動に取り組んでいきたいと思いました。

○シンポジウムは大変有意義で、たくさんの学び、気付きがありました。ハイブリッド開催だったので、遠方からも参加しやすく、大変ありがたかったです。本校にもいろいろな聴力、実態のお子さんが在籍しますが、共通のみんなが分かり合える言葉は、やはり手話だなあ、とても大切なことだなあと改めて強く感じました。

○関係づくりが難しい医療側から療育や早期からの支援が必要なことをわかりやすく話していただき、良かった。もっと現場の医療関係者(産科、小児科、耳鼻咽喉科)に理解が深まることを願っています。

○毎回得るものが多いシンポジウムです。参加して大きくなった子のお話や、こめっこの子どもが進学・通学する聾学校との連携なども伺ってみたいと思いました。

○聴覚障害の方々の手話の習得、聞こえない中でのあらゆることを理解することがどの様に習得していくのか知りたかったことです。様々な活動を知ることができました。シンポジウムには午前の仕事が長引いたため途中からの視聴になりましたが、こめっこの活動、保護者の思い、ひだまり MOE 等を知ることができたことは良かったです。手話を学びお役に立ちたいと思いました。

○とても良かったです。特に保護者の「聞こえたらよかったのにと子どもに思わせないようにしたい」という声が胸に刺さりました。パネラーの中に「早期から手話へと保護者に言うのは、医療からすると心苦しい」という正直なご感想がありました。何が心苦しくさせているのか、そこにキーがあるのかもと思いました。

○こめっこの活動の成果(効果)がシンポジウムで伝わります。更に各地への広がりが期待されます

○事前配信しか視聴できませんでしたが、乳幼児から手話を習得することが情緒的にも身体発達のにも効果があることがわかり、非常に有意義な取組だと思いました。大阪に住んでいる聴覚障がい児の御家族は、こめっこがあることで安心して子育てできると思いました。

○学ぶことが非常に多く有意義な時間を過ごすことができました。今まで自分とは関わりのない世界だったので、こうした気付きを得ることの大切さを知りました。周りの人にももっと知って欲しいと思います。

○これからも手話と共に生きる子どもたちの支援をぜひ継続していただけたらうれしいです。そして、こうした支援の視点が広く全国に行き渡っていくことを、一難聴児の保護者として願ってやみません。

○様々な専門的視点から聴覚障害児教育について学んだり考えたりすることができた。これまでいかに社会資源の連携がなされてこなかったか思い知りショックだったが、当シンポジウムに出会えたこの機会をスタートととらえて聴覚障害者をめぐるあらゆる環境改善の一助となれるよう尽力する決意ができたことに感謝申し上げたい。

○ろう児にとってより早期からのコミュニティの場はとてもだいじであること、そして親御さんへの正しい情報提供と的確な支援が必要だと感じました。手話言語にするか人工内耳にして音声言語にするかといった簡単な選択ではないこ

とも改めて感じました。

○耳鼻科の先生から治療・経過観察以外の難聴児への支援やセルフアドボカシーに関するお話を聞くことができて良かった。近畿でも、より医療・療育・教育・福祉が連携を図り、難聴児への支援が広がっていくことを期待したい。自分もその一人になりたいと思った。

○きこえない子どもにとって手話言語が必要であるということがよくわかりました。こめっこに通いたいと思う保護者は手話言語が必要だと思って通われていると思いますので、保護者も自ら手話言語を学ばれると思います。どの保護者もそのような考えを持ってもらえたらいいと思いました。

○年々こめっこの取り組みの成果が目に見えてきて大変素晴らしいと感じています。こめっこメソッドが全国に広がるといいなと思っています。保護者が子育てを楽しんでいると愛着行動につながることは子どもにとっても幸せなことです。シンポジウムで学んだことを自分の仕事の中でも活かしていきたいと思っています。

○具体的な活動を見ることができ、手話でコミュニケーションを図ってきた子どもたちの変化も知ることができました。保護者さんの声は胸に刺さるものがあり、子どもたちの未来のために0歳児から手話を使う大切さを実感しました。

○継続した取組とその報告について今後も知りたいと思いました。

○ご家族の方が、話されていた、お子さんが難聴だとわかった時、それならば手話でコミュニケーションとればいいや、と深刻にとらえなかったと話されていたのが、感銘を受けました。

○シンポジウムに参加している耳鼻科医のように、ほかの耳鼻科医も手話に興味を持ってもらいたい。

○早期支援と分かる環境で育てることの大切さを改めて感じました。週2、3回は親子ともに療育等に通えたら理想ですが、働いていると満足する通い方ができず、とても心苦しいです。共働きが増えている現代、障がい児を育てながらも働くことを支援する取組みが各企業等で当たり前になってほしいです。

○子どもたちとの係わり方など、日々迷った時に今日学んだことを生かしたいと思います。手話優位のお子さんで、正確に発達検査を受けられていないお子さんが何人かいます。個々の先生方の努力や良心だけではどうにもならないこともあり、1秒でも早く実用化されることを望みます。とても素晴らしい取り組みがたくさんあります。ずっと続けてほしいです。

○「ご家族の声」の中で、「病院から手話は要らない」と言われたと話されていたことに、驚きました。まだ、理解してもらっていない病院もあるんですね・・・今後もこめっこ活動が続けていっていただくことで、社会全体にきこえにくい子どもたちへの理解が広がってってくれるといいな、と思いました。

○充実したシンポジウム、ありがとうございました。今回も、具体的でよく解り、内容豊富。大いに勉強させていただきました。新年度、ますますのくこめっこ>の発展、確実な前進を確信いたします。

○どの御発表も有意義なものでした。中川医師が教育機関と連携を取りながら、医師の立場で難聴児の将来を見通した支援を実践される姿勢が、これからの若い医師たちに伝承されるといいなと思いました。

こめっこにつながった保護者が、手話でわかることの大切さを実感し、こめっこに通いながら、その後お子さんがきこえていればよかったと思ったことはないという言葉が心に響きました。保護者がきこえないわが子を肯定的に受け止められるよう育んだこめっこの意義は大きいなと思いました。

当事者として早川先生が障害認識を乳幼児相談で保護者支援の柱として大事にしていることは、本当に大事なことだと思います。こうした支援者の元で育つ保護者は幸せですね。難聴児の自尊心を育てることの大切さを発信できた素敵なシンポジウムでした。

○乳幼児支援について、とても参考になりました。保護者の立場のお話も良かったです。きこえない・きこえにくい子どもには、目でコミュニケーションを取る、手話言語が共通言語だと思いました。

あとがき

こめっこの活動が始まって3年目、2019年秋に、私たちはフランス・トゥールーズにあるガブリエル・サジュス保育学校を尋ねました。日本のろう学校幼稚部に当たる年齢の子どもたちが、当時22名在籍していました。デフファミリーの子どもたちがほとんどで、フランス手話を母語として、フランス語を学ぶバイリンガル教育の学校でした。2019年度の「大阪府手話言語条例シンポジウム 報告書」に、次のように記載しています。

午後のフランス手話授業の「絵本よみ」では、…教員の手話のスピードはゆっくりではなく、大人が会話する“普通”の速さであったが、幼児ら全員が集中してよみ手の手話を見ていた。後列に座っていた5歳の女兒2名が絵本の内容についておしゃべりしていたのが印象的だった。

教室の隅にはソファが置かれた絵本コーナーがあった。子どもたちは、一人で読んだり、あるいは友達とよみ合いをしたり、絵本に親しんでいる様子うかがえた。私たちに絵本よみをしてくれたり、授業の内容について説明してくれたりなど、手話で自分の考えや思いを伝え、自らかかわろうとする力が育まれている姿を見ることができた。

その様子は、こめっこ活動が目指すべき一つの理想の姿となりました。ただし、私たちの支援する子どもたちの大半は聴家族に誕生します。そうした子どもたちも、べびこめに出会って日本手話を吸収し、“わかる”を実感し、自由にわしゃわしゃ会話する子に育ってくれることを願って、ご家族と共に歩んできました。そして今、べびこめに通う2歳台から3歳の子どもたちが、ネイティブサイナーの絵本よみに食い入るように集中し、自ら絵本を開き、スタッフやお友達を相手に語りかけます。その豊かな表情とかっこいい指の動きを見守る保護者の温かい笑顔が、スタッフにとってはかけがえのない報酬です。

一方、「手話言語獲得と聴覚活用を支援の両輪」と捉えるこめっこの姿勢からは、医療、療育、福祉、教育等と連携し、一人の子どもを皆で応援していくネットワークづくりがますます大切になってきたと感じています。今回のシンポジウムは、その意味でとても貴重な機会となりました。従来以上に多岐にわたる領域からの参加があり、巻末で紹介したアンケート回答に見るように、多くの感想を伝えてくださいました。

この春、4名のろう児と1名のソーダくん(きこえない弟をもつお兄ちゃん)が、「もあこめ」を卒業しました。そして、彼らの希望によって、中学1年生のこめっこサブスタッフが誕生することになりました！ なかなか変わらない大人の世界の難しさはありますが、私たちがわずかずつつも挑戦していくことで、子どもたちが社会や教育を変えていってくれるのかもしれない。そう思えるくらい、子どもたちの成長のすごさに日々驚かされながら、エネルギーをもらっています。

日本財団からの助成に、改めて深く感謝申し上げます。実践と研究をとおして培ってきた「こめっこ」の支援システムとメソッドを全国に広げる努力を、今後も大阪府と連携しながら、皆さまの協力を得て展開してまいります。

2025年3月末日

大阪府手話言語条例評価部会長

「こめっこ」スーパーバイザー

河崎佳子(神戸大学)

この冊子は、令和 6 年度日本財団の助成を受けて作成しました。

